教育研究會編輯

中等教科

明治讀本訂正字解

第三學年用

1250

特30ヲ
497

芳賀矢一氏編

教育研究會編纂（第一二學年用）

中等教科明治讀本訂正字解

東京　文友堂發兌

明治
42　2　27
內交

中等教科 明治讀本訂正字解

教育研究會編纂

巻一

一　八幡太郎

○朱雀大路（昔京都大内裏正面の朱雀門より、南方の羅城門に至るまでの大道の稱にして、今の京都市千本通りに當る。又シユシヤク、シユザカ、スザカとも訓めり。）○霜をふんで（初冬の霜のふる頃の意）○馬上（軍馬の上、即ち陣中の意）○陸奥（明治以前に奥州と云ひし地方、今の磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の地をいふ）○勿來關（常陸と磐城との國境にあり、昔陸奥に通ずる關所たりしが、今日本鐵道勿來驛より凡十町許の處に其の址あり）○見まがふ（見ちがへる）○磯山風（磯邊の山より吹き來る風）○一しきり（ひとさかり）○右往左往（右へゆきまた左へゆくこと）○またゝくうちに（忽ちに）○寒からぬ（櫻花を雪に喩へたるなり）○鞍坪（鞍の上部の乘るべき所をいふ）○吹く風をの歌（なこそは吹く風を來そといふ詞を關の名に言ひかけたるなり、一首の意は關の名に勿來と言へる如く、吹く風がこ

の櫻花の邊には吹き來ること勿れと思へども、無情にも風が吹き來りて、道も狹くなるばかりに花のちることよ、嗚呼惜しいことであるわい、となり、今その關の址にこの歌を刻したる碑あり　○高らかに（聲高く）　○口ずさむ（吟ず）　○八幡太郎（源義家の稱前九年の役父賴義に從ひて安倍貞任を討ち、陸奥守鎭守府將軍となり、後三年の役には、淸原眞衡を助けて淸原淸衡、家衡を滅し、天仁元年歿す、年六十八才）　○歎賞（感じほめること）

二　植物の繁殖

一粒萬倍（一粒の種子を植うれば、千萬粒の種子を獲らるゝ如く、何事も些少の物より巨多の利益を得らるべき意の古き諺あり）　○道理（すぢみち）　○同族（おなじ種族）　○繁茂（しげる）　○人畜（人と畜類と）　○氣候（氣溫、濕度、空氣の流動、又は天氣の摸樣、又は雲雨雪霜等の變化の狀態の稱）　○原因（おこりもと）　○活力（生活の力）　○生活の地盤（世に處る根據地）　○母木（おやき）　○堆積（うづ高くつもる）　○生存の餘地（生き長らへるに餘裕のある所）　○自然（人力に對して天然をいふ語）　○飛散（とびちる）　○まに〳〵（まゝに任せて）　○東西（あちらこちら）　○蒲公英（菊科に屬する草、原野に多し、春の末に數圓莖を出し、內空にして高さ五寸許、黃又は白色の不整齊なる合瓣花を開き、後に絮となりて莖頭に玉をなし風に飛散す）　○傳播（ひろまること）　○松の實（まつかさ又松毬）　○困難（こまること）　○時機（場合しほ）　○芽生（種子より生したる木、めだし）　○輾轉（ころ〳〵ところがる）　○禽獸（とりけもの）　○羽毛（はねやけ）　○營養分（滋養となる性分）　○通過（とほりすぎる）　○洪水（おほみづ）　○遠隔の土地（遠くかけはなれたる所）、　○はては（しまひには）　○對岸（向ふ側の岸）　○漂着（たゞよひつく）　○流寓（水に流され寄る）

三　清新なる空氣

居留（外國の居留地に住むこと）　○隙を生じ（不和を起し）　○黑穴（闇黑なる土中の牢獄をさしていふ）　○牢獄に投じ（らうやに入れる）　○囚人（罪人）　○鎖す（しめる）　○悲慘（いたましくあはれなること）　○紛騷（爭ひさわぐこと）　○呻吟苦悶の聲（うめきくるしむこゑ）　○翌朝（次の日の朝）　○獄卒（牢屋の番人）　○絕息（息がたえて死ぬこと）　○死屍（しがい）　○酷熱（非常にあつきこと）　○腐敗（くさること）　○吾人（われわれ）　○呼吸（動物が息を呼いたり吸つたりする作用）　○酸素（氣体元素の一種にて、空氣の一成分なり、よく物体を燃やす性質を有し、動物の呼吸に欠くべからざるものなり）　○炭酸瓦斯（炭素と酸素との化合したる氣體にして動物の生活に不適有毒なり）　○室內（へやの中）　○限あ

り（制限がある、ほどがある、）○運命（天命のまはりあはせ）○群集（むらがりあつまること）○不愉快（心地のよからぬこと）○清新（きよくあたらしきこと）○清淨（きよくけがれなきこと）○清潔（きよきこと）○健康（すこやか、ぢやうぶ）○卒倒（俄かに人事不省となりてたふるゝこと）○蘇る（生きかへる）○閉鎖（とざすこと）○差別（ちがひ、わけへだて）○衛生の心得（飲食、居住衣服、其他身體に關する百般の事に注意して身體の健康をはかる心がけ）○起居動作（たちゐふるまひ）○睡眠時（ねむつて居る間）○密閉（きつちりとしめること）○開放（けはなす）○流通す（とほす）

四　人體の構造

つらつら（つくづく、よくよく、）○巧妙（たくみなること）○完全（欠點なきこと）○重寶（都合のよきこと）○外界一切（周圍に現はれる現象殘らず）○事物（もの）○見聞（見たり聞いたりすること）○報告（知らせる）○塵埃（ほこり）○保護す（かばい守る）○鼓膜（耳の底のうすき膜）○屈折し（まがりて）○粘汁（ねばきしる）○侵入（をかし入ること）○容貌（樣子、姿）○與りて力あり（其爲に他の物を助けるをいふ）○香氣（にほひ）○審査（しらべること）○香臭（にほひやくさみ）○關門（大切なる入り口）○發音機關（音聲を出すに要する機械）○思想（かんがへ）○なだむ（機嫌をとる）○猥に（むやみに）○不測の災害（思ひかけぬわざはひ）○口は禍の門（言はずともすむべき余計なことをいひて禍を招くにたとへいふ）○駟も舌に及ばず（駟は一車を四馬にひかしむるをいふ言葉の一旦舌より出て後は如何ともすべからざるをいふ）○屈伸自在（まげたりのばすことが自由なること）○熟練（なれて巧になること）○上手（事に巧妙なるをいふ）○下手（事に拙きこと）○肋骨（あばらぼね）○胸部（むね）○血液（ち）○傳達（つたへること）○內臟（體內のざうふ）○任務（つとめ）○構造（くみたて）○複雜（こみ入つて居ること）○不可思議（ふしぎ）○視覺（見る所の感覺）○嗅覺（かぐ所の感覺）○優りたらん（まさつて居るであらう）○爪牙の鋭（爪や牙のするさ）○羽毛の美（羽や毛のうつくしさ）○虎狼（とらやおほかみ）○猛獸（たけきけもの）○檻（獸等を入れおく室）○熊象（くまやぞう）○巨獸（大きなけもの）○靈魂の力（たましひの力、腦のはたらき）○人は萬物の靈なり（人は天地間にあらゆる總ての物の中の最もすぐれたるものである）

五　盲啞學校（二）

出稼（他國に出てゝはたらくこと）　○廢人（かたわもの、此處にては役に立たぬ者といふ意）　○出入先（愛顧を受けて、しげく出入りする家）　○夫人（奥樣）　○不便がつて（かわいさうに思つて）　○盲啞學校（盲や啞に普通學、音樂、鍼治、按摩、圖畫、彫刻、指物、裁縫等を教ふる所にて、盲生、啞生各別に其業を課す、現今我國には、東京盲啞學校、京都市盲啞院、大坂盲啞學校を始めとして、すべて十六校あり）　○敎育（學問、道德を教ふること）　○一しほ（一層）　○海山千里を隔てた（海や山を隔てゝ千里も離れて居る）　○樣子あつて（都合があつて）　○一應（ひとまづ）　○本土（ほんごく、他國より自分の故國をさしていふ）　○草鞋がけのまゝ（わらぢをはいたまゝ）　○休憩（やすみ）　○玄關（正面の入口）　○うなづく（承知の意を表して頭を前に振ふ）　○受附（書狀、來客などの取次をなす所）　○來意を通ず（來たわけをいふ）　○應接所（來訪者、面會人等にあふ所）　○會釋（あいさつすること）　○椅子についた（椅子に腰をかけた）　○何の因果で（どういふ不仕合せで）　○言ひさして（言いかけて）　○聲を曇らせた（涙が出て聲が濁つたとの意）　○不審（ふしぎ、おかしい）　○冗談（ふざけること）　○安らか（らく、きつ）　○明かに（はつきりと）

六　盲啞學校（三）

意を通ず（思つたことを相手にわからせる）　○夫人の情（奥樣のおかげ）　○養育（やしなひそだつること）　○衣食させて（着せたり食べさせられて）　○夢さら（夢程にも毫しも）　○思ひ設けぬ（思ひもかけぬ）　○設明（ときあかすこと）　○趣意（考へ意見）　○複雜（こみ入つたこと）　○筆談（口で言はずに、字を書いて話すこと）　○剩へ（其の上、おまけに）　○開校以來（學校が始まつてから此方）　○會得させる（わからせる）　○點字盤（盲生の指頭にて撫で摩りながら讀み下すやうに、厚き西洋紙に點を以て刻印せる文字を點字といふ。この刻印をなすための器具を點字盤といひ、盤と定規と鐵との三品より成り、大小及び懷中用の數種あり、盤は木製にて、通例は幅五寸六分、竪九寸四分、厚さ四分の者を用ふ。佛蘭西人の原案にして、我國盲生に行はるゝ者は東京盲啞學校敎諭石川倉次郎氏の創案なり）　○鍼治按摩（鍼醫の術とあんまの術）　○技藝（わざごと）　○わんぱく（いたづら）　○敎訓（をしへさとす）　○敎授（をしへる）　○老練（よくなれて上手なこと）　○勞苦（ほねをり）　○せめての（心だけの）

七　學友慰問の文

輕快（病氣の稍よくなりたること）○恢復期（なほりぎは）○精々（よくよく）○加養（養生すること）○休校（學校を休むこと）○校内（學校の内）○庭場（競技場）○L.F.（Left fielder の略字・左野手、又は左翼手）○新加（新たに加入すること）○轉任（他の官職に轉ずること）○來任（來て職につく）○課業（けいこ）○とんと（毫しも）○競漕（端艇にて勝敗をなすこと）○挑戰（戰をいどむこと）○應諾（承知すること）○選手（すぐれて競技に巧みなる者）○腫物（できもの）○襲はる（かゝる）○雄姿（勇ましき姿）○切に（ねんごろに）○代表（或者にかはりて意思を表すこと）○案下（宛名の下に書く語おそばといふ意）

八　世界は目前にあり

古來（昔から）○有名（名高き）○產地（出來る所）○精良（すぐれてよきこと）○輸入（外國の生產物を自由に買ひ入るゝこと）○山陽鐵道筋（山陽鐵道の道すぢ）○製紙（紙をつくること）○原料（物を作るたね）○北アメリカのカナダ（英領にて、北米の北邊を占め、合衆國と接し、太平、太西の兩洋に望む）○北端（北のはし）○スウェーデン（スカンヂナビヤ半島の東部一帶の國）○ノルウェー（スウェーデンの西部一帶の國）○肥料（こやし）○骨粉（諸動物の骨を粉末にして製したる肥料）○オーストラリア（我國の正南に當る南半球の大陸にて。英國の殖民地）○硝石（窒素、酸素、及びカリウムの化合物にして、菱形の結晶をなし、主として、火藥、烟花の原料として用ゐらる）○南アメリカのチレ（南米南端の西岸一帶を占めたる帶狀の國）○摺附木 ○從來（以前より）○輸出（日本の製產物を外國に送り出すこと）○巧妙（たくみなること）○音樂器（音樂に用ふる道具）○需用（もとむること）○麥稈眞田の編方（麥の莖の中空白く光る部分を麥稈といふ、眞田紐の如くにあみて夏帽子を作るに用ゐるを麥稈眞田といふ）○東洋（アジアの東方即ち日本及び支那等の稱）○南洋（我國よりマレイ群島及大洋洲一帶をさしていふ稱）○固有（もとよりあること）○壓倒（おさへつけられること）○傳來（つたはり來れること）○ロシヤ領シベリア（北亞細亞大平原の地をいふ）○共通（双方へ共に通ずること）○隣家（となり）○事情（様子、事柄）○必要（なくてはならぬこと）

九　各國の國旗

紋章（もんじるし）○旗章（はたじるし）○家紋（家々の紋）○色彩（いろどり）○祝賀會（祝ひ事ある時の寄り合）○際す（出あ

ふ○連ぬ（ならべる）○百花爛熳（澤山の花の咲き亂れたる樣にいふ）○商旗（商用上の旗）○軍旗（軍事上に用ふる旗）○差別（ちがひ）○見渡す（見る）○多くは（大抵は）○同盟國（國家が共通或は交換の目的を達せんため共同して同一の行動をせんと約せし國）○染分（二色以上の色をわけてそめ出すこと）○順序（ならびかた）○諸子（諸君）○熟知（よく知つて居ること）○うら（反對）○會合（よりあひ）○催す（行ふ）○紀念（かたみ、長く忘れぬためのしるし）○描く（畫き出す）○天躰（天に現るゝ物體、即ち日月星辰の稱）○弦月（ゆみはりつき）○建國當時（國家をたてる時分）○聯邦（二國以上が條約によりて、其政務を共同して處理するために聯合したるもの）○紅白二條（あかしろの二すぢ）○現今（いま）○星辰（ほし）○八卦（八種の卦、うらなひ）○迷信（道理にあらぬことを信ずるをいふ）○國柄（國の狀態）○天壤と窮なき（天地と共に限りなき）○神勅（天照大神が天孫瓊々杵命を天下しましませし時、下し玉ひしみことのり）○單純（簡單なること）○淡泊（あつさり）○性情（性質人情）○物の數にもあらず（くらべものにならぬ、何でもない）○豊さか上る朝日影（盛んに輝やきて登る朝日の光）○宇內（天下、全世界）○赫々（光り輝くことにいふ）○光明（ひかり）○四表を照す（四方をてらす）○勇武（勇ましく武きこと）

一〇　人種の別

全世界（世界全體）○人口（人間の數）○皮膚（身體の外皮）○容貌（すがたかたち）○毛髮（身體の毛）○差異（ちがひ）○若干（いくばく）○人種（人間の種類）○ブルメンバッハ（有名なる博物學者にて、又醫學の泰斗なり西曆一七五二年に生れ一八四〇年に歿す）○稍（少し）○顴骨（ほゝぼね）○眼睛（目のたま）○雛形（標本、例）○通例（普通）○算入す（數へ入れる）○常とす（あたりまへである）○口髭（鼻の下に生ずる鬚）○頰鬚（頰より頤にかけて生ずる鬚）○髭ゆたかなり（ひげが澤山ある）○歐米人（歐羅巴人と亞米利加人）○因みて（よりて）○褐色（茶色）○外貌（かほ）○恰好（かたち）○マレー半島（北部は暹羅王國の領地にて、南部は英領及ひ英國保護地たり）○マレーシア諸島（臺灣近傍よりマレー半島近傍の南洋に散布せる諸島をいひ、又マレー群島又東印度諸島といふ、スマトラ、瓜哇、ボル子オ、比律賓群島等を含めり）○顴骨秀で（ほゝぼねが高い）○直立す（眞直に立つ）○特質（特別なる性質）○基づき（標準として、土臺として）○區別（部わけ）○開化の程度（人智の開けたほどあい）○智力發達の差（智識の進歩のちがひ）○大躰（ざつとした）○階

級（等級、くらゐ）○經驗（實地に經て來りたること）○進步（すゝみ）○豫め（前以て）○道理（すぢみち）○文明（文化の明かなること）○未開（まだ開けぬ）○狀態（ありさま）○概評（あらましの批評）

二　造船の話

大瀛の水（大海の水）○洋々（水の溢るゝ程滿ちたるさま）○五大洲（地球上の五つの大陸、即ちアジア、ヨーロッパ、アフリカ及南北アメリカの稱）○繞る（とりまく）○倫敦橋（英國首府倫敦市中を貫通せるテームス河上に架す）○接す（つく）○公道（公衆一般の往來すべき通路）○航海（船舶にのりて海を渡ること）○迅速（早きこと）○安全（心配のなきこと）○千里比隣の喩（遠き處も近き隣にある處の如くに思ふたとへ）○目前（まのあたり、實際に）○發明（人の未だ知らざることを、案出し、未だ爲さゞることを爲すこと、考へ出すこと）○ペンシルバニア洲（北米合衆國紐育州の南部にあり）○ロバート、フルトン（米國の工學家、西歷一七六五ペンシルバニア州に生れ、英、佛に遊び、百花鐵を發明し、後本國に歸りて、蒸氣船發明の功を完うし、一八一五年死せり）○暗渠（地を潛りて船舶の運行し得る水道等をいふ、うめみぞ、地中溝、埋設下水溝）○水雷艇（敵艦を破碎するために水雷を發射する小艇）○一生の心血を濺ぐ（一生の精力を集中する）○大事業（大仕事）○セイヌ河（巴里城を貫流して英吉利海峽に入る川、運輸甚だ便なり）○試運轉（汽船、汽車等の新造せられたる時、其機關を試驗する爲に機關を運轉するをいふ）○改善（よくなほす）○ホドソン河（河口に紐育府あり、船舶常に輻輳し要用なる河なり）○航路（船のゆきみち）○濫觴（事物のはじまり）○百噸（噸は英國の量名にして、一噸は我國の二百七十貫九百四十六匁に當る）○内外（位程などいふ意）○爾後（それより後）○驚くべき（非常なる）○造船所（西洋式の汽船其他の船を製造する）○橫須賀（相模にあり、我國第一の軍港なり）○吳（安藝國廣島市の東南にあり第二海軍區鎭守府をおく）○三菱（三菱造船所長崎にあり）○川崎（川崎造船所神戸にあり）○緖明（緖明造船所、品川臺場にあり）○技師（官廳又は諸會社などにて、專門の智識を要する特別の技をつかさどる職名）○設計（設備の計畫）○設計圖（船舶其他種々の建物を作るに必要なるものにて設計をなすための圖面）○縮圖（小さく縮めたる圖）○實物大（ほんものと同じ大きさ）○縱斷圖（瓜を縱に切りたる如く、縱に割りて見せたる平面圖）○橫斷圖（瓜を橫に切りたる如く、橫に斷ちて見せたる平面圖）○精密極る（非常にこまかくくはしき）○技手（製作の技術に從事する人）○迂濶（うつかり）○利目（利く力効力）○築造（こしらへ）○工場（仕事をする處）○所要（入用）○船材（船を作るに用ふる材料）○大規模

大仕かけ　○監督《カントク》（取り締り）　○就中《ナカンヅク》（とりわけ其の中で）　○目覺《メザマ》し（立派なり）　○運轉《ウンテン》（まはす）　○船躰《センタイ》（船の體）　○材料《サイレウ》（種）　○整《トヽノ》ふ（そなへるそろへる）　○船臺《センダイ》（船體をのせて支ふる臺、中央に龍骨の嵌する溝あり）　○龍骨《キール》（船體の基礎となる材）　○木船《モクセン》（木で作つた船）　○船底《センテイ》（ふなそこ）　○方向《ハウカウ》（むき）　○船尾《センビ》（ふねのとも）　○舵《カヂ》（艫につけて舟の方向を定むる舟具）　○浪《ナミ》に弄《モテアソ》ばれ（波の自由にせられ）　○憂《ウレヒ》（心配）　○進航《シンカウ》（船を進むること）　○吟味《キンミ》（選りしらべること）　○肋材《ロクザイ》（船材の助骨となる材）　○梁《ハリ》（船梁とて肋骨を援する材をいふ）　○舷側《ゲンソク》（ふなばたふなべり）　○甲板《カンパン》（大いなる船の、上部の廣く平かにして、木板若しくは鐵板などを一面に張りつめたる所、之に上中下あり）　○主部《シユブ》（大切なる部分）　○簡單《カンタン》（手短か、ざつとした）　○張板《ハリイタ》（外板ともいひ、肋材の外面に打ち着くる板をいふ）　○溝《ミゾ》（輕くして丈夫ならしむるため、又他の材をとりくはす爲に設けたる溝なり）　○副材《フクザイ》（本材にそへて控材と用ふることをいふ）　○受材《ウケザイ》（立てたる材を支ふる爲めに斜に横へたる木）　○無數《ムスウ》（澤山の）　○附屬物《フゾクブツ》（つきもの）　○學理《ガクリ》（學問上の理窟）　○機關《キクワン》（蒸汽機關）　○マスト（檣）　○裝置《サウチ》（具へつける）　○造作《ザウサク》（建具）　○進水《シンスヰ》（船舶大體の製作を終了して、船渠に水を入れ外部に漕ぎ出すをいふ、ふなおろし）

二二　二人《ニニン》の希望《キバウ》

磯《イソ》ぎは（湖海の波うちぎはまべ）　○たゝふ（水を湛たす）　○童《ワラベ》（子供）　○彼方《カナタ》（あちら）　○若布《ワカメ》（褐色藻に屬する海藻、昆布に似、綠色にして滑なり、食用に供す）　○綺麗《キレイ》（うつくしき）　○世界《セカイ》の果《ハテ》へ（地球上あらゆる諸國のはてへ向つての意）　○希望《キバウ》の花《ハナ》（美しき望みを花に喩へていふ）　○色《イロ》どる（色をつける）　○朝日《アサヒ》かげ（朝日の光）　○磯山松《イソヤママツ》（磯邊の山にある松）　○眞砂《マサゴ》（細かき砂）　○未來《ミライ》（將來、後日）　○手《テ》を引《ヒ》き連《ツ》れ（手をとりあひて）

二三　水《ミヅ》は萬物《バンブツ》の母《ハヽ》

萬物《バンブツ》（有りと有らゆる物）　○はぐゝむ（養ひ育てる）　○慈母《ジボ》（いつくしみ深き母）　○無《ナ》くんば（なかつたならば）　○生物《セイブツ》（命のあるもの）　○生命《セイメイ》（いのち）　○全地球《ゼンチキウ》（地球殘らず）　○沙漠《サバク》（沙のみにて流水草木もなき土地）　○臺所《ダイドコロ》（食物を調理する所）　○調理《テウリ》（料理すること）　○居間《ヰマ》（部屋）　○用便《ヨウベン》（ようたし）　○ひとしく（同じく）　○間斷《カンダン》なく（休みなしに）　○表面《ヘウメン》（うはべ）　○周旋《シウセン》（ぐる）

（〱めぐること）　○注《ソヽ》ぐ（入る）　○水蒸氣《スヰジヨウキ》（水の氣體に變じたるもの）　○空中《クウチユウ》（そら）　○谷間《タニマ》（たにあひ）　○泉《イヅミ》（地中を流動する水の地表に湧き出づるもの）　○源《ミナモト》（もと）　○循環《ジユンクワン》（環の如く幾度となくめぐること）　○寸時《スンジ》（一寸の間）　○川澤湖沼《センタクコセウ》（川、澤（低くして草等の生えたる濕地）湖（四面陸にて圍まれ、淡水の滿ひたる所）沼（泥土の深き湖））　○嶺《イタヾキ》（てつぺん）　○到る所《イタルトコロ》（何處にも）　○合算《ガツサン》（合せて數へる）　○面積《メンセキ》（ひろさ）　○生活《セイクワツ》（はたらきうごくこと）　○繁殖《ハンシヨク》（ふゑますこと）　○遍滿《ヘンマン》（隅々まで充分行き渡ること）　○居所《キヨシヨ》（居どころ）　○往々《ワウ〳〵》（時として）　○遠隔《エンカク》（遠くかけ離れたること）　○渴《カツ》を醫《イ》す（かはきをさめる）　○海洋《カイヤウ》（うみ）　○飲用《インヨウ》（のむこと）　○飛禽《ヒキン》（鳥）　○翼《ツバサ》（はね）　○走獸《サウジウ》（けもの）　○四肢《シシ》（四足）　○利用《リヨウ》（はたらかし用ふること）　○海上《カイジヤウ》（海の上）　○平野《ヘイヤ》（平らな野原）　○轉《テン》ずる（かはる）　○餌食《エジキ》（食物）　○幾分《イクブン》（どれだけか）　○肉食獸《ニクシヨクジウ》（肉類を常食とする獸）　○菜食獸《サイシヨクジウ》（野菜類を常食とする獸）　○穀草《コクサウ》（穀物や草）　○食《ハ》む（たべる）　○多少《タセウ》（いくらか）　○水分《スヰブン》（みづけ）　○重要《ヂユウエウ》（大切なること）　○營養物《エイヤウブツ》（養ひとなるもの）　○拘《カヽ》はらず（ことであるのに）　○潤《ウルホ》す（しめらす）　○滋養《ジヤウ》（身體のやしなひとなること）　○歩行《ホカウ》（あるくこと）　○孩兒《ガイジ》（あかご）　○乳汁《ニウジウ》（ちゝ）　○鬱草《ウツサウ》（草木の茂れるさま）　○たなびく（烟雲等の橫に長く引く）　○天《テン》の配劑《ハイザイ》（自然の作用が、生育に要する養分を配分すること）　○妙《メウ》（巧なること）　○天《テン》の妙工《メウコウ》（自然の現象の不思議なる程勝れたる手際）　○恣《ホシイマヽ》に（勝手に）　○猥《ミダリ》に（むやみに）　○草莽《サウマウ》（草）

一四　聯合艦隊《レンガフカンタイ》の進發《シンパツ》

はた（さはなくてあるひは）　○雷霆《ライテイ》（いかづち、かみなり）　○外交《グワイカウ》（國と國との交際又は交渉）　○外交《グワイカウ》の危機《キ》は既《スデ》に去《サ》る（國家相互の交渉の危き場合は最早や過ぎた、即ち兩國談判の破裂を意味す）　○一電《イチデン》（一通の電報）　○露都《ロト》（露國の首府即ちセントピータースブルクをいふ）　○公使《コウシ》（條約國に遣されて兩國の交際事務を司る役人にして、特命全權辨理代理などの等級あり）　○公使館《コウシクワン》（公使の居る邸宅）　○佐世保軍港《サセホグンカウ》（肥前國にあり、第三海軍鎭守府をおく）　○集屯《シフトン》（あつまること）　○聯合艦隊《レンガフカンタイ》（數個の艦隊かつらなれるもの）　○將士《シヤウシ》（將校兵卒）　○スハ（俄に、事の起りたる時などに驚き勇みて發する聲、さてこそ）　○蹶起《ケツキ》（勇んではね起きること）　○進擊《シンゲキ》の令《レイ》（すゝめうてといふ命令）　○軍議《グンギ》（はかりごと）　○とくに（いつにか）　○眼中露國《ガンチユウロコク》無《ナ》し（露國があるなどゝは少しも念頭におかぬ、元氣盛んにして敵を吞めるさまをいふ）　○東洋艦隊《トウヤウカンタイ》（露國東洋艦隊にして浦鹽斯德、旅順、仁川沖等にありしもの凡て八隻水雷艇二十

（四隻なり）○何かあらん（何でもない）○精鋭（熟練してするどき兵）○無比（くらべものがない）○默せる（だまつて居る）○砲門（大砲の彈丸を打ち出す口）○沈靜（おちついて靜なること）○司令長官（司令官の頭）○膽勇機略（膽力あり。勇氣ありて又た臨機の謀略あるをいふ）○將校（士官）○精練決死（精々練習を積んで生命を惜しまぬ決心であるをいふ）○士卒（つはもの兵卒）○二月六日（明治三十七年なり）○旗艦（司令官の乘り組める軍艦）○三笠（排水量一萬五千二百噸。速度十八浬、我聯合艦隊の旗艦として世界に知らるゝ、明治三十八年十月佐世保港灣内にありて失火して爆沈せしが、後引揚をなせり）○先頭（かしらに第一に）○部伍堂々（各部隊の組合の有樣盛に見ゆるをいふ）○逐次（順をおうて）○港外（港のそと）○蓋し（おもふにたぶん）○前古未曾有（昔から曾てなき所）○壯觀（盛んなるありさま）○瀏亮（聲音の流暢にして明亮なること）○軍樂（軍隊の音樂）○一所（ある場處）○信號臺上（信號旗を揚る臺の上）○數旒の旗（幾ながれの旗、旒は旗を數へる語）○翩々（ひら〱）○翻る（ひらめき揚る）○軍港司令長官（海軍中將鮫島員規）○成功（事の出來上ること）○海行かばみづく屍（海戰に出陣したならば、屍が水に漬かる決心ならざるべからざるをいふ、昔大伴氏の祖の教へ置きし言より海軍々歌の詞に採りたるなり。）○吹奏（吹きならす）○期す（約束す、かくごす）

○答禮す（答への禮をなす）○巍然（山の高く聳えたるさま）○驅逐艇（水雷艇に似て大きく速力も水雷艇より速し水雷艇を驅除又は破壞し、又敵艦の襲擊に用ふ）○蜿然蝗の群れるが如き（丁度稻虫の多く集まれる如き有樣）○左右にしつゝ（左右に從がへて）○舳艫相啣む（船の舳と艫と啣み合ふ如く相續くこと）○渺々たる（廣々せる）○目ざす（目あて）

一五　廣瀨中佐の最期

迅雷（烈しきかみなり）○霹靂（かみなり、雷鳴、又烈しく恐ろしき大音響）○天を墜し、海を裂かんとす（天をもおとし、海をもさかんばかりに烈しき意）○千代丸（一七四六噸）○福井丸（二九四三噸）○猛進（たけりすゝむ）○港門（港の入口）○驀入（まつしぐらに進み入ること）○恰も好し（丁度好都合に）○爆沈（爆發して沈むこと）○爆發（火藥の作用により破裂せしむること）○莞爾（につこりほゝゑむさま）○指揮官（こゝは廣瀨中佐をさしていふ）○杉野（名を孫七、伊勢の人、海軍兵曹として閉塞隊に加はりしが戰死の當日、兵曹長に進めらる）○點火の任（船を沈むるために爆發物に火を附くる役目をいふ）○善くせりと覺ゆ（うまくやつたらしい）○總員（皆々）○壯士（意氣盛んなるつはもの）○一上

一下《イチゲ》せり（上づたり下つたりした、波にもまれて浮沈みせるさまをいふ）○點員《テンヰン》（人員を檢査すること）○無《ナ》し（居らぬをいふ）○愁《ウレヒ》を帶《オ》ぶ（心配の樣子が表はれる）○一應《イチオウ》（一度）○搜索《サウサク》（さがすこと）○單身《タンシン》（自分獨り）○心當《コヽロアタ》り（想像のめあて）○隈々《クマグマ》（こゝかしこ）○嵐《アラシ》に叫《サケ》ぶ木精《コダマ》の如《ゴト》く（木精は反響なり、こゝは嵐の吹く音の山谷に響き渡るが如きをいふ）○たばしる（とびちる）○爆彈《バクダン》（爆發するたま）○裡《ウチ》○斷續《ダンゾク》（きれたりつゞいたりすること）○怒濤《ドトウ》（あれまはる波）○浸《ヒタ》す（ぬらす）○悄然《セウゼン》（落膽してくよげかへれるさま）○閉《ヘイ》塞船《ソクセン》（港口を閉づるための船）○思《オモ》ひ〳〵（めい〳〵）○旅順八砲臺（饅頭山一、鷄冠山一、老鐵山四、黃金山二の八砲臺）○急射《キフシヤ》（急激に打ち出すこと）○集中《シフチユウ》（あつまること）○落彈《ラクダン》（おちたたま）○水煙《シブキ》（しふかれて烟の如く飛ひちる細かき水の玉）○白濛々《ハクモウ〳〵》（白き烟りのこめる如くにぼーつとして居るさま）○把手《ハシユ》（手で握る部分）○十二斤砲彈《キンハウダン》（一發に彈藥十二斤を要するものにて、戰鬪艦の副砲、若しくは巡洋艦の主砲たり）○卽死《ソクシ》（其の場で直に死ぬこと）○艇尾《テイビ》（ボートの後端）○左舷《サゲン》（左の舟ばた）○行《ユ》く手《テ》を按《アン》ず（進み行く方角を考ふ）○頻《シキ》りに（ひどく）○嘆《タン》ず（なげく）○俄然《ガゼン》（にはかに）○頭上《ヅジヤウ》（あたまのうへ）○異樣《イヤウ》（不可思議）○注《ソヽ》ぐ（かゝる）○感《カン》ぜり（そういふ樣な氣がした）

○繰言《クリゴト》（くりかへし語ること）○驚動《キヤウドウ》（おどろきうごくこと）○騷擾《サウゼウ》（さわぐこと）○巨彈《キヨダン》（大きい彈丸）○打拂《ウチハラ》はる（持ちゆかれてしまふ）○濃厚《ノウコウ》（こきこと）○血潮《チシホ》（流れ出づる血）○赤羅刹《セキラセツ》（羅刹は佛經に人を食ふ魔物にて、黑身、朱髮獸牙、雁爪、碧眼なるものなりと、）○豪膽《ガウタン》（大たんなること）○血汐《チシホ》（血潮に同じ）○寸大《スンダイ》（一寸程の大き）○肉片《ニクヘン》（肉のきれ）○遺《ノコ》し○渤海《ボツカイ》（支那遼東半島と山東半島とに擁せらるゝ海）○超《コ》えて數日《スウジツ》（五六日を經て）○關東報《クワントウハウ》（關東電報、關東は遼東半島一帶の稱）○アレキシーフ（露國の貴族、中將たり、日清戰爭の當時、露國太平洋艦隊司令長官として海軍力の擴張を勉め後極東總督、黑海艦隊司令長官を經て、太平洋艦隊司令長官となる、旅順の防備經營に勉め、日露開戰の頃浦鹽斯德にありしが、間もなく歸國せり）○到着《タウチヤク》す（つく）○戰艦《センカン》（軍かん）○防禦力《バウギヨリヨク》（ふせぐちから）○檢閲《ケンエツ》（しらべること）○ついで（次に）○探海燈《タンカイトウ》（海面上を照して其の動靜を探知するための燈）○訪問《ハウモン》（たづねること）○嚢《サキ》に（まへに）○沈沒《チンボツ》（しづむ）○船首《センシユ》（船のさき）○砲彈《ハウダン》（たま）○大傷《タイシヤウ》（大きず）○被《カウム》る（うける）○金線《キンセン》（きんすぢ）○望遠鏡《バウエンキヤウ》（とほめがね）○短劍《タンケン》（短き劍海軍々人の着するもの）○佩《オ》ぶ（着げる）○發見《ハツケン》（見出すこと）○葬儀《サウギ》（とむらひ）○柩《ヒツギ》（屍を納めて葬る具、棺）○廣瀨武夫《ヒロセタケヲ》（豐後國岡の藩士、父を重武といふ、明治元年鄕里竹田町に生る、幼より明敏

膂力人に勝れ、後嘉納塾に學びて柔道の奥義を極む、二十四年海軍少尉となり、日清戰役に功あり、後露國駐在武官を命ぜられ、頗るかの國情に通じ、日露戰役には海軍少佐、朝日艦水雷長として出陣、有馬中佐と旅順口閉塞の計を起し、第一回の閉塞を行ひ、第二回閉塞の擧に泰然として任務を果し、將に還らんとするの際、砲丸忽ち全身を掠め去れり、天下其の英風を稱へて軍神といふ、即日中佐に進められ功三級金鵄勳章を授げられ、正四位勳四等に叙せらる享年三十七　○遺體（遺されたる死體）　○木片（木ぎれ）　○露語（ロシア語）　○閉塞（閉ぢふさぐこと）　○果して（案の如く）　○膽を奪ふ（勇氣を奪去る驚かす）　○志を遂げず（思ひ立しことをやりおほせぬ）　○逝く（死ぬ）　○わが有に歸す（我國のものとなる）　○瞑せりや否や（滿足して目を閉ぢ、死したるか、如何あるとの意）

一六　遊就館

○靖國神社（東京九段坂上にあり、明治二年に創建せられ、もと招魂社といへり、戊辰明治元年以降國家のために死せし者の靈魂を祀り、別格官幣社なり、毎年五月十一月の二回に大祭あり）　○鳥居（神社の前に立つる門の如きもの）　○木立（たちき）　○巍然（山の高く聳えたるさま）　○煉瓦造（煉瓦で造られたる）　○一館（一つの建物）　○遊就館（靖國神社大鳥居の右方にある西洋館にて、戰死將校の肖像、古代の軍器、戰利品等を陳列して、公衆の縱覽に供す）　○戰利品（戰爭に於て利獲したる品物）　○紀念品（かたみのもの）　○陳列（順序を立てゝならぶること）　○人目を引く（人目つのにく）　○兩舷（兩側の船べり）　○敵彈（敵のうつた丸）　○破碎（こはれること）　○彈痕（たまのあと）　○一見（一目見て）　○追想（過去を思ひだすこと）　○酸鼻（悲慘なること）　○本館（最も主たる建物）　○各種（色々）　○銃砲（小銃大砲）　○砲車（大砲をのせ運ぶ車）　○彈藥車（彈藥を運ぶ車）　○一として（どれも）　○忠勇報國（忠義勇武にして國家に報ゆること）　○紀念物（かたみしるし）　○加農砲（Cannon.）（大砲の英語、今の野戰砲又は砲臺軍艦等に供へつくる砲なり）　○野砲（野戰砲の中に屬し、今多く使用する所は七珊半にして、着彈距離三千米以上に達す）　○速射砲（主として海軍に用ふ、戰艦の副砲、裝甲巡洋艦等の主砲及副砲なり、安式八吋速射砲の如きは二百十斤の彈丸を一分間に三四回裝填發射することを得）　○機關砲（砲身四五條を横に列置したるものにて、機關の裝置により、小徑の彈丸を間斷なく迅速に發射し得べく、一分間に數百發を發射し得べし）　○枚擧に遑あらず（一々數へるひまはない）　○刀鎗（刀ややり）　○飾太刀（鞘を紫檀又洗朱等にして金具等にて飾り、又蒔繪にして金銀青貝などにて飾れるをいふ、束帶の時佩用せし刀なり）　○庖丁正宗（相州鎌倉荏柄天神の寶刀にて、銘無し、長さ一尺三寸六分、元幅三寸四分、表には草の倶利伽羅、裏には梅の木の彫刻あり、嘉暦頃の作なりといふ）　○十字鎗（十字形の鎗）　○大身鎗（鎗身通常のものより長きもの）　○甲冑（かぶとよろい）　○馬具

（乘馬に用ふる道具）　○新舊（あたらしきふるきこと）　○苟くも（かりにも少しでも）　○武器（軍道具）　○壁間（かべ）　○守護代（國の守護に代りて庶務を攝行する職をいふ）　○平景隆（文永十一年十一月、蒙古の兵船、壹岐に襲來せし時同國の守護代として家人百餘騎を率ゐて奮戰し、敗れて自殺す）　○手勢（家來の兵）　○決戰（決死して戰ふこと）　○壯烈（勇壯にして烈しきこと）　○悲慘（むごきこと）　○肖像畫（人の像を畫ける畫なり）　○有栖川宮殿下（熾仁親王を云ふ、陸軍大將大勳位、近衞都督參謀總長を經、日清戰爭には功二級金鵄勳章を賜ひしが二十八年一月薨ず、年六十一）　○胸間（むね）　○長へに（ながく）　○名譽（ほまれ）　○撮影（うつすこと）　○從軍者（軍に從つて出陣せしもの）　○乃木ステッセル兩司令官の水師營會見（三十八年一月五日日露の役旅順口開城後乃木ステッセルの兩將水師營に會見して旅順口明け渡しの事につき相談せしをいふ）　○光景（ありさま）　○好個の大畫題（畫をゑがくためのよき大材料）　○變遷（うつりかはり）　○古城趾（昔の城あと）　○古戰場（昔戰のありし所）　○上下幾百才（古今に亘り何百年）　○興亡盛衰（起つたり亡んだりさかへたりおとろへたりすること）　○忠勇の念（忠義のために勇める心）　○懷古の情（昔の事を思ひ出す感情）　○交〻（かはるがはる次から次へ）　○俯仰低個（感情胸に迫り、頭を垂れたり仰いたりしてうろつきさまよふこと）　○詣づ（參拜す）

十七　陸軍兵の生活

○前略（時候の挨拶又は起居見舞等の語を略する義にして簡單なる書簡文の冒頭に書く語）　○入營（軍隊に入ること）　○模樣（やうす）　○概略（あらまし）　○習ふより慣れよ（凡ての事は只、師につきてのみ學ぶよりも、練習をつんで慣るるに如かずといふ意）　○營内（兵營の内）　○心安く（らくに）　○世間（世の人々）　○窮屈（自由ならぬこと）　○ほゞ（大抵）　○萬事（何事も）　○制規（規則）　○一段（一層）　○操練（戰爭についての技術を練習すること）　○心得のなき（知つて居らぬ）　○熱心（一生懸命）　○熟練（なれて上手になること）　○演習（戰鬪攻守の練習）　○愉快（心に面白しと思ふこと）　○屢〻（たびたび）　○要するに（畢竟結局）　○人世（よ）　○常態（あたりまへのこと）　○其例にもれず（其の仲間を外れぬ）　○單純（複雜ならざること）　○いざ知らず（どうであるかしらぬが）　○平生（ふだん）　○單調子、一直線（同じ調子にて變化なく恰も一直線を引きたる如くなるをいふ）　○職務（つとめ）　○善行證書（品行方正、成績優等、勤勉にて、他の兵の模範ともな

（あるべき兵に與へらるゝ名譽の證書）○授く（與ふ）○さて（それから）○出營（滿期となりて兵營を出づること）○存外（思ったより）○先輩（年輩、學藝等につきて己より先じたる者）○成績拔群（勤めの出來ばえの特に他の兵士より優等なるをいふ）○定り（きまり）○歸休兵 ○兵士間（兵隊仲間）○一班（一とほりあらまし）○酒保（各聯隊大隊に附屬し、兵士日常の便宜のために設けたる處にして、飲食物、日用品等を賣る所）○特別事情（特別なやうす）○報導（知らせること）

十八　海軍兵の生活

○拜啓（手紙の始におく語）○憚ながら（おそれ多きことなれど謙遜していふ辭なり）○安心（心を安むること）○心もとなし（氣にかゝる）○案外（思ひの外存外）○一應（一先づ一寸）○日課（毎日の仕事）○整然（ちやんとしたさま）○薄暗き（未だ夜の明けきらぬ内をいふ）○甲板掛（甲板上の事を掌るもの）○釣床（網の如くあみて釣り下げたる寢床）○上甲板（甲板に上中下あり）○拭掃除（水でふきて清むること）○食事（たべること）○當番（番にあたること）○烹炊所（飲食物を煮たり炊きたりする所）○厨宰（賄所の取締役）○分配（わけること）○平服（ふだんぎ）○軍艦旗掲揚式（毎朝軍艦旗を檣頭に揭ぐる式にて、甚だ嚴肅なるものなり、信號兵喇叭を以て、君ヶ代を吹奏し、艦長以下將校兵卒盡く起立し、軍艦旗に向ひて最敬禮を行ふ）○擧行（おこなふこと）○尊敬（うやまひたつとぶこと）○嚴肅（おごそかなること）○艦長（大中佐を以てこれに充つ、小艦にては少佐又は大尉を以てす）○副艦長（千噸以上の軍艦におかれ、通例少佐を以て之に充て、艦長を補佐する者なり）○當直士官（各任務に當れる士官）○艦橋（海上を見張り、船の操縱を司り、又水路の嚮導をなす所）○脫帽（帽子をぬぐこと）○敬禮（恭しく禮をすること）○捧銃（敬禮する爲の銃の操法）○信號兵（信號旗にて命令指揮の傳達を司る兵）○吹奏（樂を吹くこと）○點檢（一々取り調ぶること）○休憩（やすみ）○戰鬪準備（戰を開く用意）○戰鬪操練（戰の操練）○火災操練（火事の起りし時の處置其宜しきを得しむるに時々消火の練習をなすなり）○水雷艇防禦操練（水雷艇の襲擊を防ぐための操練）○帆檣（帆やほばしら）○機關兵（船中にありて機關を運轉する兵）○船匠（船大工）○食堂（食事をなす室）○喫す（食べる）○降下（取り下すこと）○別段（とりわけ、かくべつ）○眠に就く（ねる）○疾く（早く）○渺茫（廣々せるさま）○大うなばら（廣々としたる海面）○晴空拭ふが如し（晴れたる空が雲を拭ひ去つた如く青きさま）○風收り（風がない）○波間

波の間 ○到底（とても） ○陸上の人（陸に住める人） ○夢想（夢に思ひ見ること） ○敬具（手紙の終りに書く語）

十九　ピユフオン晏起の習を矯む

○物產學（產物に關する學問） ○大家（其の道にすぐれて秀でたる人） ○ビユフオン（佛國の博物學者、博物學の研究に生涯を委ね、有名なる博物學者ドベントンの助によりて博物學史を完成せり、一七八八年歿す） ○英才は忍耐なり（忍耐はよく人をなして、英才の名をなさしむるをいふ） ○英才（勝れたる才智） ○忍耐（こらへしのぶこと） ○後來（後に） ○大名（大いなる名譽） ○元來（元から） ○中等の資質（通常の人の如き性質） ○心才（心のはたらき） ○敏速（すばやきこと） ○大產の家（大財產家） ○歡樂の事（遊興などのたのしみごと） ○絕つ（やめる） ○專ら（一途に） ○德性（道德心） ○嘗て（まへがたある時） ○光陰（月日のことをいふ） ○輕んず（何とも思はぬ） ○晏起（朝おきることのおそき） ○習せ ○矯む（惡きことをなほす） ○力を用ふ（つとめる） ○時刻（とき） ○僕（めしつかひの男） ○一文錢（一つの銀貨） ○賞び（ほうび） ○命じ（いひつけ） ○每曉（毎朝） ○務めて（精を出して） ○與ふ ○怒を發す（おこる）

○承知（云ふことをきくこと） ○呵る（とがめる） ○一日（ある日） ○常にも越えて（いつもにもまさって） ○頑固（かたいぢなること） ○冷水（みづ） ○寢衣（ねまき） ○著す（書籍をつくる） ○晝課（ひる間のつとめ） ○夜課（夜分のつとめ） ○精心（心を專にすること） ○勉力（つとむること） ○習慣（くせ） ○傳（生涯の事蹟を記したるもの傳記） ○課業（つとめ、仕事） ○必用の具（なければならぬ道具） ○學習（まなぶこと） ○畢生（一生） ○功（事業） ○成就（しとげること） ○身を委ね（一身をそれにつくす） ○完美（缺點なく立派なること） ○著（あらはせる書） ○思を凝す（一所懸命に考へる） ○草稿（下書） ○文辭（文章言葉） ○琢磨（みがきて立派にすること） ○事務（つとめしわざ） ○長く（長ずる） ○秩序（物のすぢみち） ○次第（順序） ○恒（いつも） ○才氣（心の若きの氣色に現れ居ること） ○マダム子ツカー（西暦一七六六年佛國に生れ一八一七年死す、文學者にして政論家なり） ○力を致す（つとめる） ○功驗（事業と經驗） ○苦樂（苦しみとたのしみ） ○疲倦（うみつかるゝこと） ○仔細（こまか） ○困憊（つかれていやになること） ○改修（あらためなほすこと） ○勞勉（はたらきつとむること） ○曾て（一度も） ○疲困（つかるゝこと） ○著述（書を著すこと） ○從事

（つとめること）○課程（定まれるつとめ）○廢す（やめる）

二〇　福運は勤勉の人に隨ふ

福運（幸福運命）○盲人（めくら）○人を辨せす（人の善惡如何を見別けぬ）○眼目（め）○抑も（由來を說き起すとき冒頭に用ふる語）○生涯（一生の間）○勤勉（つとめはたらくこと）○傍ふ（從つて居る）○順風穩波（追ひ風や靜かなる波）○たとひ（如何程）○高尙（程度の高きこと）○學科（學問の科目）○凡庸（平凡なること）○才質（智慧と性質）○心を用ふ（心がく）○功を積む（業をつみ上げる）○久しきに耐ふ（長く辛抱する）○地位（場所）○卓越（人並外れて勝れたること）○絶大（すぐれて大なる事）○豪傑（智力勇氣等の凡人にすぐれたる人）○大方（大抵）○大業（大いなる事業）○常人（凡庸の人）○奮發（ふるひ起る事）○切至（いたりきはむること）○他なし（とりもなほさず）○勉勵（つとめはげむこと）○別名（一名）○說（意見）○心火（火のもゆるが如く烈しく起りたつ心情）

二一　旅人と虎と鰐魚

斷崖（きりぎし）○そばだつ（高く立つ）○深淵（ふかきふち）○たゝふ（水がたまつて居る）○前途（行く道に當り）○猛虎（たけれる虎）○牙を鳴す（大口を開けて恐ろしきさまをいふ）○投す（とびこむ）○巨口（大口）○鰐魚（わに）○歎息（ためいをつく）（こと、嚇せるさまをいへり）○以爲らく（思ふには）○進退茲に谷れり（進まんとしても進まれず、退かんとしても退かれず、身をおく所なきまで窮し困れるをいふ）○俯す（うつぶく）○今しも（今にも）○餌食（食物）○覺悟（こゝろがまへ）○一刹那（極めて短き時の間をその瞬間）○一躍（一とび）○失望（望を失ひて落膽すること）○物窮して又通す（世の事物は一旦窮しても又發達開通するものなるをいふ）

二二　東海道鐵道

新橋（東京市の南部にあり、東海道鐵道の起點なり）○各驛（それ〴〵の停車場）○横濱（東京より八里の南にあり神奈川縣廳あり人口十九萬餘）○開港場（開放して諸外國と貿易を營む港）○貿易（外國と財貨の交換をすること、交易）○内外國（内國と外國）○海を蔽ふ（海一面にとの意）○碇泊（船舶）

（が罷を下し文治ること）○煤煙（石炭のけむり）○空に漲る（天に満ち渡るとの意）○西行（西に向て進むこと）○隧道（トンネル）○山間（山のあひだ）○煉瓦造 ○工場（仕事場）○富士紡績會社（駿河國小山にあり、絹、綿絲を製造す）○紡績（綿をつむぎて絲となすこと）○綿絲（木綿絲）○御殿場（駿河國御厨町にあり海拔一四九八尺、東海道鐵道中の最高處とす、富士登山者此驛にて上下車す）○巍然（山の高く見ゆるさま）○雲表に屹立す（雲の上迄も高く突立て居る）○三保の松原（駿河國三保ケ崎にある松林にして風景絶佳の地たり）○程なく（間もなく）○静岡（駿河國にあり、静岡縣廳、第四十四聯隊あり、東海道鐵道の要路に當り新橋より一一八哩、人口凡四萬）○老を養ふ（老年を安樂に送る）○世を終ふ（死するをいふ）○維新（明治初年の大政改革をいふ）○徳川慶喜（徳川第十五代の將軍、此代に至り大政を奉還す）○隱遁（かくれしのぶこと）○市街（町の通り）○殷賑（にぎやかなこと）○漆器（ぬりものゝうつは）○大井川（駿河遠江の國境を流る長さ二十五里二十八丁本邦屈指の長流なり）○鐵橋（鐵道を架せる橋）○岡崎（三河國にあり本多氏舊城址あり）○名古屋（東海道第一の要市にて商業繁昌す、人口二十五萬餘、愛知縣廳、第三師團等あり）○都會（みやこ）○加藤清正（豐臣氏の名將、三歳の童兒も知れる英傑なり）○天主閣（城の本丸に、殊に高く設けたる物見櫓をいふ）○燦然（きら〱光るさま）

○鵜飼（岐阜長良川の奇觀として名高く、毎年五月より十日に亘りて行ふ、舟毎に漁火を點じて流を下り、鵜を放ちて鮎をとらしむ）○關が原（美濃國不破郡にあり、慶長四年、徳川家康、石田三成と戰ひて大勝を得たる古戰場）○近江八景（近江國琵琶湖畔の勝景八つを支那洞庭湖瀟湘八景に擬して作れるものなり、石山秋月、三井晩鐘、唐崎夜雨、勢多夕照、片田落雁、粟津晴嵐、矢橋歸帆、比良暮雪をいふ）○湖畔（水海のほとり）○さゞ波や志賀の都（さゝ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻花といへる歌の事なり、さゝ波はもと志賀地方の總稱にてこゝは枕詞なり、志賀の都は天智天皇の都せられし地にして、今の大津の近傍滋賀村に都址の碑あり）○平忠度（平清盛の弟、膂力衆に超ゆ、武名著る、和歌を藤原俊成卿に學びて名あり、正四位下左兵衛佐薩摩守に至る、平家沒落の際一谷西門を守りしが、軍敗れて敵の爲に斬らる、年四十一）○詠ず（歌をよむ）○天智天皇（人皇第三十八代の天皇、御名中大兄、天資英明に在し、藤原鎌足と心を合せ、蘇我氏を亡し、又大化の新政を布き玉ふ、後又近江令を制し、在位十年にして崩す、中興の主と稱し奉る）○舊都（昔の都）○京都（桓武天皇以來明治に至る千餘年間の皇居にして人口三十五萬餘、本邦中名所舊蹟も多し、京都帝國大學第三高等學校、京都府廳、其他諸官署學校會社多し）○延暦（年號の名）○奠む ○美術（美を表現するを目的とする技術又は製作、即ち詩歌、音樂、繪畫、彫刻、建築等の類をいふ、普通に特に繪畫、彫刻、建築等を指すことは後者による）○工藝（製作に係る技藝）○發達（開け進めること）○更にも言はず（云ふ迄もなく）○山光水色（山や川の風景）○風致（おもむき）○名勝（風景すぐ

（れたるところ）○古蹟（昔物事のありし跡）○西陣絹織物（西陣は上京區北西部落の總稱にて、その織物は本邦第一の產額にて。名聲海外にも聞え、紋織、牛紋羽二重、繻子、縮緬、博多、天鵞絨等種々の織物を生す）○銅器（からがねの道具）○大阪（淀川の下流に跨り、人口八十二萬八千餘、我國南中の中央市場にて商賈の繁昌、本邦随一たり、大坂府廳、第四師團其他諸會社甚だ多し）○皇居（帝王の住み給へる御所）○運河（荷物を運送せんがために陸地を掘り割りて作れる河、ほりわり）○縱橫す（たてよこに通つて居る）○商業地（商賈の土地）○豐太閤（豐臣秀吉）○築く（作る）○神戸（東海道鐵道と山陽鐵道との連絡する所、新橋より三七五哩、第二の開港場にして其繁盛橫濱と相伍し人口廿一萬餘、兵庫縣廳、川崎造船所、其他官署會社多く船舶の出入日夜斷ゆる事無し）○内外（内國と外國）○大船巨舶（大きな船）○運輸（荷物を運び送ること）○交通（ゆきかひ）○頻繁（しげしいこと）○讓らず（劣らぬの意）○湊川神社（別格官幣社、楠公の靈を祀れり）○官線（政府の鐵道線路）○終點（とまり）○經過（通りすぐること）○里程（道のり）○實に（誇大の意を含む）○哩（我が十四町四十五間に當る）

三　山陽鐵道

搭す（乘る）○一の谷の古戰場（攝津國西須磨にあり、壽永の昔源義經鵯越の嶮を越えて後方より平氏の城内に突擊して之を陷れし所、平氏の安德天皇を奉ぜし内裡址及び城址あり）○武人の闘爭（源平の軍兵の戰をいふ）○須磨（一の谷の近傍にて須磨村と稱す、白沙青松有名の地にして舊蹟多し）○明石（播磨國明石町、須磨と並稱せられて名勝地）○歌人の風流（須磨明石を和歌に詠みし古今歌人の雅びなること）○雲烟縹渺の間（雲か烟か明に見分けのつかぬ[illegible]か[illegible]波の間）○姬路（播磨國にあり、第十師團をおく、）○世に（世間で）○岡山（備前國旭川の西岸にあり人口五萬六千餘）○要衝（[illegible]物事のあつまり又は必ず通過すべきかなめの場所、）○舊城址（昔の城あと）○名產（有名なる產物）○花莚（藺を種々の色に染めて模樣を織り出したるござ、花ござ）○名邑（名高き町）○所在地（ある場所）○廣島（人口十二萬餘、廣島縣廳第五師團高等師範學校等あり）○大本營（戰時大元帥陛下の下に最高の統帥部をおきたる本營、）○人家櫛比（家が櫛の齒の如く密にならびたること、）○便利（都合よきこと）○魚鹽の利（魚類鹽がとれるをいふ）○牡蠣（瓣鰓類中單柱類に屬する軟體動物、介殼は不正にして葉狀をなし、多くは左殼を以て海中の岩石に附着す、肉味美にして大に賞せらる、人爲により適當なる方法を行へば發育頗る宜し）○養殖（やしなひふやすこと）○宮島（又嚴島といふ、周回七里餘、風景絶佳なり、嚴島神社は素盞嗚尊の御子市杵島姫、田心姫、湍津姫の三神を祀り、本殿は東北に向ひ、海上を正面とす、推古天皇の二年に創建せられ後平清盛之を修營せり）○

絶佳（非常によき事）　○殿堂（神佛の在す建物）　○突出（つき出づる事）　○廻廊（長く曲折せる廊下）　○錦帶橋（周防岩國川に架し、甲斐猿橋、越中愛本橋と共に日本三橋と稱せらる）　○要港（肝要なる港）　○相對す（向ひあふ）　○輻湊（より集ること）　○安徳天皇（人皇第八十二代、高倉天皇の御子、三才にして受禪し給ふ、源平の戰に、平宗盛帝を奉じて壇の浦に擁り源義經の爲に敗られ、帝遂に海に投じて崩ず、御年八才なり）　○敦盛（參議經盛の子、無官太夫と呼ばる、一の谷の役、城より逃れて、海上の御座船に至らんとして、熊谷直實に呼び戻され、踊りて相搏ち馬より落ちて斬らる、年十六）　○知章（武藏守たり一の谷陷りて父知盛と共に走りしが、敵逐ひて迫るや知章遮つて之を搏ち、知盛を逃がれしめ、自らは戰死せり、時に年十六）　○忠度（前課に載す）　○知盛（清盛の子、源頼政を破りし功あり、一の谷陷り平氏西航す、壇の浦に義經の追擊に遇ひ安徳天皇崩じ、宗盛捕はると聞き、涙を垂れて深く之を恥ぢ叔父教盛と並び座して自刄す、時に年三十四）　○源太景季の風流（一の谷の戰に梶原景時の子景季が、梅花を箙に挿みて敵陣に奮闘せしこと）　○與一宗高の名譽（那須與市宗高、源義經に從ひて壇の浦の戰に赴く、平氏舟に美姬を出し、竿頭に旭日の扇を挿みて之を射よといふ、宗高選ばれて一發巧に扇眼を射る、扇は海中におつ、義經之を賞し莊園を與ふ、後世に至るまで美談とせり）　○平家物語（全部十二卷作者不詳平家の盛衰を記せるもの行文流暢にしてもと琵琶に合せて語りしものなり）　○おもひ浮ぶ（おもひ起す）

二四　東洋笑話

（一）　河豚汁（日本）

河豚汁（固頭類に屬する魚、海に產す、體長く稍扁扁なり、頭部廣く、鱗なく腹は嚢狀をなす、空氣を吸入して腹部を膨らしむる特性を有す肉は美味にして食用に供せらるれど肝臟又は卵巢に劇毒を含有するものあるが故に恐れて食ふ者多からず）　○いざとなりて（食べる段になりて）　○一椀（一ぱい）　○取らす（食べさす）　○有無（ありなし）　○衆議一決す（皆の相談がきまる）　○椽の袂（はしのそば）　○小半時（昔の一時の四分の一、即ち今の卅分）　○そぞろ歩き（ぶら〱散歩すること）　○最前（先ほど）

（二）　李三老（支那）

城門（城の門）　○兩扉（左右の戸）　○こだはる（さはる）　○切らんも（切るのも）　○思案屈託（いろ〱考を回らして其事に泥み憂ふるをいふ）　○態（様子）　○路人（道を通りつゝある人）　○尤なり（無理はないことである）　○手前（此方）　○隱れたる（世に

（知られぬ） ○智者（智慧のある人） ○驢馬（うさぎうま） ○落ちんばかり（落ちさうに） ○いぶかし（不思議） ○故（わけ）

（三）二階の砥石（印度）

○指物師（机、本箱、椅子などを作る大工をいふ） ○刃物（切れ物） ○鈍る（切れぬやうになる） ○往復上下（ゆきゝあがりをり） ○累（めんだう）

二五　十錢銀貨の來歷談（上）

生野の鑛山（但馬國朝來郡にあり銀の產出頗る多し） ○あらがね（鑛山より掘り出したる儘にて未だ製煉せざる金屬類をいふ） ○先年（すぎし年） ○精製（粗製品に更に人工を加へてよくすること） ○鈍銀（交り物のない銀） ○大坂造幣局（大坂市に在り、我國通用の貨幣を製造する所、建築頗宏壯なり） ○型（金屬をとかし入れて或形を作るもの、いがた） ○兄弟（同じ仲間の意） ○銀行（金融の機關をなす一種の法人、信用を利用して自家の資本及公衆の預金により、資本の需用と供給との媒介をなすもの） ○世間（世の中） ○渡り歩き（めぐりまはること） ○經めぐる（諸所をめぐりあるく） ○隅々（端、はて） ○もとより（勿論）

○紳士（富貴の人の意） ○件（前にありし事を指していふ語） ○宿（自分の家） ○意外の事（思ひがけぬ事） ○とある（或る） ○夜學（夜間の學校） ○通ふ（行く） ○默讀（聲を上げずによむこと） ○寢に就く（ねる） ○辻（よつかど） ○終日（一日じう） ○かせぐ（はたらく） ○夜に入る（夜になる） ○苦學（普通ならぬ辛苦をして學問すること） ○書生（學生） ○噂（世間の云ひふらし、風說） ○そゞろ（つくづく） ○感に堪へず（感心し切れぬ） ○行末（後々の成行） ○書籍（本） ○書肆（本屋） ○印刷（文字、圖畫等の版面にインキをつけて紙面に印象すること） ○職工（貨物の製作に從事する人） ○家賃（家屋の借り賃） ○家主（家の持主） ○移る（わたる） ○兄弟分（仲間の意） ○一包の棒に束ねられ（五圓包の棒形にくゝられたるをいふ） ○金庫（かねぐら） ○窮屈（自由ならざること） ○退屈（うみあくこと） ○開けよかし（開けてくればよい） ○念ずる（祈る） ○明かばこそ（明くどころか中々に明かぬとの意） ○都合（總べて） ○小間物店（婦人の化粧品をうる店） ○一半（半分） ○仕入金（商品を買ひ入れる資本金） ○問屋（品物を小賣する者におろし賣する商家） ○用途に立つ（つかひちの役にたつ） ○地方廻りの手代（商用の爲に地方を巡る商家の使人） ○上野の停車場（東京新橋と南北に相對なし、重要なる停車場にて、

（東北の鐵道線路は皆この驛を起點とし貨物、乘客常に雜沓せり）○近村《キンソン》（近き村里）

二六　十錢銀貨《ジフセンギンクワ》の來歷談《ライレキダン》

宿料《シクレウ》（やどちん）○農家《ノウカ》（百姓の家）○鎭守《チンジユ》の社《ヤシロ》（其土地を鎭め守る神を祀れる社）○大祭《タイサイ》（おほまつり）○息子《ソクシ》（むすこ）○祭禮《サイレイ》（まつり）○伴はる《トモナ》（つれてゆかる）○手品《テジナ》（魔術、デズマ）○木戸錢《キドセン》（芝居見世物などの見料）○手品師《テヂナシ》（手品を演ずる者）○願はくは《ネガ》（どうかとの意）○機會《キクワイ》もがな（なりがあつても欲しいと願ふ意の語）○幸運《カウウン》（仕合せ）○散髮屋《サンパツヤ》（かみどこ）○滯留《タイリウ》（とゞまること）○貨幣《クワヘイ》（ぜに）○いさゝかも（少しも）○腑《フ》に落《オ》ちぬ（合點がいかぬ）○役員《ヤクヰン》（會社等にて事を司る人）○檢査《ケンサ》（とりしらぶること）○贋造《ガンザウ》（にせもの）○宣告《センコク》（云ひ渡すこと）○鋭《スルド》し（眼などの働は敏捷なる意なり）○預金利子《アヅケキンリシ》（銀行に金を預け入れたるより生じたる利息金）○支拂《シハラ》ふ（はらふ）○某藥舖《ボウヤクホ》（あるくすりや）○所《トコロ》かはれば品《シナ》かはる（場所が異るに從つて其處にある物もちがふとの意）○語《カタ》り盡《ツク》す（はなしきる）○總《ソウ》じて（すべて）○取引《トリヒキ》（商人同士物品賣買の授受をなすこと）○晝夜《チウヤ》（ひるよる）○晦日《ミソカ》（月の第三十日其の一ヶ月の金錢上の事を凡て此日を以て決算する例なり）○目《メ》も昏《クラ》み氣《キ》も絶《タ》ゆるばかり（目が舞ひ息もきれるほど）○旅行《リヨカウ》ずきの生《ウマ》れ（たびずきの性質）○聊《イサヽ》か（少し）○物靜《モノシヅ》か（しづかなること）○地方《チハウ》（土地）○吝嗇家《リンシヨクカ》（しはんぼう）○藏《ヲサ》む（しまつておく）○節儉《セツケン》（つゞまやかなる事）○別《ベツ》を辨《ワキマ》へ（區別をよく知り）○自在《ジザイ》（自由、こゝは自由に巧に利用するの意なり）○財產家《ザイサンカ》（金もち）

二七　物《モノ》の價《アタヒ》

價《アタヒ》（ねだん）○效用《カウヨウ》（きゝめ）○勞《ラウ》して始《ハジ》めて（骨を折つて其上で漸くの意）○稀《マレ》（少ない）○實用《ジツヨウ》（實際の役にたつ事）○裝飾《サウシヨク》（かざり）○隨《シタガ》つて（よりて）○日光《ニツクワウ》（太陽の光線）○生命《セイメイ》（いのち）○普《アマネ》く（一般にゆき渡りて）○存在《ソンザイ》（あること）○時《トキ》として（往々、時により）○飲料水《インレウスヰ》（のみ水）○乏《トボ》し（少なし）○主《シユ》として（おもに）○需要《ジユエウ》と供給《キヨウキフ》（經濟上の語にして相對的に用ゐらる物價の高低をはかる原因にして說明は本書にあり）○多少《タセウ》（多いと少いこと）○希望《キバウ》（のぞみ）○絹布《ケンプ》（絹）○凶年《キヨウネン》（農作物不出來の、）○備《ソナ》ふ（用意する意）○貯蓄《チヨチク》（たくはふること）○反對《ハンタイ》（うらはらあべこべ）○同樣《ドウヤウ》（同じやうなる）○普通《フツウ》（あたりまへ、通常）○費用《ヒヨウ》（入り）

目　○利益《リエキ》（もうけ）　○旅行《リヨカウ》（はやること）　○職人《シヨクニン》（手藝に物を製作する人）　○雇ひ入る《ヤトイ》（賃錢を拂ひて人を使役す）　○盛に《サカン》どん

〱　○職業《シヨクゲフ》（なりはひ）　○製造高《セイザウタカ》（作る數量）　○原《モト》（中心の意）　○古人《コジン》（昔の人）　○書畫《シヨガ》（字や畫）　○古器物《コキブツ》（昔の

道具家）

二八　社會《シヤクワイ》の組織

大工《ダイク》（家屋等を作る職人）　○左官《サクワン》（壁をぬる職人）　○百姓《ヒヤクシヤウ》（農作を業とする人）　○仕立屋《シタテヤ》（衣服の裁縫を業とする人）　○語をつぐ《ゴ》（語をつづける）、

○便利《ベンリ》（都合よきこと）　○社會《シヤクワイ》（相互作用又は共同生活をなす組織又は國體こゝは單に同一の仲間の意なり）　○成り立つ《ナタ》（出來る）　○開ける《ヒラ》（人智が進

む）　○未開《ミカイ》（文化の進まぬこと）　○人口稠密《ジンコウチウミツ》（人數が多くこみ合ふこと）　○樵夫《キコリ》（薪柴を採るを業とする人）　○關係《クワンケイ》（かゝりあひ）　○斧《ヲノ》

（まさかりの小なる物、刃物の一種）　○鑛山《クワウザン》（かな山）　○人手《ヒトデ》（人の手數）　○一心不亂《イツシンフラン》（一生懸命）　○取りも直さず《トナホ》（つまり）

○機織《ハタオリ》（機に布帛を織る工人）　○職務《シヨクム》（つとめ）　○丁稚《デツチ》（職人又は商人の年期を定めてつかひ育つる幼年者）　○召使《メシツカヒ》（下男下女）　○現在《ゲンザイ》（まのあた

り）　○冗談《ジヨウダン》（眞面目でない話）　○浴衣《ユカタ》（綿布にて仕立て浴後等にきる着物）　○取り入れる《トイ》（收穫する）　○紡績《バウセキ》（綿をつむぎて糸となすこと）

○厄介《ヤクカイ》（世話）　○勞力《ラウリヨク》（ほねをり）　○成程《ナルホド》（如何にも）

（中等教科）明治讀本（訂正）卷一字解終

中等教科明治讀本（訂正）字解

巻二

一　新羅《シンラ》三郎《サブラウ》

從者《ジユウシヤ》（おとも）　○雨三騎《リヤウサンキ》（二三人の馬にのりたる士）　○家門《カモン》（いへのもん）　○黎明《レイメイ》（よあけごろ）　○近江《アフミ》の國《クニ》　○鏡《カガミ》の
驛《エキ》（蒲生郡にあり）　○單騎《タンキ》（たゞひとりのきばむしや）　○鞭《ムチ》を擧《ア》げ（走るとき馬にむちをあてがふなり）　○追《オ》ひ來《ク》る（馬をはしらせてくる）
○近《チカ》づく（そばにくる）　○豐原時秋《トヨハラトキアキ》（島羽天皇の御代に音樂のことをつかさどりし人、父を時元と云ふ）　○義光《ヨシミツ》（新羅三郎のこと）　○好意《カウイ》を
謝《シヤ》し（しんせつをれいいふて）　○懇《ネンゴロ》に（おだやかに）　○辭《ジ》す（ことわる）　○肯《キ》かず（承知せず）　○美濃路《ミノヂ》　○三河路《ミカハヂ》
○日數經《ヒカズヘ》て（いくにちかたつて）　○行《ユ》く〳〵（だん〳〵とゆきて）　○相模國《サガミノクニ》　○足柄山《アシガラヤマ》　○轡《クツワ》（馬の口へはめるもの）　○駐《トド》
め　○轡《クツワ》を駐《トド》めて（馬をひきとゞめて）　○やよ豐原《トヨハラ》ぬし（さて豐原殿）　○和殿《ワドノ》（貴君）　○感謝《カンシヤ》す（おれいをまをす）

○遠征（遠くの方へ征伐にゆくこと）○公（おかみ、朝廷）○蒙る（うける）○難に赴く（こんなんを助けにゆく）○官職ある身（おかみに仕へてやくめを持つてゐる身分）○振舞（しわざ）○いかゞなり（かみに對してはゞかりあり）○いざとく（さあはやく）○掉り ○年頃（まへから、いぜんから）○契ひし（やくそくしたる）○まげて（道理にそむいてもしひて）○いやとよ（いや〳〵）○會釋（あいさつのことば）○笙（ふえの一種）○秘曲 ○最後の時（しにぎは）○大食調入調（二つとも音樂の調の名）○譜 ○暇も申さず（いとまごひもせず）○匆々にして（あわてゝ）○赴援（助けに行くこと）○斷絶（たへほろぶること）○道の爲には重き身なり（音樂の道にとりては大切なる身の上なり）○私情（自分一人の情）○辨へたりや（わかりしか）○夜も清し（月のひかりで夜もすみわたる）○持たせたる楯（ともにもたせたる楯、楯は戦場にて敵の矢を受くる道具）○肌の守袋（はだみにさげたる守札を入れる袋）○譜巻（譜の書いてある巻物）○家の道とて（音樂は自家の業のことなれば）○齎し來れる（つたへて來たる）○月下に奏する（月の光を浴びながら笙をふくなり）○瀏亮（音の流るゝ如く明にひびくこと）○鳴を靜めて（おともせずに）

○傾聽（耳をむけてよくきくこと）○具さに（こまかにのこらず）○師の君（ししやうのあなたさま、今の秘曲を教へられたれば師といふ）○武運（たゝかひの運命）○凱陣（かちいくさしてかへること）○中を隔つる夜嵐（二人の別かるゝ間をきる風）○颯々（風のふく音）

二　自然の音樂

調子（しらべあはせ）○琴（樂器にして支那の琴と日本の琴とあり、日本のは六絃なり）○笛（竹をもつて造れるもの五六の穴ありて音を出す）○三味線（琉球より渡來せし樂器にして猫皮を以て張る）○ピヤノ（西洋の樂器にして形オルガンの如し）○オルガン（西洋の樂器にして殆ど學校として備へざるなし）○音曲（ふしありて高低きまりあるもの）○人爲（人間のしわざ）○鶯 ○雲雀（雀に似て少し形大なり）○松蟲（こほろぎに似て褐色なり、ちんちろんと鳴く故俗にちんちろんともいふ）○松風（松の木の間をふく風）○しらべ（調子なり）○鷄 ○烏 ○山がら（山雀と書く、形雀に似て茶褐色なり）○鳶 ○鳩 ○梢（小えだ）○胡弓（形三味線より小にして糸は四本弓形のものにてこすればきーきーの音を發す）○ひぐらし（蟬の一種にして夏の末に日暮頃になく）○夕日沈めば（太陽が没すれば）○鈴蟲（こほろぎに似て秋夜になく、りんりんと鈴の音の如くければこの名あり）○機織（はたおり）

（むしの略、其聲機をおるが如きより名づく）○ひちりき（古樂に用ふる樂器にして笛に似て同じく竹の管にて造る）○尺八（竹の管にて造られ長さ一尺八寸あればこの名あり）○落葉をくゞる（小川などに木葉の浮べる下を水が流るゝなり）○琵琶（もと支那のものにて四絃なり今もこれあり）○月琴（形びはに似たれども圓し、これも亦支那より渡來せるもの）○豆太鼓（小さいたいこ）○瀑布（大きなたき）○喩へんに物なし

三　うかれ胡弓（一）

心懸（ふだんの注意）○骨ををします（骨をり仕事をきらはぬ、又なまけぬこと）○吝嗇（けちんばう）○怨ます（にくいと思はぬ）○ポケット（洋服のかくし）○急いだ ○頂邊（一番高いところ）○汚いなり（きたないきものをきて）○面相（かほつき）○戴かして ○可哀さうだ（あはれ）○一倍（ばいも、なほ一層）○御仕合（幸福）○疲れて（やつれて）○握り（つかんで）○嫌な（見ぐるしい）○勘辨して（ゆるして）○情ない（あはれな）○三遍（さんど）○悔いない（後悔せぬ、たしいと思はず）○天晴（ほめことば、見上げたものだ）○魔神（魔をつかう神なり）○姿 ○穢い ○白衣の天人（白い着物をまとひて天の上に住む人）○且は驚き且笑ふ（驚いたり笑ふんだりして）○ヴイオリン（西洋の樂器にて四絃、我が胡弓に似て弓形のものにてこすればきい〳〵の音を出す）○一挺（鐵砲一つのことを一挺といふ）○射落す（うちおとす）

四　うかれ胡弓（二）

勞働（ほねをり仕事をすること）○古着屋（一度人の着たる古き服類をあきなふみせ）○辨當屋（べんたうをつくりあきなふみせ）○馳走（よばれること）○方々（あちこち）○旦那（下女下男より主人に對していふ語其他下よりいふ尊稱の語）○御機嫌よう（あいさつの語）○資本（もとで）○頼む ○覗ふ（ねらふ）○嘘 ○試して ○鳴物（音樂の類）○嫌ひ ○中る ○乾度（たしかに）○聲に應じて（聲の發するとすぐに）○エレキ（電氣）○跳ね ○構はず ○大袈裟（小さきことをさも大きな事のやうにいふなり）○告訴（うつたへる）○逮捕（つかまへる）○矢庭（急にすぐさま）○せん方なく（別にしかたなく）○職務を執行す（自分の仕事をする、こゝでは捕へること）○評議の末（語らひはかりたる後に）○難なく（ぞうさもなく）○宣告（裁判官の云ひ渡し）

○周圍《シウヰ》り（まはり） ○刑吏《ケイリ》（死刑を行ふ役人） ○絞首臺《カウシユダイ》（首きりだい） ○側《ワキ》 ○縛《シバ》り（むすび） ○我慢《ガマン》（こらへてなる）
○足拍子《アシビヤウシ》（節をとつて足をふむこと） ○體中《カラダヂユウ》（からだぜんたい） ○生憎《アイニク》（都合わるく） ○摺《ス》り破《ヤブ》り（すりきり）

五　座右《ザイウ》の銘《メイ》

父母《フボ》をいとほしみ（父母を愛して孝をつくすなり） ○兄弟《ケイテイ》にむつまじ（兄弟仲よくすること） ○本《モト》かたまれば末《スヱ》しげし（木の根がよければ枝葉は自然と繁る如く父母に孝に兄弟に友なれば道徳の根堅く随つてその他のことごとも完全なるを得るとなり） ○老《ラウ》を敬《ウヤマ》ひ（老人を尊敬し） ○幼《エウ》をいつくしみ（をさなき者をかはゆがり） ○有徳《イウトク》を尊《タフト》び（徳のある立派な人物を尊敬し） ○無能《ムノウ》をあはれむ（働きのない力のない者をいたはる） ○祖先《ソセン》の祭《マツリ》を愼《ツヽシ》み（吾家の先祖を大切にし謹みて祭りをとり行ふこと） ○子孫《シソン》の教《ヲシヘ》を忽《ユルカセ》にせず（子孫の榮ゆる爲めその教育を冷談にしてはならぬ） ○辭《コトバ》は中《アタ》るべくして（日常の言語は空なことをいはず道理にかなふたことをいふ） ○行《オコナヒ》は敏《サト》くして厚《アツ》く（行爲はなるべくさかしく人に對して情厚きことを要す） ○法《ハフ》（のつとりて、すべき道） ○誡《イマシメ》（なすべからざるかゞみ） ○怒《イカリ》に難《ナン》を思《オモ》へば悔《クイ》にいたらず（いからんとする時に若し怒れば後に難儀の生ずることを思へばいかりもさけ、随つて後々のこうくわいをするにも及ばぬ） ○欲《ヨク》に義《ギ》を思《オモ》へば恥《ハヂ》をとらず（欲がおきても他人に對する義理人情を思へば無理な欲も出されば恥をかくこともなし） ○儉《ケン》より奢《シヤ》に移《ウツ》るは（けんやくをやめてたごりをすることは） ○樵夫《キコリ》（山にたきゞを採る人） ○漁夫《ギヨフ》（魚をとる人） ○人《ヒト》の過《アヤマチ》（他人のしくじり） ○施《ホドコ》して報《ハウ》を願《ネガ》はず（人に物を與へたからとてそのむくいをこひねがはず） ○受《ウ》けて恩《オン》を忘《ワス》れず（人より物など受けては決してその恩をわすれてはならぬ） ○他山《タザン》の石《イシ》は玉《タマ》を磨《ミガ》くべし（石でも立派な玉をこすりて光を出すと等しく、小人の言も時に君子の一助となることあり） ○憂患《イウクワン》のことは心《コヽロ》を磨《ミガ》くべし（うれひごとも心をみがくたれとなる） ○水《ミヅ》を飲《ノ》んで樂《タノ》しむものあり（をごりをせず、つまらぬものを食べ、着て自分のたのしみとする人もあり） ○錦《ニシキ》を衣《キ》て憂《ウレ》ふるものあり（美しき衣服をきても樂むことのできぬ者もある） ○出《イ》づる月《ツキ》を待《マ》つべし（これから來るべき樂ひを待ち望み） ○散《チ》る花《ハナ》を追《オ》ふことを勿《ナカ》れ（過ぎ去りたることを求めんと念頭に置くべからず） ○忠言《チユウゲン》は耳《ミヽ》にさかひ（まごころの言は聞くにつらけれど、利すること多く。甘き藥は口ににがけれどきゝめあり）

六　母《ハヽ》を喪《ウシナ》ひたる友《トモ》に

拜啓（手紙の語にて謹みて申すの意）○承りて（伺りて）○俄に（急に、さつぜん）○歸郷（自分の國へ歸る）○平素（ふだん）○至極御壯健（非常に御丈夫で）○はかなき（もろきこと）○電光（電の光のひかり光るや忽ち消えるごとく一寸の間）○朝露（露の消え易きこともろきこと）○喩へ（なぞらへ）○旅の空にて（旅に出てる身にて）○郷里（國もと）○何やかや（いろ〳〵）○温容（おだやかなるやうす）○夢幻の樣に（ゆめまぼろしのやうにぼんやり消え去りたること）○颯々○御力落し（がつかりして）○不取敢（餘事はさしおき先づ）○御悔み（死をくやみとむらふこと）○頓首（手紙の終りに敬語として書く、首をさげて禮をすること）

七　秋の山里

蟬（前出）○松蟲（前出）○鈴蟲（前出）○はやうも○谷かげ（たにあひ）○萩（山野に生じ莖は根より出で秋うす紫の花をひらく）○桔梗（草名秋の初め莖の先に花を開く紫色なり）○すゝき（薄、草の名、秋に至りて長き莖を生じ白き花を開く）○穗○柿○追々（だん〳〵）○茸狩（山に登りて、松茸、しめぢなどをたづね求むること）○しめぢ（濕地茸の略、形松茸に似て小く、蓋の面はうす黑し）○松茸（山中雌松多き地に生ず低きは一二寸高きは尺に達す、蓋の上栗黑く、裏は白くしてきざみあり、香氣高くきのこ中の最とす）○はつ茸（きのこ中最も早く生ずればこの名あり、形松茸より小く初生より傘をはる）○落葉の下（かれて落ちたる葉の下などに）○まむし（へびの一種長さ一尺餘、最も危險なるものなり、毒牙は常に口中にあり口を開けば毒牙立つ）○山雀（前出）○目白（小形の鳴禽類にて美音を發す眼のふち白ければこの名あり）○鶸（小形の鳴禽類にて、全身青くして黃を帶ぶ、頭とつばさは黑く、腹は灰色なり）○頰白（目白より大きく灰赤色にて背に黑斑あり、頰は白く翼の兩端に白羽あり）○霜（秋の末朝ふる白色の雪の如きもの）○谷川（たにあひを流るゝ川）○梢（前出）○湧く○かなたこなた（あちこち）○谷間（谷と谷とのあひだ）○櫨（漆の木の一種、葉の漆の木に似て鋸齒あり、實より蠟をとる）○楓（大なるものは高さ數丈にものび、葉は七八より十ぐらゐまでに分れ、春の末の若葉は紅にして夏青色となり、秋紅葉すれば、この木を專らもみぢといふ）○銀杏（大木にして扇形の葉をもち、又實を有す）○栗（喬木にして葉は細長く秋の末とげに包まれたる實を結ぶ）○くぬぎ（櫟大なるものは高二三丈にも及ぶ葉は栗に似たり、實を結び秋熟す、どんぐり是なり、たきゞとして又すみとして最も貴し）○古錦襴（錦の一種にして横に金絲を交へて種々の模樣を織り出せるを金襴といひ、今は京都にて織り出せども古、支那より舶來せしかば古錦襴といふ）○干柿（澁柿など皮をむきて糸にさして軒下にほし乾するもの）○柴を刈り○路ばた（みちのわきに）○とかくするうちに（かれこれ日數のたつうちに）○木枯

の風（秋冬吹く疾き風のこと）　○峯（山の頂き）　○落葉舞ひ立ち（かれて散る葉が風のためにとび上ること）　○木々の枝まばらになる（木の葉がかれて散る故に枝は葉少く爲めにその間はまばらとなる）　○杣の煙（山林より伐りたる木材を杣といふ、その木材を焚く煙をいふ）　○獵銃の響（山に鳥獸をとるために打つ獵銃のひびき）　○折々（時々）　○藁がこひ（わらを以て霜雪など防ぐ爲めに物をかこふなり）　○とりどり（かれもこれもの意にて色々といふこと）　○暫（少しの間、ざんじ）　○冬ごもり（冬の寒き間動物、草木、などこもりて過ごすなり）

八　保護鳥

○畠（畑と同じ）　○案山子（人の形を造りて田畑の中へさして、鳥の米麥を害せぬやう、鳥追ひとなす）　○鳴子板（同じくこれも亦鳥追ひの一種にして田畑の中へ高く板をたて、それになはをつけて、かなたにてそのなはをひけば、板はばた〳〵音を出す）　○農藝（田畑をたがやすしごと）　○妨（じやま）　○明瞭（めいはく、あきらかなり）　○混蟲（體は頭胸、腹の三部より成り、頭に一對の觸角（ひげ）あり、多くは一對のはねを有す）　○蠕蟲（體はやはらかにして形長く毛蟲などこの類なり）　○毛蟲（褐色又は黒色長さ二三寸、身は圓長全身にこわき毛あり、木の枝にすみ葉をくふ、後化して蝶となる）　○青蟲（いも蟲の類、形小く綠色にて、青菜などの葉に生ず後に化して白蝶となる）　○芋蟲（形かひこに似て長一二寸より三四寸に至り色は黒と綠とあり後に化して蝶となる）　○根取蟲（地蟲ともいひ形芋蟲に似て土中に住む長さ一寸ばかり色白く首赤く、尾黑し草の根を食ひて害をなす故に、この名あり後に化して蟬となる）　○尺取蟲（歩むありさま尺をとるに似たるよりいふ、夏秋の頃木葉に住みて害す、色多くは青く、又茶褐色なるもあり、形細長く一寸位）　○かんぼ（體、頭、はね共に細長く、觸角長く、止るときは、はねを半開す、幼蟲は濕地に多く、腐敗物を食とす）　○あぶら蟲（長さ一寸許、全身油色にて黒みあり、これにふるれば油の如きにほひを放ちて己れを守り、船中に住む）　○浮塵子（最も大なる稻の害蟲にて、一年に二三回發生し幼蟲は性としてとびはね、害をなす最も甚だしきは幼蟲及び蛹（さなぎ）の時代にあり、成蟲はあまり加害せざるが如し）　○甲蟲（一名さいかちむしといひ、雄は額片より角質の長き突起あり晝は伏して夜とぶ）　○介殼蟲（介殼狀のものを出して身體をおほひ一見蟲の如き形を欠く、害蟲なり）　○農作物（田畠を耕して作り出す物）　○收穫（とりいれ）　○零（皆無ぜろ）　○天の配劑（自然の手くばり）　○繁殖（ふはろこと）　○間接（とほまはりに）　○退治（敵をうちやぶること、せいばつ）　○燕（つばくらめの畧、小鳥にして春になる頃暖地より來りて秋になる頃去る、紫黑色にて、羽長く尾も長く人家の軒に巣を造る）　○小雀（體長三寸五分位の鳴禽類にて背面は褐灰色、頭の頂は黒色樹木を害する昆蟲を喰ふ）　○日雀（小なる鳴禽類にして、頬は白色のどは黒色、腹は灰白色はねと尾とは黒し、害蟲を食するなり）　○四十雀（小鳴禽類、背部黑白の斑をなし、のどさき黒く、黒線のびて脚間に達す、常に木の間をとび、害蟲を食す）　○五十雀（小鳴禽類山雀

に似て小なり、腹黑く背うす青く尾短し、秋來りて去る、害蟲を食す　◯柄長（エナガ）（小鳴禽類にてくちばし短く尖り、尾は體よりも長く、頭白し）　◯菊戴（キクイタヾキ）（形目白に似て、頭上に形紺菊に似たる黃色の毛あり、背と羽とは綠色、くちばしは少し黑し）　◯雪加（セッカ）（形鶯種にて、羽毛は灑褐色にて、背邊に暗黑き縱斑あり、くちばしあし共に青し、なき聲よし）　◯蟲喰（ムシクヒ）（ほささますの一種頭背は黑ばみたる灰色にて、腹は黃色をたぶ）　◯瑠璃（ルリ）（雀の類大さ相似たり、はね、背、胸共に瑠璃色にて腹は白し、その色の美しきこ、よく鳴くきこにより、多く愛せらる）　◯鶲（ヒタキ）（山野の林にすむ、大雀ほどにて羽色美しくその聲清く愛すべし）　◯三光鳥（サンクワウドリ）（羽黑く腹白し頭の冠の如きものあり尾極長し）　◯鶺鴒（セキレイ）（形燕に似て色灰味をおび尾長く、腹白し）　◯鷦鷯（形雀に似て小く、くちばしも尖り、身は灰色にて黑こ褐きの細き斑あり冬來り春巣野を出す）　◯杜鵑（ホトヽギス）（山中にすみ、夏秋の候中天になく、雄は胸腹灰黑にて白斑あり、雌は肩つばさ黑し腹白し、又口中赤く足は少し青味をおびて自ら巣を營することなく他の鶯、頬白等の巣中に卵を產み置き、その鳥をして養育の勞をとらしむ、故に巣を營むことなし）　◯郭公（クワクコウ）（形ほとゝぎすに似て、やゝ大なり、この鳥も亦自ら巣を營むことなく他鳥の巣中に產卵す、其聲のくわツこうと聞ゆるよりこの名あり）　◯蚊母鳥（ヨタカ）（體長七寸許、つばさ長くとぶ力強し脚は發達よろしからず、晝間は樹上に眠り夜間出で、昆蟲を求め食ふ）　◯鵂鶹（ミヽヅク）（ふくろふの一種大さ鳩よりも小く、頭の側に羽毛の突起あり、是耳に非ずして單に羽毛の長きのみ眼は夜は明にて小鳥を求め食す）　◯鴞（フクロフ）（晝間は木の間に眠り、夜間出で食を求む、木兎に似て頭大きく、顏側に毛の突起あり眼大にして、耳の孔すこぶる大なり、かすかなる音をも聞き得、鳴く聲人の呼ぶに似たり）　◯鳶（トビ）（鷹に似て稍大、茶褐色にて尾開き、くちば

ばし曲れり、晴天空にかけ環翔にきび下て食をつかみ去る）　◯鷲（ワシ）（鷹の類大くして大なるもの）　◯雉（キジ）（鷄類に屬し嘴強くして少し曲り、つばさは比較的小にして飛力強く、原野にすみ、美味なり）　◯鸐鷄（ヤマドリ）（雉に似て大なる鷄類なり、全身黃赤にて尾は雉より長し）　◯鵯（ヒヨ）（體長七寸許の鳴禽類にて尾長く、胸腹は灰青にて斑あり、くちばし黑く脚長し）　◯椋鳥（ムクドリ）（群棲の鳴禽類に屬し、形鶇に似て小し頂白く背灰黑にてくちばし脚共に黃なり）　◯雲雀（ヒバリ）（前出）　◯鵙（モズ）（鳩に似たる小さき鳴禽類にて眼が鷹の如く、くちばしの先曲りて鋭く頭と背は褐色にて、脚黑く、尾長し）　◯雷鳥（ライテウ）（鷄類に屬し、形雉に似て、高山に棲み夏は草色の羽毛を生じ、冬は白色に變ずる保護色あり）　◯鶉（ウヅラ）（鷄類に屬し原野に棲み、形毬の如く首小く、尾短く全身褐色に黑白の斑あり、肉は美味なり）　◯杉鷄（エゾヤマドリ）（北海道に產す、山鳥の一種なり）　◯鳩（ハト）（大さ七八寸許、頂より背の邊は綠にて、つばさ、尾黑く、くちばし青く、脚赤し）　◯鷸（シギ）（くちばし長く、沼や澤などに住みて小魚蟲類を食ふ）　◯大抵（タイテイ）（たいがい）　◯大功（タイコウ）（大なるてがら）　◯困難（コンナン）（くるしみこまる）

九　問答（モンダフ）の歌（ウタ）

◯酸（ス）くして（すつぱくして）　◯葉陰（ハカゲ）（葉のした）　◯辛（カラ）きは（舌さきにつよくしみることなり）　◯たゞいかにせむ他（ヒト）の上（ウヘ）（柿の甘き澁柿の酸きことはよくわきまふるを得れども他人の身の上の性質、心の底などは計り知るべからざるなり）　◯拙（ツタナ）き（けこうでない、にぶし）　◯棄ぬべき世（ヨ）とも見え

されば（二つながらもちて居られる世でない、この世の中で、あれもこれもと、取り持つてゐることはできぬ、）　○のたまふ（云はれたる）　○任せ（勝手にさせる）　○せめて辛きを守り頼まん（今更仕方なき故に止むを得ず辛きまゝの性質を保ちて我身の特質と致さんとなり）

一〇　禽獸の言語

一犬虚に吠えて萬犬實を傳ふ（一匹の犬が、ある物の形を見てこれに吠ゆれば多くの犬がその聲の聞きて皆吠え集るなり）　○近傍（ちかきあたり）　○勿論（云ふまでもなく）　○驚き逃ぐ（おどろいでにげだす）　○草むらの蟲の音（草の茂る中にひそんでゐる蟲のなき聲）　○自然の音樂（前出）　○同種族間（ちすぢの同じものの間）　○意味（わけ、理由）　○人類（人間のこと）　○完全（充分に出來上りたる）　○合圖通信（手まね目付などいろ〳〵の仕方にて一方のものに知らせること）　○何等かの方法ありて（我々人間には、わからねど何かしらの仕方がありて）　○共同して（いつしよになりて）　○敵の襲來（敵のせめよせくること）　○蜂合戰（いろ〳〵の蜂集りて戰をするなり）　○蛙合戰（蛙の集りて、戰をすること）　○間々（たまには）　○高等動物（下等動物に對しての語、犬猫の如きは動物の中でも高等のものなれば、かくの如く云ふ）　○躍り上り（とびあがり）　○喜悲の情（よろこびとかなしみの心のやうす）　○容子（ありさま）　○意中（心中）　○察す（考へて知る、さうぞうする）　○巴里（フランスの都）　○一婦人（ひとりのをんな）　○日頃（つねに）　○獸醫（けものの病氣を治する醫者）　○許（ところ、ありか）　○療しやりたるに（てあてを加へて治す）　○件（前にありしことを指していふ語、さきの）　○戸外（家のそと）　○高吠して（聲高く吠え）　○怪みて（ふしぎにおもひて）　○訴ふる（云ひたてる）　○路傍（みちばた）　○合點して（心にわかること）　○手術（てあて）　○施し（あたへる）　○會得（前の合點といふに同じ）　○伴なはれ（つれられて）

十一　動物の自衞

牙（前齒と奥齒との間にありて鋭く尖れる齒左右上下各に一つづゝあり）　○角（頭部に二本突出してその先は尖りて鋭し）　○鷲（鷹に似て形大なり、くちばし尖り、眼鋭くく猛き鳥なり）　○獅子　○虎　○猛獸（つよきけもの）　○爪牙（つめやきば）　○具へ（もつてゐる）　○護り　○斃す　○武器（いくさだうぐ）　○相當（それ〴〵）　○自衞法（自からまもるてだて）　○さゞえ（螺蠑）　○はまぐり（蛤）　○行歩（あゆみ）

○貝殻《カヒガラ》 ○潜む《ヒソ》（かくれ入る） ○猛き《タケ》（つよき） ○襲ふ《オソ》（せめよせる） ○蝦《エビ》 ○蟹《カニ》 ○龜《カメ》 ○甲蟲《カブトムシ》 ○はた終り《シマ》（またそのとほりである） ○鎧を被り《ヨロヒ カウム》（よろひを着て） ○例へば《タト》（たとへていへば） ○ひきがへる（蟇、蛙の屬にて形大なり、性鈍く行こと遲し） ○紛はし《マギラ》 ○野兎《ノウサギ》 ○墨汁《ボクジフ》（くろきしる） ○吐き《ハ》（はきだし） ○濁らせ《ニゴ》 ○匿す《カク》 ○鼬《イタチ》 ○窮す《キユウ》（おひつめらるゝ） ○悪臭《アクシウ》（くさいにほひ） ○雁《ガン》 ○鴨《カモ》 ○群居《グンキヨ》（たくさんあつまりゐて） ○見張番《ミハリバン》 ○哨兵《セウヘイ》（みはりの兵士、歩哨） ○腕力《ワンリヨク》（うでのちから） ○鋭き《スルド》（きれる） ○智力秀で《チリヨクヒイ》（ちゑがすぐれる） ○工夫《クフウ》して（かんがへて） ○和親協力《クワシンケフリヨク》（なかよくして力をあはせる） ○猛獸毒蛇《マウジウドクダ》（つよきけものどくあるへび） ○驅り立られ《カ タテ》（おひたてられ） ○山の奥《ヤマ オク》（とほき山の方） ○野の末《ノ スヱ》（のはらのすゑの方） ○辛うじて《カラ》（やうやく） ○生を保つ《セイ タモ》（いのちをつゞける） ○最大利器《サイダイリキ》（一ばんすぐれたるだうぐ）

十二　上野博物館《ウヘノハクブツクワン》

中學生《チウガクセイ》（中學校の生徒） ○教師《ケウシ》に伴なはれ《トモ》（せんせいにつれられて） ○路すがら《ミチ》（とちゆうにて） ○將來の目的《シヤウライ モクテキ》（のち〳〵めみこあ） ○語り合ひ《カタ アヒ》（はなしあひをして） ○武勇絶倫《ブユウゼツリン》（ぶげいとゆうきが人にすぐれたること） ○世界に隱なし《セカイ カクレ》（せかいに知れわたる） ○余れ《ヨ》（われ） ○他日《タジツ》（こののち） ○國威《コクヰ》（わがくにのゐくわう） ○發揚《ハツヤウ》る（あげ） ○國力《コクリヨク》（國のちから） ○充實《ジウジツ》す（みたす） ○實業《ジツゲフ》（じつちにおこなふなりはひ） ○如く《シ》はなし（およぶものはない） ○成人《セイジン》（おほきくなりて） ○途《ミチ》（方法） ○講せん《カウ》（たてやうさだもふ） ○物利《ブツリ》（ものゝりえき、實業をいふ） ○兵力《ヘイリヨク》（軍備） ○爭鬪《サウトウ》（あらそひ） ○國光《コククワウ》（くにのひかり） ○美術家《ビジユツカ》（詩歌、音樂などに從ふ人） ○模範《モハン》（てほん） ○終始《シユウシ》（はじめよりをはりまで） ○微笑をたゝへ《ビセウ》（にっこりわらふこと、滿はみちみつるにいふ） ○問答《モンダフ》し（はなし） ○諸子《シヨシ》（みなさん） ○利益《リエキ》する（とく） ○げにも（實に） ○百聞は一見に如かず《ヒヤクブン イツケン シ》（百たび聞きたることよりも一たび見たものゝはうが、よく心におぼえるとなり） ○運慶作《ウンケイサク》（運慶のつくりたるもの、運慶は康慶の子にて京都の佛師、後鎌倉に移り、鎌倉佛師の祖と稱せらる　建久年間の人） ○佛像《ブツザウ》（ほとけさま） ○歴代《レキダイ》（だい〳〵） ○名手《メイシユ》（めいじん） ○彫刻物《テウコクブツ》（ほりもの） ○模造品《モザウヒン》（まねてつくりたるもの） ○古今《ココン》（むかしより今日まで） ○繪畫《クワイグワ》（ゑ） ○可憐《カレン》（かはゆらしい） ○未來《ミライ》（すゑ〴〵） ○驚倒《ケイタウ》（びつくりする） ○加藤清正《カトウキヨマサ》（幼名虎之助、秀吉に仕へて其功多し） ○槍《ヤリ》 ○豐《トヨ》

臣秀吉（トミヒデヨシ）　○鞍（クラ）　○正宗（マサムネ）（鎌倉のかたなかぢなり、初代行光の子、岡崎五郎入道と呼ぶ）　○村正（ムラマサ）（伊勢のかたなかぢ、此人の鍛へし刀は、能くきれるを以て血を見ずば再び、さやにをさまらずと云ふ、故に三十人斬、百人斬などの話をつたふ）　○武器（ブキ）（いくさだうぐ）　○驚嘆（ケイタン）（おどろいてかんしんする）　○階（カイ）（二階）　○材料（ザイレウ）（もとになるしな）　○標本（ヘウホン）（みほん）　○國力論者（コクリヨクロンシヤ）（國をとまさんとする人）　○一巡（イチジユン）（ひとめぐり）　○博（ヒロ）く　○參考品（サンカウヒン）（かんがへをきめる爲めいりようのしな）　○各種（カクシユ）（いろ〳〵）　○研究（ケンキユウ）に資（シ）す（しらべるについてのもとゝする）　○見聞（ケンブン）を擴（ヒロ）め（み、きゝすることをひろくする）　○知識（チシキ）を益（マ）す（ちゑをふやす）　○文明諸國（ブンメイシヨコク）（ひらけたくに〴〵）　○著目（チヤクモク）（めをつける）　○設置（セツチ）（たてる）　○成（ナ）り（できあがり）　○改稱（カイシヨウ）（名をかへる）　○京都（キヤウト）　○奈良（ナラ）　○保存（ホゾン）（ながくもちつゞける）　○主眼（シユガン）（第一とする）　○行（ユ）く〳〵（すゑ〴〵）　○幾多（イクタ）（たくさん）　○滿足（マンゾク）（十分におもふて）　○辭（ジ）せり（ひきさがる）

十三　度量衡（ドリヤウカウ）の原器（ゲンキ）

長短（チヤウタン）（ながいとみじかいと）　○度（ハカ）る　○尺（モノサシ）　○容積（ヨウセキ）（かさ）　○量（ハカ）る　○桝（マス）　○輕重（ケイチヨウ）（かるい、おもい）　○衡（ハカリ）　○秤（ハカリ）　○衡（ハカリ）（はかりも秤の竿の意なれども轉じて秤の總名となれり）　○一定（イツテイ）（きまりたる）　○標準（ヘウジユン）（めあて）　○人毎（ヒトゴト）（人により）　○處毎（トコロゴト）（ところにより）　○時毎（トキゴト）（とき〴〵）　○商業上（シヤウゲフジヤウ）（しやうばいのうへ）　○約束上（ヤクソクジヤウ）　○齟齬（ソゴ）（くひちがひ）　○社會（シヤクワイ）（よのなか）　○經濟（ケイザイ）（くらしむきのこと）　○秩序（チツジヨ）（きりつ）　○弊害（ヘイガイ）（わるいふう）　○原器（ゲンキ）　○確定（カクテイ）（かたくきめる）　○必要（ヒツエウ）（たいせつのこと）　○所以（ユヱン）（わけ）　○現今（ゲンコン）（たゞいま）　○世界各國（セカイカクコク）　○概（オホム）ね（たいてい）　○佛蘭西（フランス）　○採（ト）る　○メートル（佛語、我が三尺三寸にあたる）　○基（キ）（どだい）　○キログラム（佛語、我が二百六十六匁二分三毛にあたる）　○白金（ハクキン）（プラチナともいふ、銀白色の鑛物なり）　○イリヂウム（光澤ある白色金屬なり）　○合金（ガフキン）（まぜあはせてつくりたるもの）　○縦（タテ）　○X狀（エツキスジヤウ）　○端（ハシ）　○標線（ヘウセン）（しるしのすぢ）　○攝氏（セツシ）（セルシユウム氏）　○零度（レイド）　○蓋（ケダ）し（おほかた）　○物體（ブツタイ）（もの）　○溫度（ヲンド）（あたゝかさ）　○伸縮（シンシユク）（のびちゞみ）　○過不足（クワフソク）　○質（シツ）（たち）　○圓柱形（エンチユウケイ）（まるいはしらのかたち）　○直形（チヨクケイ）（さしわたし）　○許（バカリ）　○質量（シツリヤウ）（じつしつのめかた）　○一貫（イツクワン）　○特別（トクベツ）　○底面（テイメン）（そこ）　○各邊（カクヘン）（まはり）　○正方形（セイハウケイ）（まつしかく）　○方柱（ハウチユウ）（まるいはしら）　○現今（ゲンコン）（たゞいま）　○僅（キン）

〳〵（かわる〳〵）○劃す（きりつける）○手間料　○非常（たいそう）○注意　○熟練　○要し（なければならぬ）○方法（しかた）○結果（できばえ）○得難き（できにくい）○加減　○聊か（すこし）○差異（ちがひ）○幾何か（どれほど）○延長（のばし）○差ひ（ちがひ）○豈（なんぞ）○精密（こまかき）○貴重なる者（たいせつのもの）○國庫（政府のくら）○秘藏（しまひおく）○副原器（別におきのかいと同じものをつくりたるもの）○檢定（しらべ）○供す（そなへる）

十四　除夜の老人

年の瀬や水の流も人の身も（流れゆく水のしばらくもとまらずしてかはり行く如く人の身のたちまちにかはりゆくといふ心にて大高源吾が大石内藏之助等とはかりて主君の仇吉良義央を討たんとしてわざと身をやつし居たるに俳人其角（きかく）の呼びかけていひしことなりと云ふ）○大三十日（十二月の三十日）○首をうなだれ（くびをさげて）○燈下に坐し（あかりの下にすはり）○そゞろに（なにゆゑともなく）○感慨に堪へざる　○富豪の家（かねもちのいへ）○生活の苦（くらしをたてることのなんぎ）○中年（なかごろ）○家産を蕩盡し（しんだいをつぶし）○貧窮（びんばふでくるしきこと）

○鰥り　○妻に別れ　○子に離れ　○孤獨（ひとりもの）○寄る（たよる）○剩へ（そのうへ）○病魔の身に纏ふ（びやうきにかゝること）○前途（このさき）○一縷の望（ひとすぢのみこみ）○いたづらに（たゞ〳〵）○新年を迎へんとす（正月をむかへやうとする）○膝下（ひざもと）○嬉戲（あそぶこと）○少年の頃（こどものとき）○如何に（どんなに）○賑しく樂しかりし　○奴婢（めしつかひ）○召し使ひ　○暖衣飽食（十分にきものを着てうまいものをたくさんたべる）○不自由　○爭でか（どうして）○境遇（ありさま）○測られぬ　○人の一生　○つら〳〵（よく〳〵）○自己（おのれ）○生涯（いきてゐるあひだ）○回顧（ふりかへりみる）○悔恨（くやみうらむ）○悲歎（なげきかなしみ）○涙にくれ（なきしづむ）○古人（むかしの人、朱熹をいふ）○少年老い易く學成り難し（わかき人は忽ち老人となりて、がくもんはなか〳〵にできあがりがたいものである）○月日　○げに（實に）○白駒の隙を過ぐるが如し（白駒は日かげ、隙はあななり、日かげのあなをとほるやうに人生のみじかきをいふ）○紅顏（年わかきときは顏色あかきゆゑにいふ）○白頭の翁（しらがあたまのとしより）○心せよ（きをつけなさい）

○青年諸子（年わかき人々）　○勉勵（つとめはげみ）　○歎あるべし（なげきがおこるであらう）

一五　立志

長短（ながきさみじかきさ）　○左程　○考へ　○通例　○際限（かぎり）　○自覺（じぶんからさとり）　○生命（いのち）　○一大事業　○成し遂げ　○豫想（まへもつてかんがへる）　○別段　○右樣　○覺悟　○必要（たいせつ）　○何分　○春秋に富んで（としわかきをいふ）　○歳月を送る譯にいかぬ　○折角　○人間　○無駄　○虞　○寶の山に入りながら、空しく歸る（蔡虚齋四書蒙引に寶山に入り手を空しくして回るとあり）　○遺憾（ざんねんにおもふこと）　○疾くに（はやくより）　○計畫（もくろみ）　○勵んで（ほねをりて）　○それ相應（それだけ）　○結果（できばへ）　○歷史　○英雄（立派なる男子）　○豪傑（ゆうきのすぐれたる人）　○賢人（德の高き人）　○君子（行の正しきひと）　○人傑（すぐれたるひと）　○青年（わかき人）　○古人に愧ぢない（むかしのひとにまけぬ）　○境遇（ばあひ）　○精細に（こまこまかに）　○段々

○學問經驗　○慣れ　○併し　○成し遂げよう　○譯は　○勉强の功（べんきやうのほねをり）　○萬事（なにごとも）　○大方針（大なるもくてき）　○一大人物（すぐれたるひと）　○現れ出で　○普通（なみ〳〵）　○唯々　○大浪　○捲き込まれ　○大海に漂う　○工合　○赴く　○絶えず（しじゆう）　○將來（こののち）　○非常の功（たいそうなるてがら）　○眞の男兒（ほんたうのをとこ）　○面目を存する事（かほむけすること）　○他人の勸

○始終　○充分で無い　○固より　○先輩（さきだちて、がくもんのすぐれたるもの）　○知識（ちゑ）　○經驗（ためし）　○乏しい　○執るべき　○方針を極め（むかふところをきめる）　○參考　○悉く（のこらず）　○一致（一つにであふ）　○照し（てりあはせる）　○取捨（とりすてる）　○確定（しつかりときめる）　○自發的奮勵心（じぶんみづからはげみつとむるこゝろ）　○基礎（どだい）　○多大（たくさんあること）　○運命（うん）　○疑はしい　○貫いて　○例へば　○文學者（文などをあつかふひと）　○何時まで　○終局（しまひまで）　○困難（なんぎ）　○遭遇（であふ）　○堅固（かたきこと）

○試す ○機會（をり、はづみ） ○貫徹（つらぬきとほす） ○挫折（くじける） ○目的（みこみ） ○一變（かへる） ○憐む ○換へる ○再來年 ○生命のあらん限り（いのちのあるかぎり） ○寸毫（すこしも） ○變更（かはる） ○一貫（つきとほし） ○成功（てがら） ○希望（のぞむ） ○日常（つねづね） ○證明（しようこだてる） ○古來（むかしより） ○偉人傑士（すぐれたる人） ○事蹟（しごとのあと） ○強大（つよくおほきい） ○意志力（あることを知り又は感じたることを決行するは意志の力なり） ○條件（ことがら）

一六　維新の三傑

明治維新の大業（徳川幕府をはいして、新に明治の御代にしたる大なる事業） ○御聖德 ○輔弼の大功（主君のために、大なる手柄を立てたること） ○三條、岩倉 ○兩卿（二人、卿は二位三位以上の人の敬稱） ○西郷隆盛 ○大久保利通 ○木戸孝允 ○薩摩（國名） ○長門（國名） ○幕末（徳川幕府の終りに近き） ○勤王の大志（朝家の爲めに力を盡し忠節せんとのこゝろざし） ○百難を排し（多くの困難を受けても能く之をきりやぶりて） ○戊辰の年（明治元年） ○討幕の勅下りし時（徳川幕府の軍を征伐すべきみことのり下りし） ○官軍（朝廷の軍） ○參謀（いくさのはかりごとをめぐらす役） ○幕臣（徳川幕府の家來） ○勝安房（勝安房、初め安房の守たりし故にこの名あり、號を海舟と稱す。航海・測量・砲術を學びたり、維新の際大に國事に盡力し、功によりて海軍卿となり後伯爵を賜はりて薨ず） ○會談（面會して談判する） ○纏め（丸くまとめる） ○江戸市（今の東京市） ○兵火の慘害（いくさのためにおこる火事とさいがいなどの） ○免れる（のがる） ○奧羽地方 ○賊軍（幕府の軍勢） ○征討（せいばつ） ○外交（外國との交涉） ○征臺事件（臺灣をせいばつするといふ出來事） ○全權大使（役の名、天皇より全權をさづけられて外國と談判する役） ○歸朝（本國へ歸る） ○北京（支那の首府） ○談判の末（ある事件に就て議論したる結果） ○使命（つかひの命令） ○償金（そんがいばいせうきん、つぐなひ金） ○內治（本國內の政治） ○帝都（天皇のおはします都） ○遷さる ○遷都の要（都をうつすことの必要） ○說き ○獻議（自分の議論を申し出す） ○主唱の力（先づ第一にとなへたる力） ○廢藩置縣（大名が領せし藩をやめて政府の支配する縣を置くこと） ○率先（さきに立つて） ○政權（國を統治する權） ○朝廷に歸し（帝室の政事のいづるところとなる） ○列藩（國々の大名） ○封土に割據し

領地にかまへなり　○舊觀（昔ながらのありさま）○尚依然（やつぱりもとのまゝ）○思へらく（かんがふるには）○王政復古（ずつと昔の如くに政事の權の王にあること）○名義（なだけ）○諸侯（各大名）○兵力財力（いくさの出來るだけのちから、多くの金や寶）○具れる（有せらる）○幕府恢復の擧（以前のやうに政權は幕府の手にはたあげ）○災を防がん　○納めしむ（さしあげさせる）○尋いで（つゞいて）○薩、土、肥（薩摩、土佐肥後）○三藩主（三つの大名）○同意（さんせい）○四藩連署（四人の大名の名をならべて書きそれに印をおす）○藩籍奉還（德川時代の藩內にありし土地と人民とを朝廷にかへすこと）○大導火（大なるみちび）○郡縣の制（土地を郡や縣に分ちて政府で之を支配すること）○成りぬ（出來上つた）○功績（手がら）○元老院（國家に大なる手柄ありし人々あつまりて國政を評議するところ）○大審院（最上の裁判所）○地方官會議（府縣知事をあつめて會議をすること）○建議（議を立てゝ申し出す）○結果（できばゑ）○大膽（きもだまがふとくてびくともせぬ）○度量（りやうけん）○沈毅（心おちつきて強きこと）○果斷（ぐづ〳〵せぬこと）○機敏（すばやきこと）○忠誠（まごゝろのあついこと）○亂を起し（さうどうをおこし）○刺客（やみうちを行ふ者、島田一郎長連豪等をいふ）○刃に斃れ（ころされる）○まかり（死ぬ）

一七　今日の東京市

江戸（東京のもとの稱）○新橋停車場　○銀座通（京橋區にあるおほどほり）○悉皆（すべて）○煉瓦造（煉瓦は瓦一種、之をつみたてゝ造りたる家）○驚き　○江戸城　○皇居（朝家の御すまひ）○宮城　○御造營（ごふしん）○申すも畏し（こゝにまうすもおそれ多し）○丸の內（皇居の附近一帶をいふ）○附近（そば）○三層（さんがい）○いかめしき（おごそか）○洋風（西洋風）○立ち聳え（高くたち）○當時の大名屋敷（むかしの大名屋敷）○加賀屋敷（前田侯の屋敷本鄉にあり）○帝國大學　○赤門（しゆぬりのもん）○尾張屋敷（德川侯のやしき牛込に在り）○士官學校（兵を指揮する武官を養成するところ）○城砦めける（しろのやうである）○井伊掃部頭（近江彥根の城主井伊直弼）○櫻田の屋敷跡（麴町にあり）○參謀本部（國防用兵のことをつかどる所）○水戸の屋敷（德川侯のやしき小石川にあり）○音に聞えし（名高き）○砲兵工廠（砲銃彈丸を製

造する工場） ○銃砲彈藥（てつぱうや、たいはうなど又そのたま） ○製造場（こしらへるところ） ○夢に夢見る心地す（夢の中に又ゆめでも見るやうだ） ○赤坂 ○四谷 ○市ヶ谷 ○牛込 ○見附見附（昔、番兵のみはりし門なり） ○濠 ○電車往復（でんしやが、いったりきたりする） ○新なり ○かくばかり（これほどにも） ○變轉（かはりゆく） ○太田道灌（名は持資（もちすけ）道灌は入道後の名なり上杉定正に仕へたり） ○築き ○徳川家康 ○改築（つくりなほす） ○歷代將軍（代々の徳川將軍） ○居城（本じろ） ○繁華（にぎやか） ○都府（みやこ） ○御遷都（前出） ○首府（一國の政府のあるみやこ） ○隆昌（さかんなるさま） ○約（およそ） ○麹町 ○神田 ○日本橋 ○京橋 ○芝 ○麻布 ○赤坂 ○四谷 ○牛込 ○小石川 ○本郷 ○下谷 ○淺草 ○本所 ○深川 ○戸數（家のかず） ○人口（人間のかず） ○市區改正（まちなみをかいせいする） ○漸を追うて（だんだんに） ○面目（やうす） ○一新（あらたにする） ○發達（すゝみさかんになること） ○示す（あらはす）

一八　通信交通の機關

○切手 ○贈り ○郵便函 ○投入（いれる） ○容易く ○書信（てがみ） ○通じ（さしだしさゝげる） ○以前（まへ） ○比較（くらべる） ○一封 ○飛脚 ○夜を日に繼いで（よるひるつゞいて） ○億劫 ○江戸 ○故郷人（ふるさとの人） ○音づれ（たより） ○何回 ○新聞紙 ○發行（世に出すこと） ○百般（いろ〳〵） ○事件 ○居ながら（すわりてゐて） ○いち早く ○聞知（きゝしる） ○一郷一里（ひさむら） ○差（ちがひ） ○電信 ○ロンドン（英國の首府） ○報道（しらせる） ○人智（ひとのちゑ） ○電光（いなづま） ○驅使（おひつかひ） ○便利 ○電話 ○大抵 ○架設（まうける） ○自在（おもふまゝに） ○談話（はなし） ○交ふる ○古人（むかしのひと） ○夢にだに（すこしも） ○想ひ到らざりし所（かんがへつかぬところ） ○交通（ゆきかよひ） ○汽車 ○汽船 ○費し（かゝりたり） ○旅程（たびぢ） ○唐（支那）天竺（印度） ○はて（さき） ○行き通ひ ○往復（ゆきかへり） ○大進

歩（大きなすゝみ）　○文明國（學問藝術などのひらけたる國）　○益々　○增進（すゝみますこと）　闇を照らす（くらをあかるくする）

十九　ともし火の歌

○神代のむかし（神武天皇以前をいふ）　○焚きし火　○燈火の始（ともしびのはじめ）　○種油　○菊燈臺（燈臺の一種）　○燈籠　○行燈時代　○年を經て（さしたすぎて）　○蠟燭の火　○最上（一ばんよい）　○西の國（西洋）　○優る　○足れりとはせぬ（十分とはしない）　○上には上の新工夫　○瓦斯燈　○見る目（見て）　○まばゆき（きら〳〵する）　○電氣燈　○燭光（らふそく一本の光を元とす）　○輝く（ひかる）　○しかはあれど（さうはいふものゝ）　○はてなく（かぎりなく）　○智惠　○飽かぬ（あきたらぬ）　○大日輪（太陽）　○大月輪（月）　○退け

二〇　紙の話

○說明（ときあかす）　○筆札（筆にて書くもの）　○書籍（本のこと）　○莫大（たくさん）　○重寶　○障子　○張り　○桐油　○紙衣　○紙帳　○革に擬し（かはにまねて）　○細工　○澁紙　○包物　○紙幣（さつ）　○切符　○折箱　○用途（つかひみち）　○原料　○ありふれた（そのあたりにいくらもある）　○植物（うゑもの）　○纖維（すぢ）　○廉い　○發明　○支那　○後漢　○和帝（後漢第四世孝和皇帝のことにて姓は劉名は肇、年十四にして即位せり）　○蔡倫（字は敬仲才學あり、和帝に仕へて中常侍となり元初年中龍亭侯に封ぜらる）　○麻屑　○敝布　○文人（學者）　○出來ぬ　○なめし皮　○布片　○竹の簡　○漢字（シナ文字）　○埃及　○ナイル河（埃及國中を貫流する大河）　○畔に　○蘆　○一種（ひとたぐひ）　○何時　○詳しく　○推古天皇（第三十三代）　○御宇（ごだい）　○製紙術（かみをつくるてだて）　○美濃紙（美濃國武儀郡諸村より出づ）　○半紙　○奉書　○杉原　○雁皮紙　○藥袋紙　○鳥子紙　○吉野紙　○糊入　○藁紙　○塵紙　○漉返し　○楮　○雁皮（木は楳に似て葉は形南天に似たり、又花は丁子による）　○桑

○麻　○芙蓉（葉花は木槿に似て大きく花は美しくして秋の初に開く）　○胡椒子　○檜　○製法（つくりかた）　○芽　○繩　○小束　○束ね　○釜　○煮立て　○乾かす　○黒皮　○扱く　○浸し　○柔に　○小刀　○表皮　○荒皮　○削り　○眞白　○白皮　○清流（きれいなみながれ）　○晒し　○蕎麥　○莖　○藁灰　○木灰　○笊　○石臺　○樫のたゝき臺　○棒　○漉きにかゝる　○紙漉　○漉槽　○漉框　○簀壓板　○張板　○必要（たいせつ）　○叩いて　○黄蜀葵（こべさもいぶ）　○搔きまはし　○解かす　○楮漿　○簀を敷き　○上框　○幾回　○紙料（かみのもと）　○平等一樣（へいきんにならし）　○濡らし　○外し　○敷板　○裏　○手の甲（てのおもてのはう）　○撫で　○徐かに　○重ね　○端　○水分（みづけ）　○絞り　○許　○剝ぎ取つて　○貼りつけ　○寸法通り　○截ち　○一帖　○十帖　○二束　○十束　○一丸　○發賣（うりだす）　○多少（いくらか）　○相違（ちがひ）　○大體　○順序　○季節　○大槪　○寒中　○水戸の光圀（水戸の城主賴房の第三子なり）　○御殿女中　○紙漉場　○見物　○極寒　○地質　○重量（めかた）　○特長（べつだんにすぐれたるところ）　○進步　○組織（くみたて）　○漉紙（[illegible]えがみ）　○耳紙（[illegible]のこさ）　○紙幅　○輪轉機（いんさつきかい）　○大部（たくさん）　○印刷物（すり）　との　○濾せぬ　○崩れ　○仕舞ふ　○井桁の樣　○防水（みづをふせぐ）　○目的（めあて）　○松脂（まつのやに）　木のやに　○琥珀（[illegible]）を含みたるもの色透明なり　○重寶（べんり）

二一　各國の郵便切手

萬國聯合郵便同盟（多くの國々が約束をして郵便のことを同じやうに扱ふこと）　○文明國（がくもんなどのひらけたる國）　○大抵　○加入（なかまに入る）　○當時（そのころ）　○驛遞局（今は遞信省に合併せられたり）　○百事（いろいろのこと）　○完備（そなはる）　○爾來（そのご）　○現今（いま）　○郵便制度（ゆうびんのきそく）　○非常（たいそう）　○完全（じふぶんにそなはる）　○歐米人

ロッパ○ア
メリカ人　○歎賞（かんしんしてほめる）　○自國（じぶんの國）　○貼用（はりて用ふる）　○何處　○諸外國　○封
書　○葉書　○千差萬別（いろ〳〵ちがふ）　○意匠（かんがへ）　○派手（りっぱ）　○價格（ねだん）　○中央（まんなか）
○菊章（きくのごもん）　○皇室（朝廷）　○御紋章　○かたどれるなり（かたにとりてつくる）　○露西亞　○國
旗に準じ（國のはたにまねる）　○鷲の章（わしのしるし）　○獨逸　○ゲルマニア女神　○像（かたち）　○佛蘭西
○共和國の女神の像　○描けり　○一國主權者（一國をしはいする人）　○肖像（かたち、すがた）　○寫せる
○英吉利　○伊太利　○西班牙　○アメリカ合衆國　○先年（さきのとし）　○有栖川宮熾仁
親王　○北白川宮能久親王（伏見宮邦家親王の御子）　○殿下　○紀念（かたみ）　○發行　○變ると　○時
の便宜に應じ（そのときのつがふによく）　○時々（とき〳〵）　○改正（あらためる）　○施行以來（きそくをだされてよりのち）　○數
回（たび〳〵）　○好事（ものずき）　○各種（いろ〳〵）　○古切手　○蒐集（あつめる）　○商ふ　○稀なる　○數

百金（二三百圓）　○値す　○褒むべき事　○一通り　○諸強國（國富み兵強き國々）　○必要の事（たいせつ）

二三　甲板上の君が代

出稼　○横濱　○出帆（ふなで）　○搭せり（のりこめり）　○已に　○見渡す限り（みえるところ）　○渺茫
みる〳〵　○故郷（ふるさと）　○見慣れし　○青田　○麥畠　○唱はず（さえづらぬ）　○夕暮　○鴉
○はてなき青空（かぎりなきそら）　○板子一枚下は地獄（船底の板一枚をはがして落ちれば地獄に落ちゆくとのいひなり）　○諺
○物恐ろし　○今頃　○打寄（あつまり）　○噂し　○畠打ち　○茶飲時　○故郷（ふるさと）　○有
様　○あり〳〵（はっきり）　○悲しさいふばかりなし　○過去（すぎさりたること）　○樂しかりし
○前途（さき〳〵）　○心配　○涙　○歩み　○獨り　○物思に沈み（しんぱいして）　○一隅（すみのはうに）
○君が代（天子の治めたまふ御代）　○千代（いつまでも）　○八千代（すゑながきこと）　○万里の孤客（とほくはなれてをるひと）

○さながら（ちやうど）○電氣　○余れ（わが）○青年（わかもの）○米國（アメリカ）○懷鄕の念（こきやうをなつかしむおもふ）○堪へかね（こらへきれず）○譬へんに物なく　○終日（一日）○懇ろ（しんせつ）○語り合ひ（はなしあひ）○希望（のぞみ）○喜び勇み　○目的地（みあてのところ）

三三　重盛の諫言

落つる涙　○おし拭ひ（ふき）○最後（しにぎは）○申し狀（まをしたて）○暫く　○御心を靜め　○具に　○聞しめされ　○四恩　○天地の恩　○國王の恩　○父母の恩　○衆生の恩　○人倫（人の道もるみち）○禽獸（とりけもの）○朝恩（てうていのごおん）○桓武天皇（第五十代の天皇）○後胤（しそん）○人臣（朝廷のけらい）○微にして（かすかにしてさかえず）○顯れず（しれわたらぬ）○前將軍（平將軍貞盛）○國守（國の領主）○先祖　○歷代（いぜんぜんだい）○拜任の例（さづけられたことのない）○太政大臣（左右大臣の上にありて最上の官なり適當の人なければ此官を欠ぐ）○高

職（たかい役）○降り給ひ　○暗愚無才（ばかで才も何にもないばんくんのこと）○内大臣（古は左右大臣よりも上の官なりしが後にはその下なる）○六十餘州（日本全國）○田園（でんち）○一門一族（一家一族）○所領（りやうぶん）○家門代々（いへだいだいの）○勳功（てがら）○面々（めいめいの）○恩賞（はうび）○稀代過分（世にまれなる程の身分にこえたること）○朝家の安からず（朝廷の心安からず思ふも）おぼしめす　○理（もつとも）○運の盡きざる（こちらの運はいまだつきざる故に）○事既に顯れ（君の御企があらはれ）○大納言（大臣につぐ大政官にて天皇に奏上し外に宣する役成親をさす）○召し捕らる　○讒者（清盛の方に朝廷の御企をもらしたるもの）○罪の當る處（相當の罰）○處じ（ばつし）○彌（ますます）○奉公の誠（君に仕ふるまごころ）○撫育（あはれみ愛育すること）○神明佛陀（かみやほとけ）○感應（かみほとけに通じてこたへること）○直させ（[illegible]）○濫りに（よろしくゆゑなく）○法皇　○傾け奉らん（おしこめまうさん）○かへすべくにも（いくへにも）○然るべからず（よろしくない）○家命を以て王命を辭せず、王事を以て家事を辭す（自分一家のことにて君の命令に背くことは出來ぬ、君王の事なれば）

先づそれな先にも自分一家の事などはそれが爲には止むべきなり　○正義（正しき道）○非道（不正の道）○いかでか（なにさして）○就かざらん（よらぬこさがあらうか、勿論）○不肖（己が身をけんそんしていふ語）○身に代らんど（重盛の身に代はって忠義をつくさんさ）○侍○此輩（これらのものども）○率ゐて（つれて）○院中（法皇の御殿）○參り籠らん（まゐりてたてこもる）○仔細なし　○保元の亂（後白河天皇の御代の亂）○下野守義朝（源爲義の長子、保元の亂に清盛さ共に崇徳上皇の軍を破る）○勅命（天皇の命令）○六條判官（源爲義のこさ、保元の亂に崇徳上皇方さなりたり）○惡逆無道（人間の道にそむくこさ）○口惜しき事哉（ざんねんなこさである）わい　○御覽せられ　○あさましくも（おどろき、あきれるほど）○忠ならんと欲すれば孝ならず（君に忠義をつくさんさ思へば親に對して孝行をなす能はず）○進退茲に谷れり（如何さもすることさ能はず、いたばさみさなるこさ）○御承引（ききさどける）○院參あらん（法皇の御所へたしよする）○首を刎ねられ（くびをきりさす）○所詮（つまる所）○御供　○罰　○遁れ難し　○惡逆の咎報いなん（院中を守れば父さ戰はねばならぬ故惡逆さがを受けん）○末にのぞみぬ（運がつきかけてたる）○思ひ立つ事（思ひさごまりでやめる）○亂れん此世（亂世）○直衣（官服の名）○袖を絞り（涙を流す形容）○諫め　○袂を絞らぬはなりか（皆泣きたり）

二四　最も偉大なる豪傑（一）

○宿題（己れの家に於てなすべき問題）○豪傑（智勇一般衆人に勝れたる人）○眞に（まことに）○所以（わけがら）○例し（ためし）○お擧げなさい（いふてごらん）○友達　○課題（だいもん）○調べる　○參考（考へ合すこさ）○丁度（たりよく）○鈴が鳴つた　○課業（授業）○僕等（わたくしたち）○妙な（きめう、へんな）○笑ひ顏　○意味（わけ）○急いで　○時間に後れる　○ポケット（かくし）○叩いて　○鉛筆　○理あり（だうりのある語なり）○袋　○中味（なかにはいつてゐるもの）○選んで

二五　最も偉大なる豪傑（二）

尋ねて　○技倆（うでまへ）　○あらゆる敵（多くのてき）　○成程尤もだ（一理あり）　○資格　○標本（てほん）
○豐臣秀吉（尾張中村の人卑しき身よりおこりて後天下を定む）　○併し　○具へて欲しい（もってゐてもらひたい）　○缺けて　○倉
木　○定義（せつめい）　○御覽　○強ち（かならずしもしひて）　○寛仁大度（きも大きくしてなさけ深きこと）　○過を恕し（ゆる）
す　○堅固（かたく）　○社會同胞（よのなかの兄弟たるもの即ち多くの人々）　○中江藤樹先生（近江の人、王陽明の學を學ぜし學者にして、その德に
かんじて世人近江聖人と仰ぐ）　○大層面白い　○人物（にんげん）　○處で（それでは）　○源頼朝（義朝の第三子、後平氏
をほろぼして幕府を鎌倉に開く）　○亡して　○仇を報い（かたきをとり）　○驕る平家（おごり高ぶる平氏）　○暴政（らんばうなるまつりごと）
○救ひ出し　○利己心（人はかまはず自分ばかりを思ひはかる心）　○奔走（かけはしりする）　○眞正（ほんとう）　○説（せつめい）　○至
極（しごくもつとも）　○兵を擧げた（いくさをおこした）　○動機（心を動かす原因）　○國家生民（國中の人民）　○虐政を除く
（道にもとりたるまつりごとをとりのける）　○志を得て（わが思ふとほりにして）　○博愛（ひろく他人をあいす）　○高尚（りつぱ）　○理想（一層よき

ことを心中にもちてのぞむこと）　○豐太閤（とよとみひでよし）　○間違　○德川家康（德川廣忠の第一子にして德川十五代のもとを立てし人なり）　○智（ちゑ）
○勇き（ゆうき）　○慈悲深く（なさけぶかく）　○天下（國内）　○太平に治め（しづかにをさめ）　○安穩幸福（やすらかにしあはせ
多く）　○無事昌平の代（何事もおこらずおだやかにいよ〳〵榮ゆる時代）　○賛成　○意見（かんがへ）　○一生懸命（ねつしんに）
○古代（いにしへの）　○滿足（十分たること）　○孔子（支那の周の代の人、名は丘字は仲尼、魯の國に生る東洋の聖人、大學者なり魯の國政をとりしが後辭して諸國をめ
ぐり仕へんとしたれど、終に容れられずして死す）　○辨へ（あきらかにし）　○億兆の民（多くの萬民）　○導かれ（ひきよせる）　○亂世（みだれたる世）
○弟子（教を受けたる人、門弟）　○書を著し（本をかきて）　○百世（後の世々）　○優等（すぐれたる）　○答案（こたへ）　○社
會人類（世の中の人々）　○幸福（しあはせ）　○増進（ふやす）　○立派　○困難（なんぎ）　○並大體（ふつうひととほり）　○就
中（なかでも）　○我儘に克つ（きまゝをやめる）　○己に克つは仁の本（自分の心にうちかつことは仁のはじめ）　○或場合（とき
ては）　○我命を棄て　○殺身成仁（己れの身をすてても仁を重じてこれをなす）　○獻身犧牲（己の身をさしだして國家社會の爲につくすこと）

○己に克つ者は眞の豪傑なり（己れの心をたさへこれにうちかつて正道を守るものはまことの豪傑なり）○格言（道に合ひたる正しき言）○覺えて戴きたい○私慾（自分のよく）

二六　實用の人

英雄（才智萬人に勝れたる者）○聖人（智識すぐれて神の如き人）○賢人（聖人につぐ人）○要せず（いらぬ）○無暗（あてどもなく）○實用の材なり（じつちの仕事をすることの出來るはたらき）○各方面（上下左右すべてのはうめん）○謂（こと）○一通り（なみたいてい）○見識（物事をよく知りたること）○事務の才に長じ（しごとをよくきりひらくさいのうにすぐれる）○物のあはれ知れども（なさけ心はあるとも）○情にもろからず（つまらぬことになさけをおこさず）○利害にさとければ（爲になることゝならぬ事を早く見る）○不義非道（道理にそむくこと）○意志（こゝろざし）○情實に拘制せられず（なさけ心にひきとめられず）○果斷（おもひきりよく）○敏活（すばしこく）○節儉（けんやく）○自から持し（じぶんからわきまへ）○責任（つとめ）○熱心○倦まず（あきず）○迷惑（いやがること）○事情の許す限り（ことがらのゆるすだけ）○他に（の人）○深切をつくし（心のそこから事をなすること、ねんごろ）○ひとかど（一人まへ）○所謂（世にいふでなる）○哲人（智識ある人）○固より○不可（よくないこと）○似而非豪傑（みせばかりのがうけつ）○威張って○着實に（心からまじめに）○徒に（たゞ）○虚名（いつはりのめいよ）○博せん（身にとらん）○大功は細瑾を顧ず（大なる手柄をなしたもの共は少しぐらゐの不眞の行は之をとがめず）○口實（いひぐさ）○不倫の行（不道理なるおこなひ）○己を欺き（自分の眞心をあざむき）○得々（とくいになる）○余輩（私）○いたく（はなはだ）○擯斥（きらふ）○生物識（ものしりぶること）○實行の力（じつちにおこなひ得る力）○超然（世の中からぬきんでゝ）○裨益（ためをはかる）○放言（でまかせをいひて）○害毒を流す（社會に害をながす）○與せざる所（いつしよにならぬ）○事を解せざるの徒（まだわけのわからぬ者）○動もすれば（どうかすると）○凡人的教育（普通の人間を作る教育のしかた）○豪傑的教育（がうけつを仕上げるやうに教育すること）○施す（さづける）○もと生るゝもの（生れながらに定まるもの）○吉田松蔭（長州）

萩の人、古今の書に通じ最も兵法に長じ、當時の國狀を慨し幕府のきく所となり斬に處せらる
○師（先生）　○一藩少數の俊豪（ひとつの藩中のわづかのがうけつ）
○久坂玄瑞（萩の人、萩侯の侍醫にして吉田の門人、勤王の大義をいだけり）　○高杉晋作（山口の藩士、松陰の門に遊び又海外に航し實形勢を見て歸朝す早くより尊王攘夷の大義をいだけり）
○偉人（えらいひと）　○目標（めじるし）　○實用の材（じつようのやくにたつもの）　○超脫（ぬけいづる）　○能力次第（はたらきのありしだい）
○凡人的教育（なみ〳〵のひとを作るをしへ）　○凡化（なみ〳〵のものとなる）　○歪む　○化成（そだてなる）　○天賦（うまれつき）
○凡流以上（なみ〳〵のものゝうへ）　○家庭教育（うちにてするをしへ）　○社會（よのなか）　○影響（さしひゞき）
○幾分　○發揮する（あらはしいだす）

二七　妹への手紙

○皆々樣　○御無事の由（なにごともなくおくらしなさるとのこと）　○芽出度（よろこばし）　○小生（わたくし）　○達者（ぢやうぶ）
○勉強　○御安心被下候樣（おこゝろやすくなさるゝやう）　○御兩親樣（ふたおや）　○御傳へ　○小包（小包）

[illegible]○縫はれし　○袷　○御贈被下　○落手（うけとる）　○裁縫（はりしごと）　○段々　○御上手
○御卒業（まなびをへたること）　○御目出度事　○寫生（いきうつし、ほんものをみてかく）　○御城の景色　○春休
○歸省（故郷にかへること）　○持參（もちまゐる）　○差上度　○褒められ　○大橋の繪（おほはしをかきたるゑ）　○上
出來の積（うまくできたること、かんがへ）　○濟み　○御目にかゝり　○早々（手紙のをはりにつける語、いそがしくして文意のわかるやうにかけざりしを示す）

二八　家庭の樂

○人生（人間の一生のこと）　○最大（一ばん大なる）　○幸福（しあはせ）　○大廈高樓（大なるたてもの）　○身邊（みのまはり）　○千萬の黄金（たくさんのかね）　○積む（つみかさなる）　○家內和合（家のうちのものがなかよく）　○面白き　○膝突き合はす（ひざとひざとをつきあはす）　○狹き家　○親睦和合（したしみ、なかむつましく）　○春風の中に坐す（春ふく風はさむくもあつくもなく實

（にぎだやかなり）

卷二

○諸子（みなさん）○慈愛（いつくしみ）○通ふ身 ○困苦（くるしみ）○他日（いつか）○社會に立ち（よのなかに出て）○職業に從事す（しごとにつかはる）○方り（ついして）○幾多（たくさん）○困難辛苦（なんぎくるしみ）○鬪はざるべからず（あらそはればならぬ）○終日の勞苦（一日中のほねをり）○慰め ○倍舊（もとの二倍もの）○奮發心（心をふるひおこすこと）○神佛（かみほとけ）○國を治むる本は家を齊ふるに在り（人々の家庭がよく和合してととなはれば因って家庭の大なる國家も平和に治まるやうになる）○ルーテル（獨逸人にして宗教改革者なり、新教の今日あるは皆此人の力に依るものなり）○家庭は國家の基礎なり（各人の家庭は國家の小なるものにして實にそのどだいとなるものである）○いかでか（どうしてか）○隆昌を望まんや（さかんなることをのぞむことができやうかできない）

中等教科明治讀本（訂正）卷二字解終

中等教科明治讀本訂正字解

卷三

一　扇の的

興市（那須宗高といふ宗高は下野國那須の人）○弓手（左の手をいふ、左手は弓をもつよりいふ）○御座の御船（天子の座乘したまふ船）○女官 ○屋形屋形 ○御簾（りつばなすだれ）○几帳（丁字形の架に絹をかけたるものにて其絹を帷（かたびら）といふ）○さゝめけり（さわくこ音がする）○馬手（右手をいふ、馬に乘るとき右手にて手綱をとる故なり）○楯甲 ○鳴りを靜め ○平家 ○一門 ○源氏 ○勢（軍勢）○義經（義朝の子）○阪東（關東）○弓取（武士）○今日を晴（けふはればれしく）○眺め ○遠淺（海上遠くまで淺きこと）○一段（六十間を一段といふ）○沛艾（荒馬にてをどり上るをいふ）○潮に狂へる折 ○夕西風 ○的 ○眼を閉ぢ ○氣を凝らし ○無南八幡（南無はり祈の語八幡神は源家の守護神なり）○大小神祇（多くの神々）○下野那須

の明神　○弓矢の冥加（武運といふ義）　○鎮め　○武運　○果報（しあはせ）　○祈念　○座（物のさだまるべきところ）　○鏑矢（やじりの形蕪（かぶら）に似たればいふ　時のさきに用ふ）　○十二束（一束ばかた手ひとにぎりをいふ）　○弓に番ひ　○あな、　○天津日影の御形（天の日の形なり、日の丸の扇をいふ）　○要の程（扇のかなめのところ）　○兵（矢の風をきつてとぶ音）　○放つ　○矢心地　○箙（えびら矢をさして負ふ器）　○鞍の前輪（鞍には、乗人の股に當る所の前後にへの字に高き瓏（わひ）あり、前のは前輪、後のは後輪といふ）　○叩き　○喝采　○元暦元年（安徳天皇の末年）　○彌生（三月のこと）　○壇の浦（長門國赤間關市字壇の浦の海面をいふ）　○譽

二　頭上の林檎（一）

アルトヤーフ（ウリー洲の首府）　○郊外　○管領（しはい役）　○ゲッスレル（墺國皇帝の寵臣）　○兜　○竿に懸け　○番兵　○繁華（にぎやか）　○人影を見ぬばかり（人一人もをらぬ）　○テル（瑞西獨立戰爭のとき有名なる勇士）　○一子　○懸念なく（なにごころなく）　○物語　○槍を突きだし　○大喝　○獵師　○何卒　○命

令に叛く　○不敵もの（大膽もの）　○牢舎（らうや）　○近所の者共　○大勢　○駈り來り　○角笛（獵師の用ふる笛、多く牛角にて造る）　○遊獵の歸　○覺しく（たれもはれて）　○長槍　○夥多の家來（たくさんのけらい）　○仔細を申せ（このわけがらをまうしたてよ）　○叱りつけ　○番兵　○恐る〳〵（こは〴〵）　○次第（わけがら）　○その方へ（たま）　○身共（拙者）　○存意（わけがら）　○何卒　○お赦し　○粗忽　○弓矢の名人　○頑是なく　○本當　○林檎　○射て　○悴　○射中て　○見事　○命中（あたる）　○罪を赦し　○一同〳〵（みな〳〵）　○はつと（俄に胸さはぐさまにいふ）　○ひれふし（へいふくする）　○その儀（そのこと）　○お許　○貰　○方樣　○お子達　○歎いた　○色をも動かさず　○日頃（ふだんより）　○奇行（ふしぎなおこなひ）　○奇人　○相應の役を命ず　○言ひ放つ（いひきる）　○從者（けらい）　○免を請うた　○小聲（こそう）　○距離（へだたり）　○せき立て（せきこみてうながす）　○舅　○ブユールスト（ウリーの人にて舅の女ヘドウヰツヒは）

（テルの妻なればテルの岳父にあたる）○爺奴　○地所家屋　○御命令　○頭を地にすりつけ　○歎願（なげきねがふ）　○祖父様　○お詫　○名人　○何の（どうして）　○傷をつける　○いぢらしく（ふびんにおもふ）　○鬼の様な　○心を動かしさうなもの（こゝろをとりなほしさうなことである）　○あざ笑ひ（あざけりわらふ）　○樹に縛り　○下知（さしづ）　○嫌だ　○小羊の様に（すなほなることゝ西洋のたとへ）　○無理に　○曲つたり　○眼隠　○怖く　○腕を見せて（うでまへを見せて）　○鼻をあかせ（だしぬいて）　○頭に載せ　○待つて

三　頭上の林檎（二）

○市民（まちの人）　○歯がみ（はぎしりなして）　○殘忍非道（なさけなきふるまひ）　○前後左右　○槍　○鉾先　○林の如く　○弓箭　○大太刀（兩刃の細長きはもの）　○横たへ　○すき間なく　○守護（まもりて）　○指一本　○命　○嵐の前の燈火（すぐにきえることにいふ）　○危い　○促す　○せん方なく（しかたなく）　○をのゝく（ふるへる）　○兩手　○暫く　○涙を流し　○この身（わたくし）　○存分（おもふまゝ）　○これしきの事（これくらゐのこと）　○雷電暴風（かみなりあらし）　○たゞ中（まんなか）　○漕いだ覺　○身を震はし　○眼するごく　○睨んだ　○乾度　○覺悟し　○無言　○箙（矢をいれる器）　○二筋（二本）　○拔き取つて　○弦に番つた　○應じ（こたへ）　○觀念の眼をつぶり（かくごのために目をつむり）　○切つて放せば　○過たず　○頭上　○感歎の聲（感歎して賞嘆するこえ）　○拾ひ取り　○當つた　○夢中　○身を沈め　○駈けて來る　○ひしと（はげしく）　○抱きしめ　○男泣　○流石　○茫然（ほんやり）　○手持なく　○苦りきつて　○促し　○暫く待て　○二の矢（二本の矢）　○認め　○譯ちや　○弓矢執るもの（武士）　○習慣（ならはし）　○さ様な詐（そんなうそをいつて）　○濟む　○一命（いのち）　○助けて遣はす　○包まず（かくさず）　○有體（ありのまゝ）　○白狀　○萬一（もしも）　○仕損じ（しくじり）

て　〇恐ながら　〇決心　〇うなづき（がでんして）　〇さもあらん（さようであらう）　〇不敵の心　〇懐く（もつてをる）　〇その儘　〇彼奴　〇牢舎（らうや）　〇嚴に　〇令を下し　〇何と詫びても（どうあやまりても）　〇聴かばこそ（きゝいれませぬ）　〇固く縛し　〇家來　〇湖上遙に（とほくみづうみの上に）　〇漕ぎ出し

四　熊本守城概記

今般（このたび）　〇鹿兒島縣賊徒　〇暴擧の勢（むほんのいきほひ）　〇當臺（熊本鎭臺）　〇防戰の儀（ふせぎたゝかふこと）　〇薩界の險に要し（薩摩の國界のけはしきとこにむかひ）　〇半途に迎ふるの路（とちうにむかふるはかりごと）　〇當城（熊本城）　〇去冬（きよねんの冬）　〇不意の襲撃　〇兵卒の氣力（へいたいのこゝろがまへ）　〇舊時に復せず（もとのとほりにならず）　〇諸士官　〇專ら　〇士氣（さむらゐの元氣）　〇鼓舞（ひきたてる）　〇注意　〇招魂祭　〇競馬　〇烟火（はなび）　〇角力　〇勵ます　〇勉む　〇素より　〇强兵の名（つよいひやうばん）　〇怒氣の發する所　〇容易　〇當り難し　〇加之（しかのみならずそのうへ）　〇縣下（熊本縣）　〇士族　〇消息を通ず　〇市街（まち）　〇保護（まもる）　〇脚下（あしもと）　〇患　〇決死　〇兇徒（わるもの）　〇平原曠野（ひろきのはら）　〇勝算固より期し難し（とても勝てる見込はない）　〇一旦　〇沮喪（おとろへる）　〇賊勢を長ず（ぞくぐんのいきほひをます）　〇陸軍卿（山縣有朋）　〇已に　〇守城（城をもること）　〇堅守（ちようぶにまもる）　〇據る所（たてこもるばしよ）　〇所以（わけ）　〇曩に（まへに）　〇攻守（せむるも、まもるも）　〇適宜にすべき（かつてにすること）　〇蓋し　〇存亡（おこるもほろぶるも）　〇西國一般（九州ぜんたい）　〇人心に關す（ひとのこゝろにかゝはる）　〇我輩　〇所見（かんがへ）　〇橋梁を撤し（はしをとりはづし）　〇砦柵を結び（とりでをつくり）　〇通路を塞ぎ（みちをふさぎ）　〇要地（かんじんなところ）　〇地雷（火藥を地下にうづめたるもの）　〇埋め　〇障碍（じやまになる）　〇家屋を毀ち（いへをこはし）　〇展望（とほくまでみまはすこと）　〇準備

（ようい）○成《ナ》るに垂《ナン》んとし（できあがるところに）○火《ヒ》を失《シツ》し（くわじをおこし）○糧食《リヤウシヨク》（ひやうらう）○灰燼《クワイジン》に歸《キ》し（はひとなりてしまひ）○彈藥諸器《ダンヤクシヨキ》○止《ヤ》むを得《エ》ず（よんどころなく）○民家《ミンカ》（人民の家）○徵收《チヨウシウ》（とりたてる）○數旬《スウジユン》を支《サヽ》ふ（二三十日をたもつ）○輕侮《ケイブ》（みさげる）○一朝《イツテウ》にして（いちどに）○拔《ヌ》くべし（ぬきとることができる）○力《チカラ》を極《キハ》め（せい一ぱい）○期《キ》する所《トコロ》の略《リヤク》（さだめたるさくりやく）○步砲工《ホハウコウ》（步兵、砲兵、工兵、）○配置《ハイチ》（てくばりなし）○防戰《バウセン》（ふせぎたゝかふ）○退《シリゾ》き（ひきのき）○長圍《チヤウヰ》の策《サク》（ひやうらうぜめ）○孤立《コリツ》○外情《グワイジヤウ》（そとのやうす）○探知《タンチ》（さぐりしる）○由《ヨシ》なし（てだてがない）○小倉營所《コクラエイシヨ》（營所は兵營なり、隊長は今の乃木希典氏なり）○心算《シンサン》（こゝろがまへ）○障碍《シヤウガイ》（さわり）○寡少《クワセウ》（すくなくして）○方略《ハウリヤク》（てだて）○固《カタ》うす（十分にする）○官兵《クワンペイ》（官軍）○黨《タウ》する者《モノ》（くみするもの）○我隙《ワガスキ》を窺《ウカガ》ふ○虞《オソレ》○來援《ライエン》（きたりたすける）○間隔《カンカク》（へだゝり）○後路《コウロ》○悔《クイ》（こうかい）○情況《ジヤウキヤウ》（やうす）○人《ヒト》を遣《ヤ》る○數度《スウド》（二三たび）○功《コウ》を遂《ト》ぐる能《アタ》はず○典獄《テンゴク》（らうやの長官）○宍戸正輝《シヽドマサテル》○目的《モクテキ》○彼我兩情《ヒガリヤウジヤウ》（かれとこれとりやうはうのやうす）○策《サク》を決《ケツ》し（はかりごとをきめる）○山鹿《ヤマガ》（肥後國鹿本郡の中央にあり熊本より肥前嫁松に通ずる大路）○木《コ》の葉《ハ》（同國玉名郡にあり田原坂を距ること十八町餘なり）○敗賊《ハイゾク》○側面《ソクメン》○尾《ビ》して（あとをつけて）○川尻《カハジリ》（玉名郡北端綠川の南岸にある一都市なり）○八代《ヤツシロ》（八代郡球磨川の河口にあり）○占《シ》め○漸次《ゼンジ》（しだいに）○進擊《シンゲキ》（すゝみうつ）○險《ケン》に據《ヨ》り（けはしきところにたてこもり）○拔《ヌ》き難《ガタ》き（せめとりにくい）○糧食《リヤウシヨク》（ひやうらう）○百方《ヒヤクハウ》（いろ〳〵）○收聚《シウシウ》の策《サク》（あつめとるはかりごと）○儘《ツ》くる期《キ》（なくならんとするとき）○周圍《シウヰ》（まはり）○守線《シユセン》○短縮《タンシユク》（ちゞめ）○若干《ジヤクカン》（なにほどか）○植木口《ウヱキグチ》○圍《カコミ》を突《ツ》かん○適《タマ〳〵》（ちやうど）○川尻口《カハジリグチ》（他にかよふところを口といふ）○砲聲《ハウセイ》（おほつゝのおと）○應援《オウヱン》（たすける）○平夷《ヘイイ》（たひらか）○合《ガツ》す（あはせる）○前策《ゼンサク》を轉《テン》じ（まへのはかりごとをとりかへる）○拂曉《フツゲウ》（早朝）○突貫《トツクワン》○戰略《センリヤク》の大概《タイガイ》（いくさのてだてのあらまし）○書《シヨ》して（かきつけて）○總督殿下《ソウトクデンカ》（先の有栖川熾仁（たるひと）親王殿下を申す）○獻《ケン》ず（さしあげる）○谷干城《タニカンジヤウ》（高知の舊藩士にして今は貴族院議員なり）

五　馬《ウマ》

進軍の喇叭　○響けば　○天を動かす（てんをひゞきうごかす）　○吶喊の聲（敵陣に突撃するとき大聲を發するをいふ）　○地に轟く　○銃砲の音　○まつしぐらに（わきめもふらずに）　○鐵蹄（馬蹄）　○空を蹴る　○鞍上（くらのうへ）　○勇士　○戰場（いくさば）　○無二の親友（ふたつとなきしたしきとも）　○屍を馬革につゝむ（戰爭にて討死すること）　○武人の願（いくさにんののぞみ）　○高綱（佐々木四郎）　○景季（梶原源太）　○宇治川の先陣（元暦元年高綱、景季互に先登を爭ひたり）　○九郎義經　○一の谷の奇捷（鵯越（ひよどりごえ）のさかおとし）　○健脚の力（あしのぢやうぶなるおかげ）　○鞭聲粛々夜河を渡り（賴山陽の詠にして川中島の戰に謙信が單騎にして信玄の本陣にきりいりたるをうたひたるなり）　○單騎（一騎）　○斫り入り　○謙信（上杉輝虎）　○膽略（剛膽にして智略あること）　○目にあまる（たくさん）　○かけ散らし　○七生の語（正成戰死せんとする時弟正季と共に七度生れ來りて賊を滅さんといへり）　○正成（楠氏）　○忠誠（まごゝろ）　○名譽（ほまれ）　○發揮（あらはす）　○ケーザル（ローマの英傑）　○ハンニバル（カルタゴの名將）　○ルビコン（中部伊太利の河にてアドリア海に注ぐ）　○アルプス（歐洲最大の山脈なり）　○成吉汗（元の太祖）　○奈破翁（佛國皇帝）　○亞細亞　○歐羅巴　○蹂躪（ふみつける）　○古來　○勇將（つよき大將）　○戰功の一半（てがらのなかば）　○馬に頒たざるべからず（うまにわけてやらねばならぬ）　○耕し　○馬の背　○重きを遠きにいたす（おもきにもつをとほきばしよにはこぶ）　○金鞍（黄金を以て飾りしくら）　○公子（身分たかき若もの）　○輿車の代（のりもののかはり）　○競爭（けいばをさせる）　○娛樂の具（たのしみのだうぐ）　○忠實（まめやかにつかふる）　○人に盡くす（人のために骨折る）　○拘らず　○報ゆる（あつかふ）　○其酷なる（はなはだひどい）　○長圍數月（二三ヶ月のあひだ城をかこまれる）　○已に盡くる（もはやなくならんとする）　○屠り（ころし）　○老いて　○首は低れ　○脚は弱き　○鞭撻至らざるなく（むやみにむちにてうつこと）　○皮膚爲に爛るゝに至る（かはがうたるゝためにたゞれるやうになる）　○剝がれ　○骨を蹄　○踏まれ　○器具（だうぐ）　○人類の無情（にんげんのなさけをしらぬこと）　○訴へざるや（まうしたてぬか）

六　三尺の庭

障子　○明け放す　○煉瓦の塀　○醫學博士（博士は文部大臣より專門學者に授ける學位なり）　○某君（人の名をいはぬ）　○邸宅（やしき）　○高塀　○草庵（いほり、小さなる家）　○柘榴（入梅のころ紅花をひらく、實は食すべく根は染料とす）　○新鮮（あたらしくきれい）　○黄色　○惜しげも無く　○隨分　○亂暴な　○蘖（ひこばえ）　○根元　○其儘　○伐らす　○隱して呉れる　○右傍（みぎのわき）　○不景氣な（つまらない）　○枯れて　○枯葉　○今度　○梯子賣　○木鋏（木をはさみきるもの）　○除ける（さりのける）　○山茶花（つばきの種類、實より油をとる）　○爰處　○二輪（輪は花の大き）　○塵（ほこり）　○親指　○叢生（むらがりはえる）　○黒竹　○雨戸　○手水鉢　○倒れ　○座敷　○掃除　○箒　○眞直　○割り込むやう　○廣々　○髯を剃つて　○南天（夏小く白き花さく、實は綠色なれども熱すれば赤くなる）　○癖に　○脊の低い樣子　○弓屋（ゆみをつくりて賣る家）

七　出發

朝飯　○濟し　○身支度　○兩親（ふたおや）　○兄弟　○姉妹　○甥姪　○打連れ　○告別（いとまごひ）　○暇を告げ　○擁せられ（だくられ）　○新橋停車場（東京にあり）　○荷物　○但し　○見送　○諸君（ひさ〳〵）　○中等室（中等待合室）　○溢れ（あふれるほどの人があつまる）　○其も其筈　○外國語學校（東京神田區一つ橋にあり）　○山口教授（名を弘一といふ）　○高田商會（高田愼藏の立てたる會社）　○志保井君　○プラットホーム（汽車に昇降する所）　○三方面　○黒山を築いて　○胸　○一種の感にうたれ　○視覺（見るちから）　○祿に（ろく〳〵に）　○挨拶　○波止場（なみよけば）　○棧橋（岸より水上へつき出したする木造の橋）　○生憎　○譯に　○矢張　○小蒸氣　○丁度　○櫻井鷗村君　○祝電（いはひのでんぱう）　○初航海（初めて船にのること）　○首途　○初航海（本の名）　○著者（あらはしたる人）　○因緣（ゆかり）　○獨逸ロイド會社（現時世界第一の汽船會社なり政府の保護を受けて東洋の航路をも開けり）　○呎　○噸數　○大丈夫　○舌を捲きながら（おどろきながら）　○出帆（ふなで）

○折角《セツカク》　○別杯《ベツパイ》を擧《ア》げる間《マ》もなく（わかれのさかもりをするひまもなく）　○甲板《デツキ》（大なる船の上部の床、平かにして木板はりつめたるところ）

○手《テ》を握《ニギ》つて　○袂《タモト》を別《ワカ》つた　○手巾《ハンカチーフ》　○おさらばや霧《キリ》に隔《ヘダ》たる帽《バウ》の數《カズ》（さらば別のことば、多くの見送人がうちふる帽子も船の進むに從ひてかすみて見えなくなるとの意）　○名殘《ナゴリ》

八　外國航路《クワイコクカウロ》

○外國交通《グワイコクカウツウ》（外國にゆききすることさ）　○從來《ジユウライ》（これまで）　○船舶《センパク》（ふね）　○便《ベン》を藉《カ》り（たよりによる）　○輓近《バンキン》（ちかごろ）　○國運《コクウン》の隆興《リユウコウ》（くにのさかんにおこる）　○航海《カウカイ》の業《ゲフ》　○發達《ハツタツ》（すゝみ）　○本色《ホンシヨク》（ほんね）　○發揮《ハツキ》（あらはす）　○現今《ゲンコン》（たゞいま）　○營《イトナ》む（行ふ）　○日本郵船會社《ニホンイウセンクワイシヤ》（會社は麹町區一丁目一番地にあり總資本金一千一百萬圓なり）　○東洋汽船會社《トウヤウキセンクワイシヤ》（日本橋區北新堀町十八番地にあり資本金六百五十萬圓にして明治三十一年より開業せり）　○前者《ゼンシヤ》（日本郵船會社をさす）　○朝鮮《テウセン》　○支那《シナ》　○印度《インド》　○濠洲《ガウシウ》　○北米《ホクベイ》（北アメリカ）　○歐羅巴《ヨウロツパ》　○後者《コウシヤ》（東洋汽船會社をさす）　○南米《ナンベイ》（南アメリカ）　○神戶《カウベ》　○門司《モジ》　○寄港《キカウ》し（たちよる）

○上海《シヤンハイ》（支那南部にありて珠河の河口に當る一小島なり）　○香港《ホンコン》（江蘇省にあり黄浦江により揚子江に通ず）　○赤道直下《セキドウチヨクカ》　○新嘉坡《シンガポール》（マレイ半島の南端にある一島にして英國の港なり）　○コロンボ（セイロン島の西岸にありて人口十二萬の大港なり）　○印度洋《インドヤウ》　○横切《ヨコギ》り　○アラビア海《カイ》（印度とアラビヤとの間にある廣大の灣なり）　○紅海《コウカイ》　○スエズ運河《ウンガ》（一八九九年佛人レセップ氏の開通せるものなり）　○地中海《チチユウカイ》　○マルセイユ港《カウ》（地中海リオン灣の東北にあり）　○英國倫敦《エイコクロンドン》　○白耳義《ベルギー》　○アントワープ（シエルト河の右岸にあり）　○終點《シユウテン》　○航程《カウテイ》（かうかいのみちのり）　○海里《カイリ》（十六町余にあたる）　○双螺旋大汽船《サウラセンダイキセン》（船の龍骨の兩端に各一個の暗車を有する船客）　○設備《セツビ》　○整《トヽノ》ひ　○客室《カクシツ》（客のへや）　○美麗《ビレイ》（きれい）　○運動場《ウンドウヂヤウ》　○各種娛樂《カクシユゴラク》（いろ〳〵のたのしみ）　○機關《キカン》を具《ソナ》ふ（からくりをそなへつける）　○孟買線《ボンベイセン》　○解纜《カイラン》（船を出す）　○孟買《ボンベイ》（英領印度の西岸にある港なり）　○棉花《メンクワ》（わた）　○積載《セキサイ》（つみこみ）　○チユチコリン（英領印度の海軍港にしてコモリン岬北東にあり）　○シヤトル（北米合衆國の西部ワシントン州にあり）　○發着《ハツチヤク》（出たり着いたり）　○ビクトリア（北米英領カナダにありバンクーバー島の首府なり）　○特定《トクテイ》（とくべつにさだめたる）　○マニラ（呂宋の首府なり）　○木曜島《モクヨウトウ》（濠洲

（ヨーク岬の近くにある錨地なり）○タウンスビル（同洲北部クインスランドの海港なり）○ブリスベン（同洲クインスランドの首府なり）○シドニー（同洲ニユー、サウスウエールスの港なり）○メルボルン（同洲ビクトリアの首府なり）○北清（北方支那）○浦鹽斯德（シベリヤの日本海岸ピーターー大帝灣に臨める露領の港なり）○大西洋航路 ○桑港（サンフランシスコを云ふ）○秘露國 ○カリアオ港（ペルーの主要地にして太平洋に臨む）○智利國 ○イキテ港（チリー國北部の港にして太平洋に面す）○歸途（かへりみち）○平時（ふだん）○大機關（おほいなるだうぐ）○戰時（いくさのとき）○運送船 ○武裝（いくさのしたくをして）○假裝巡洋艦 ○交戰（いくさ）○金州丸（日本郵船會社の所有船なり、明治三十七年四月廿五日我兵を載せて歸航の際新浦沖にて露艦に擊ち沈められたり）○常陸丸（同年六月十五日沖島附近にて露艦に逢ひ擊沈せらる）○慘事（むごきさま）○日本丸 ○香港丸 ○偉勳（大なるてがら）○諸子（みなさん）○記憶（おぼえなる）

丸船に殉したる船長

忌むべき（きらふべきこと）○放縱懶惰（きまゝにしてなまける）○姑息無氣力（一時のまにあはせにしていくぢなきこと）○責任（つとめ）○職務（やくめ）○忽に ○之に反し（これとかはりて）○職に忠なる（やくめによくつとめる）○殊に（わけても）○職に殉す（やくめのために死する）○神聖（りっぱ）○隊長（一隊の長）○部下（くみした）○犬死（むだじに）○全軍の大敗（ぜんたいがまけいくさなること）○醫者 ○癒ゆべき ○空しく ○死亡（しぬる）○神 ○佛 ○賴む ○乘組人 ○生死安危（しにいきと、あんしんするとしないと）○一呼吸（ひといき）○誤つて ○粗忽 ○帶び（ひきうけ）○引決（責をひくこと）○東海丸（日本郵船會社青森室蘭間の定期航海船なり噸數一一二一噸あり）○密雪（しげくふる雪）○空を掩う（そらをかくす）○咫尺を辨せず（一寸先もわからず）○プロクレス號（浦港斯德ブリンナー氏有にして八百七十八噸あり）○船體 ○損じ（きずつけられ）○沈沒（しづむ）○船員（乘組員）○乘客（船客）○ボート（短艇）○はかなく ○溺死（おぼれ死する）○久田佐助氏 ○却け ○從容として（ゆったりとして）○汽笛一 ○嗚呼壯な

るかな（まことにりつぱなことであるわい）○衝突（つきあたる）○負ひて（ひきうけ）○義勇公に奉ず（ちゆうぎにあつき心を以ておかみの爲めにつくす）○龜鑑（てほん）○眞の日本男子 ○特性（べつだんのうまれ）○類稀なる所（めづらしきこと）○舌を捲いて ○驚歎（おどろきなげく）○宜なるかな（もつともなことである）○大和魂（日本人固有の精神）○泯滅（ほろびる）

一〇　小原笠島だより

○一書拜啓（てがみをさしあげます）○萬事（いろ〳〵）○御配慮を蒙り（ごしんぱいをうけ）○奉レ謝候（おれいをまうします）○困難（なんぎ）○追手の風（順風）○平均（ならして）○八浬（一浬は我國の約十七町に當る）○當小笠原島（當は此の意、伊豆八丈島の南東、三八三哩にあり）○著後（つきてのち）○無風（かぜふかず）○出帆（ふなでする）○有利（利益ある）○實際 ○相違（ちがふ）○瘠地（やせたる土地）○山坂 ○望あること（みこみあること）○パインアップル（松つかさに似たる果實）○バナヽ（芭蕉科に屬する植物の果實）○珈琲 ○マニラタコの木（高さ三四丈に至り幹より七ケ以上の氣根を生ず）○風袋

○內地（本土）○見慣れざる ○正覺坊（大なるうみがめ）○申しふらし ○畢竟（つまり）○開墾（きりひらき）○水產の漁獵（水中にできるものをとること）○小規模（小さなるかまへ）○所謂（せけんにいふ）○出稼商人 ○漁夫（れふし）○母島 ○勝らざる ○推測（おしはかる）○父島（本島ともいふ）○非常（たいそう）○通商繁昌 ○薪水（まき、みづといふて、にたきすること）○碇泊（船をとめること）○當今（たゞいま）○當地（小笠原島をさす）○暖氣（あたゝかさ）○單衣 ○凉風（すゞかかぜ）○眞に（まことに）○爽快（こゝろもちのよきこと）○歸化人（日本に籍をうつしたる人）○沿岸（うみぎしに）○油桐（桐の一種にして實より油を搾る）○鬱々（こんもり）○暑を凌ぐ（あつさをしのぐ）○掌大（てのひらほどの大さ）○混合種（あひの子）○徒跣（すあし）○歩み ○カノー船（丸木舟）○文明人（學問のひらけたる人）○玉蜀黍 ○植る ○生計（くらし）○憐むべき生涯（きのどくなるくらし）○比すれば（くらぶれば）○金庫（特別のこしらへある櫃）○末にも（なかまにも）○怪しまる ○蓄積心（たくはへるこゝろ）

○許多《キョタ》（たくさん）　○貨幣《クワヘイ》（かね）　○埋藏《マイザウ》（しまひおく）　○天祐丸《テンイウマル》　○將に《マサ》（今ちやうど）　○定期船《テイキセン》　○駿河丸《スルガマル》　○島司《タウジ》（此島を支配する長官）　○小生《セウセイ》（自分）　○面會《メンクワイ》（あふこと）　○留守役《ルスヤク》　○非常の厚遇《ヒジヤウ　コウグウ》（たいそうのもてなし）　○強健《ギヤウケン》（ぢやうぶ）　○氣分《キブン》（きもち）　○愉快《ユクワイ》（おもしろく）　○御安心《ゴアンシン》　○匆々《サウ〳〵》（いそぎのこゝろ）　○頓首《トンシウ》（おじぎすること）（手紙のをはりに書くことば）

二　ジャバ旅行《リヨカウ》

○ウエルテフレーデン（バタヴイア市街の一區なり）　○サマラン（ジャバの城壁を有する港）　○早朝《サウテウ》（あさはやく）　○景色《ケイシヨク》　○綠樹繁茂《リヨクジユハンモ》（あを〳〵したる木がしげり）　○突出《トツシユツ》（つきだし）　○鐵路《テツロ》（鐵道）　○割合に《ワリアヒ》　○涼しく《スヾ》　○格別《カクベツ》（べつだん）　○快味《クワイミ》（おもしろく）　○嶮岨《ケンソ》（けはしき）　○狀態《ジヤウタイ》（ありさま）　○到る處に《イタ　トコロ》（いづこに行きても）　○珈琲園《コウヒーエン》（コヒー樹をうゑたる所）　○蔬菜園《ソサイエン》（野菜をうゑたる畑）　○午頃《ウマゴロ》（正午ごろ）　○車掌《シヤシヤウ》（汽車中のことをあつかふもの）　○賴み《タノ》　○辨當《ベンタウ》　○瀨戶物製《セトモノセイ》

○器《ウツハ》　○蓋物《フタモノ》　○ビステキ（牛肉を切りバタをつけて燒きたるもの）　○馬鈴薯《バレイシヨ》（じやがいも）　○胡瓜《キウリ》　○小刀《ナイフ》　○肉刺《ニクサシ》　○附屬《フゾク》（つきて）　○木製の框《モクセイ　ワク》　○提げ《ヒツサ》　○運び來り《ハコ　キタ》　○代價《ダイカ》　○酒手《サカテ》　○空器《カラウツハ》　○下車《ゲシヤ》　○晝食《チウジキ》　○麥酒《ビール》　○睡氣を催し《ネムケ　モヨホ》　○眠れる間《ネム　マ》　○線路《センロ》　○屈曲《クツキヨク》（まがり）　○遇ひ《ア》　○方向を變じ《ハウカウ　ヘン》（むきをかへる）　○熱帶地《ネツタイチ》　○寢たる顏《ネ　カホ》　○直射《チヨクシヤ》（まつすぐにいる）　○忽ちに《タチマ》（すぐに）　○夢を破られ《ユメ　ヤブ》（めがさめる）　○窓外《サウグワイ》（まどのそと）　○觀察《クワンサツ》（みてしらべる）　○富士山《フジサン》　○處々に聳え《シヨ〳〵　ソビ》（ところ〴〵につきたち）　○垂れさがり《タ》　○奇觀《キクワン》（ふしぎなるみもの）　○マオス（ジャバ島の印度洋方面に面せる側にある所なり）　○繁茂《ハンモ》（しげる）　○蔓草《ツルクサ》　○纏ひ《マト》　○寄生《キセイ》　○深林《シンリン》　○狀態《ジヤウタイ》（ありさま）　○亂雜《ランザツ》　○詞《コトバ》　○說明《セツメイ》（ときあかし）　○螢《ホタル》　○一泊《イツパク》（とまる）　○途上《トジヤウ》（みちに）　○火山《クワザン》　○耕作《カウサク》（たがやすこと）　○オランダ政府《セイフ》（獨逸とベルギーとの間の王國）　○敷き《シ》（しきまうける）　○大工事《ダイコウジ》（だいふしん）　○困難《コンナン》（なんぎ）　○察するに餘あり《サツ　アマリ》（おもふにまさるほどにてある）　○完全《クワンゼン》　○園圃《エンポ》（はたけ）

○規則立てる ○取締 ○統御の術（しはいするてだて） ○富める（十分にである） ○特別（べつだんに） ○柔順（おとなしきこころ） ○天性（うまれつき） ○倶に存せる（どちらももつてをる） ○資金（もとで） ○忍耐力（しんぼうのちから） ○何ぞ能く（どうして〳〵） ○熱國（あつきくに） ○大經營 ○元來（もとより） ○一貧國（びんばふぐに） ○遊食の輩（ゐぐひのもの） ○有爲の人（りつぱなひとたち） ○活力（はたらくちから） ○隱居 ○食客（ゐさふらふ） ○飼料（かひ たくため） ○眺むる ○一興（ひとつのたのしみ） ○傘を翳し ○日を除け ○公家方（朝廷づき〳〵の家來） ○行列の繪 ○長柄傘（柄の長き傘） ○金紙の飾 ○從者に持たす（けらいにもたせる） ○絹布 ○美衣を纏ひ（りつぱなるきものをつける） ○黄金の飾 ○跣足 ○貴族 ○馬繋場 ○雜品（いろ〳〵なしな） ○並べ ○群集（たくさんあつまり） ○喧噪（さわがしくする） ○市場（まちば） ○道幅一杯 ○用意 ○休息所（やすみばしよ） ○辻番（辻々に設けたる小屋） ○奇妙 ○刻みたる木（ほりたる木） ○吊り ○時を報す（ときをしらする） ○道具 ○寢ずの番 ○盗難（どろばう） ○火災（くわじ） ○急報（きふにしらせる） ○分擔（ひきうける） ○修繕（ふしん） ○街道 ○並木 ○天然の綠門 ○鬱生（たくさんにはゐる） ○椰子の木 ○供給（そなへる） ○果實（くだものゝみ） ○衆寡敵せず（たせいにぶせいはかなはぬ） ○平和を保ち（ぶじにくらしをたてゝ） ○良政 ○壓制 ○調合 ○太平を謳ふ（よのなかのよくをさまりたるをうたふ） ○羨む（うらやましくおもふ） ○行き屆き ○舊來（もとからの） ○貴族 ○隱居の身 ○兵馬の實力（いくさをするちから） ○脇差（小刀） ○差さず ○背後の帶に挿み（うしろのおびにはさみ） ○歩く ○臆病武士 ○飾 ○人種學上の研究（人の種類についてのしらべ） ○土人語の調査（土人のことばのしらべ） ○探求（さがすこと） ○餘程 ○バタビア（和蘭領ジヤワの首府） ○諸博物館 ○ボイテンゾルグ（バタビヤの南三十五哩にある都邑なり） ○植物園 ○チークの森 ○洵に ○大富源（大なる富のもと） ○恥ぢず ○期節 ○霜枯（草木の霜にあひて枯れる時節） ○迎の男 ○投宿（やどにとまる）

二　螢

澤山　○一齊（いちど）　○電が閃くやう　○源氏螢　○發光の調子を揃へ　○消えて　○規律（きそく）　○出盛り　○時節　○華氏六十度（寒暖計は通常水銀のものを用ひ度もりに三種の別ありこゝに舉げたる華氏は氷點三十二度沸騰點を百度させり）　○余は（私）　○一晩　○計つて　○一匹・○指の間に挾んで　○明滅（ひかるときえると）　○多少（いくらか）　○氣が立つて居る（いさみたちてゐる）　○勇んだり　○怒つたり　○量　○シエークスピア（英國の詩人）　○事實（ことがら）　○外氣の温度（そとの空氣のあたゝかさ）　○鳴く蟲の音　○高低（たかひく）　○違ふ　○屋外（いへのそと）　○平家螢　○川端　○段々〱（しだい）　○眞盛　○慰に　○螢狩（ほたるとり）　○明滅（あかるくなつたりきえたり）　○夜半前（よなかまへ）　○亂れ飛んで　○復（ふたゝび）　○認められ　○眞の闇（まつくら）　○應じ（こたへて）　○當座　○近邊（ちかく）　○競爭して（あらそひて）　○眞似　○宵の間（よのいまだふけざるうち）

三　祇園の夜鬼

ふりしきり（さかんにふりて）　○物すごき夜（なんとなくおそろしき夜）　○白河法皇（第七十二代）　○祇園の社東（京都市祇園町に鎭座する八坂神社をいふ、その社の東）　○潜行（おしのびにておでましになる）　○平忠盛（白河、堀河、鳥羽の三朝に歴事し刑部卿にまでなる）　○北面の武士（院の御所の北面に伺候して院中を警衛する武士）　○隨行し參らす（したがひまうしたり）　○社頭（やしろの前）　○怪しき物　○毛髮（かみのけ）　○白がねの針（銀のはり）　○束ね　○且光り且消え（ひかりたるかとおもふうちにきえる）　○魂を銷し（俗にたまげるといふに同じ）　○怖るゝ事　○限無し（たいそうなり甚しきなり）　○射しめ（弓にていとめさせる）　○狐狸の業（きつね、たぬきのしごと）　○血を流す　○手捕（手つかまへ）　○弓箭を投げ捨て　○やにはに（きふ）　○捉ふ　○老僧（としよりのぼうさん）　○神祠（かみさま）　○點燈（あかりをつける）　○麥稈　○戴き　○油注（あぶらさし）　○提げ　○火入　○行く行く（あるきながら）　○膽勇（きもだまのすわりてたしかなること）

一四　京都御所拝観の記

京都御所　○拝観（をがみ）　○神々しかりし（りつぱなるごと）　○殿掌（ごてんをまもる役）　○導かれ　○うらゝか（のどか）　○都の春　○九重（禁中をいふ）　○籠れる　○踏む足も空に（ふむあしも定まらぬごと）　○人間の世界（このよのなか）　○私に承るに（きくところによる）　○平安朝（桓武天皇京都に遷都したまひしより鎌倉時代までをいふ）　○里内裏（大内裏の外に一時主上の御住居ありし御所）　○北朝（南朝に對し足利尊氏が光明天皇を京都に立て申してより崇光、後光嚴、後圓融を經て後小松天皇が南朝の後龜山天皇より三種の神器を受け給ふまでをいふ）　○天明の大火（天明八年正月晦日の大火をいふ）　○幕府（德川幕府）　○勅命（おほせ）　○老中（幕府の重き役人）　○松平定信（田安宗武の第七子にして白河城主松平定邦の嗣となる）　○造營の工（ふしんのこと）　○略式　○儼然（おごそか）　○舊制に復し（もとのしきたりにかへり）　○安政　○火災に遭ひ（くわじにであひ）　○概ね（たいてい）　○式（かた）　○御所ぞかし（ごしよであるわい）　○紫宸殿（南殿とも稱し、尋常の一公事は此處にて行はれしが大極殿荒廢の後は御即位の大儀をも行はせらるゝに至れり）　○清涼殿（天子日常の御座所）

○故實（ふるきしきたり）　○傚へる　○心地す（こゝろもちがする）　○正殿（おもて御殿）　○左近櫻　○右近橘　○塵も止めず（ちり一つもなきこと）　○一面に敷きつめたる砂を射て　○眩きばかり　○元日の節會（節會は朝廷にて定まりたる公事あるときの集會をいふ）　○明けはなれ　○初日の光　○板敷　○背に　○唐代の賢臣（支那唐代のすぐれたるひと）　○畫ける襖　○賢聖障子　○巨勢金岡（有名なる畫人にして巨勢家の開祖なり）　○御即位の式　○擧げたまひ（おこなはせらるゝ）　○主上（天子を申す）　○御居間　○世移り風變り（よのなかゞうつりかはり）　○日常だん　○御起居に適せず（おすまゐにならない）　○近世（ちかごろ）　○上古の形を存したるなり（むかしのしきたりのこしたくばかりである）　○正面　○母屋（一棟の家屋の中央なるところ）　○晝の御座　○御帳臺（四方に帳を下し外見を防ぐ）　○塗籠（四方を壁にて圍ひ、明り取を付け妻戸を設けて出入す）　○夜の御殿　○御寢所　○殿上人　○宿直　○藤壺の上局（内裏七舍の一にて飛香舍の別名なり、女御中宮の居なり、されば清涼殿へ宿直に上るに、かの殿の控室あり之を上の御局といふ）　○萩の戸（夜の御殿の北にて藤壺の上の御局と弘徽殿の上の御局との

中間にある間なり　○弘徽殿の上局（皇后の御住居なり）○朝餉間（天皇の供御を召し給ふ所）○臺盤所（膳部を整ふる所）○鬼間（白澤天、鬼を切る畫あればいふ）○廣廂（廂の間、のこと）○衝立　○年中行事障子（年中行はせらるゝ公事節會のことを文にて書きし障子）○昆明池障子　○備忘（わすれぬためにする）○荒海障子　○手長足長（手と足のながき人）○渡廊（ながらうか）○跳馬障子（馬形の障子ともいふ）○拔け出で　○勅　○繪を畫き加へしめ　○河竹（葉廣く）○呉竹（葉細し）○御溝（やりみづ）○小御所（將軍參内のとき裝束を更へ休息する所）○御學問所　○常御殿　○様式（かた）○謁見（おめみえ）○拜謁者　○階級（だんかい）○林泉の巧（樹木泉の配置のたくみなること）○いふばかりなし（いはんかたし）○蟬の小川（加茂川の古名）○堰き入れ　○湛へ　○四季の眺（春夏秋冬のけしき）○東山　○一帯　○一眸（ひとめ）○彼方　○木立（はやし）○如意嶽の大文字の火（今の京都大學の後方に聳ゆる山にて俗に大の字山といふ、昔淨土寺の伽藍火事にかゝりしとき其本尊飛び出で、此山に留り光明を發したりとの故事に依りて毎年七月十六日火を山腹につけて光明にまねたりしが後大の字形にやくことゝなれり）○一わたり（ひとほり）○畏しや（おそれ多きことなり）

一五　雙六

童子（こども）○大津（京都を去る三里）○戻り　○畢竟（つまり）○勝を占む（かちをとる）○骰子（角などにて造れる正立方の少さきもの六面に一より六までの點をしるす）○いと遲かり　○一飛に　○誇り　○負くれば　○泣く　○上品　○笑を含み　○言葉無くなり　○憤り悶ゆる兒　○誣ひ罵り　○かしましく騷ぐ（やかましくさはぐ）○仲好き同士　○援けあふ　○おとしめ（さげしめ）○運不運（しあはせのよいとわるいと）○巧不巧（じやうずへた）○是不是（正しきと正しからぬと）○德不德（道にかなひたるとしからざると）○噂　○團欒中（一座をなしたるよりあひ）○むつかしげ（なかよさげなり）○傍觀者（そばにて見てたる人）○紛々たる言説（かれこれといふこと）○有無（あるなし）○意志感情（こゝろもち）○勝敗（かちまけ）○曲直（よしあし）○要せず（いらぬ）○大人（おとな）

○時なるべし（じこくであらう） ○誇らん（じまんする）

一六　朝鮮京城

京城 ○皇城（おしろ） ○山河襟帶（山河にかこまれたるところ、山を襟にし河を帶にすといふこと） ○形勝（要害のよきこと） ○北漢山（京城の北にある山、三角山又漢山ともいふ） ○聳え（つきたち） ○麓に（山の下に） ○昌德（李朝第二世定宗王の朝に建つ） ○景福（李朝の太祖李成桂、北漢の僧をして地を相せしめ遂に宮殿を建つ、文祿の役に燒失せしが後二百五十年にして大院君再び之を興せり） ○祇園（東山の麓にあり） ○清水（清水阪の東端にあり洛東第一の靈場なり） ○知恩院 ○南山（本覓山なり頂上に烽火あり） ○半腹（山のなかごろ） ○和城臺 ○茶屋 ○軒を列ぬ（いへがつゞく） ○嵐山 ○嵯峨（今の嵯峨村一帶の地） ○御室（もと仁和寺と同義に用ひられ又廣く其近地をも稱す） ○規模（しくみ） ○太廣通橋（南大門外に架せる石橋） ○長廣橋 ○水標橋 ○河里橋 ○太平橋 ○河積 ○洗濯 ○曝す ○其趣（そのようす） ○西京（京都のこと） ○四條河原邊（このかはらにてぬのをさらすなり） ○漢江（南北兩江あり南江最も長し）

○鴨川（京都にあり、南流して桂川に入る） ○澱河（宇治川、桂川の合流） ○見つべく（みられる） ○物を戴いて（ものをのせて） ○八瀨（叡山の西麓にあり） ○大原（山城國愛宕郡にあり舊大原莊と云ふ） ○似たり ○概して（たいてい） ○粗末 ○比すべく（くらべる） ○庭苑（には） ○雅致に富む（おもむきがある） ○大宮御所（京都の御所をいふ） ○御苑（おには） ○遜色（おとさるやうす） ○賀茂川 ○比べ ○珠を敷き ○純白透明（まつしろにすきとほる） ○洗ひ淸む ○水質（みづのたち） ○徑庭（ちがひ） ○李朝（李氏朝鮮王室の稱） ○都府 ○方今（當時） ○約（およそ） ○匹敵（くらべる） ○周圍（まはり） ○乃至（又は） ○城壁を繞らし（まはりにしろがありて） ○石を疊み（いしをつみかさね） ○築き（つきたてる） ○城門（しろのもん） ○白岳（景福宮の背後にある山） ○鷹峯（昌德宮の背後にある山） ○聳び ○仁王山 ○屹立（つきたち） ○駱駝山（京城の東北隅にあり） ○木覓山 ○連峯（つゞきやま） ○五署 ○區劃（くべつする） ○各坊 ○契 ○整然（たゞしくとゝのふこと） ○不潔（きたない） ○矮陋（ひくゝてきたない） ○鐘路 ○街路（みちすぢ） ○道幅 ○市

區改正（クカイセイ）（まちはばをあらためたること）○輻湊（フクソウ）（あつまること）○肩摩轂擊（ケンマコクゲキ）（かたとかたとすれあひ、くるまのわとわがつきあたること）○流石（サスガ）○韓（カン）半島（ハンタウ）（朝鮮は半島を成せるゆゑにいふ）○首府（シユフ）（みやこ）○目貫（メヌキ）○大鐘（タイシヨウ）（おほいなるつりがね）○撞く（ツ）○慣例（クワンレイ）（ならはし）○商（アキナ）ふ ○販ぐ（ヒサ）○麻苧（アサヲ）○紬類（ツムギルヰ）○專賣權（センバイケン）（己ひとり賣る權利）○沒收（ボッシウ）（とりあげる）○獄に下さる（ゴク、クダ）（らうやにいれらる）○販賣（ハンバイ）（うりさばく）○免許料（メンキヨレウ）○納め（ヲサ）○組合（クミアヒ）○加盟（カメイ）（なかまにはいる）○試み（コヽロ）○早起（サウキ）（はやおき）○塡め（ウヅ）○白菜（シロナ）○葱（ネギ）○陳列（チンレツ）（ならべる）○長き烟管（ナガキキセル）○啣へ（クハ）○胸の邊（ムネ、ヘン）○喪中用（モチユウヨウ）○冠（カブ）り ○徘徊（ハイクワイ）（うろつきまはる）○薪（マキ）○牛背（キウハイ）（うしのせなか）○總角の青年（チヨンガー、セイチン）者（總角は若者）○叫ながら（サケ）（よびながら）○群がる（ムラ）（たくさんあつまる）○曳き歩く者（ヒ、アル、モノ）○水壺（スヰコ）（みづつぼ）○群集（グンシフ）（あつまり）○喧々囂々（ケン〳〵ガウ〳〵）（やかましく）○容（タヤ）易（ス）く ○無遠慮に（ブエンリヨ）○割合に（ワリアヒ）○負傷者（フシヤウシヤ）（きづつくもの）○生命の危難（セイメイ、キナン）（いのちのあやうきこと）○避くる（サ）（よるける）○妙なり（メウ）（ふしぎである）

一七　僕（ボク）の寫眞帖（シヤシンテフ）

僕（ボク）の級（キフ）（私の學校の同級）○前島（マヘジマ）（人の姓）○郵便切手（イウビンキッテ）○蒐集（シウシフ）（あつめる）○熱心（ネッシン）○古今萬國（ココンバンコク）（むかしのこと、今の世界國々のこと）○珍し（メヅラ）○アルバム（寫眞帖、切手帖をいふ）○收め（ヲサ）○岡（ヲカ）（人の姓）○動物標本（ドウブツヘウホン）○道樂（ダウラク）（たのしみ）○蝶（テフ）○蜻蛉（トンボ）○虛弱（キヨジヤク）（からだがよわい）○病床に就く（ビヤウシヤウ、ツ）（やまひのとこにつく）○寂しい（サビ）○悲しい（カナ）○慰め（ナグサ）○開卷第一（カイクワンダイイチ）（ひらきて第一ばんめ）○伯父（ヲヂ）○肥つて（フト）○鬚（ヒゲ）○薄く（ウス）○郡長（グンチヤウ）（一郡の長官）○撮（ト）つた ○奏任官（ソウニンクワン）（天皇が大臣の申立を入れて任命せらるゝもの）○禮服（レイフク）（儀式の時に着用する衣服）○世話（セワ）○謙（ケン）○祖母（ソボ）○兩（リヤウ）端（タン）○後に並んで（ノチ、ナラ）○夫（ヲット）○平生（ヘイゼイ）○快活（クワイクワツ）○可笑しく（ヲカ）○眞つ黑（マ、クロ）○映つて（ウツ）○洋（ヤウ）行中（カウチユウ）（西洋に行きて居る）○挾ます（ハサ）○從兄（イトコ）○龍馬（タツマ）○外交官試驗（グワイカウクワンシケン）（外務省にて登庸すべき高等官の選拔試驗なり）○及第（キフダイ）（試驗にあたる）○朝鮮統監府（テウセントウカンフ）（朝鮮にある日本の役所にて統監之を總ぶ）○役人（ヤクニン）○約束（ヤクソク）○明け（ア）○立派（リツパ）○手札形（テフダガタ）

○受持先生　○小野田（人の姓）　○濃い眉毛　○頰骨　○出張つて　○顎　○大層　○可愛がる　○實の叔父　○親しんだ　○新形　○高見（人の姓）　○保險會社員（保險會社はあらかじめ契約しおき契約者危險又は損害にかゝりたるとき會社より、金圓を拂渡すなり）　○懇意　○病い　○ナイヤガラの瀧（北米の河にてイリー湖より發し流れ流れて百六十呎の懸崖を下る之をナイヤガラの瀑布といふ）　○ロッキー（北米の西部を縦る大山脈をいふ）　○坊主頭　○被布見た樣　○十德（素袍の如くにして腋を縫ひつく）　○謠曲（うたひ）　○挿花（いけばな）　○嫁かぬ（よめにゆかぬ）　○意を丹田に收め（丹田は、へそより下のところ、落ちつきて）　○口癖　○宗匠　○說明（ときあかし）　○赤十字社　○看護婦　○腸窒扶斯（恐ろしき熱病）　○看護す　○恢復期（なほりかゝりたるとき）　○一點張　○怒り　○お陰　○生命（いのち）　○日露戰爭（明治三十七八年の戰役）　○貰つた　○勳章　○キャビネ形（手札形の四倍大のもの）　○ケムブリッジ（いんぐらんどにあり十七學校より成れり）　○横向　○半身　○褒め　○サンダウ（英國の人にて現今無双の力士）　○裸體（はだか）　○腕を組んで

○奮然（心をふるひおこし）　○體育術　○研究（きはめ）　○自身（みづから）　○發明（かんがへいだすこと）　○體格（からだ）　○力量（ちから）　○採用（とりもちひられ）　○東鄕大將（名は平八郎今は海軍々令部長たり）　○眞面目　○謙遜　○重ね　○司令塔（艦艇にて司令するものゝ居る所）　○眼を曠らし　○艦隊（軍艦の隊をくみたるもの）　○號令　○矢張　○大判　○ボール箱（あつがみのはこ）　○一杯（たくさん）　○整理（まとめる）

一八　硝子

○寄與（てがらとなる功あること）　○望遠鏡　○顯微鏡　○寫眞鏡　○測量鏡　○諸種（いろ〳〵）　○比類（たぐひ）　○一切（すべて）　○頓挫（くじけよわる）　○容易に起つ能はざる（たやすくたつことができぬ）　○埃及　○古墳（ふるきつか）　○發見（みだす）　○石棺（石にてつくりたる棺）　○圖書　○推す（かんがへる）　○和泉國泉北郡　○大山の御陵（仁德天皇の御陵）　○椀　○奈良東大寺（奈良市大字雜司にあり有名の大佛は當寺の本尊なり）　○寶藏（たからぐら）

○經卷の軸（お經のまきものゝぢく） ○刀劍の飾 ○瓔珞（珠をつなぎて造りし頸飾） ○碁石 ○火齊珠（硝子の玉） ○存在（ありしこと） ○瑠璃 ○假水晶 ○ビイドロ（伊太利、西班牙、葡萄牙語、） ○ギアマン（西萄牙、葡萄牙語） ○別稱（べつのとなへ） ○原料（もとのしな） ○鎔解（とかすこと） ○製作（つくること） ○放冷（ひやすこと） ○硅石 ○石灰 ○炭酸曹達（色白き粉末） ○主要（だいいち） ○色彩（いろどり） ○混合物（まざりもの） ○秘密（人にしらすこと） ○釉藥 ○硅酸（純粹なるは水晶なり） ○固性アルカリ（炭酸曹達、炭酸加里の類をいふ） ○酸化金屬（酸素と化合する金屬） ○化合（化學作用にて合する） ○鎔し ○塵芥箱 ○硝子屑 ○麥酒瓶 ○缺屑（かけくづ） ○成分（物體を組成する分子） ○豫定（まへもってきめたる） ○光澤（つや） ○下等品（わるいしな） ○牛乳瓶 ○適宜（ほどよく） ○調合（まぜあはせ） ○搗き碎き ○坩堝 ○耐火粘土（火にたふるねばつち） ○擂鉢 ○伏せ ○竈 ○露出（あらはしだし） ○水飴 ○半液體（半分のえきたい） ○管 ○件の（そのこと） ○飴細工 ○仕事竈

○四方口 ○塔の形 ○熱竈（ねつしたるかまど） ○工を加ふ（さいくをする） ○周圍（まはり） ○尖に ○火の糸瓜 ○うち振り ○引き ○伸ばし ○奇觀（ふしぎのみもの） ○形容（かざりていふ） ○就中（なかにも） ○肺（肺臟） ○激しく（ひどく） ○冷却爐（硝子器をしだい〳〵に冷却せしむる處なり） ○立方（各の面が正方形なる平行六面體） ○煉瓦室 ○徐徐に（しづかに） ○冷さる ○總じて（すべて） ○堅弱（かたいことよわいこと） ○遲速（おそいことはやいこと） ○外面（そとづら） ○結局（つまり） ○分子 ○不平均（おなじくない） ○脆弱（もろい） ○破損（こはれる） ○之に反し（これとかはりて） ○徐緩（しづか） ○實質 ○平等（たひら） ○堅固 ○特別（べつだん） ○構造（しくみ） ○熱度 ○並物 ○大概 ○數日を費し（二三日かゝりて） ○手數 ○獨逸政府 ○博覽會 ○天文用（天體をはかり見るに用ふる） ○レンズ（めがね） ○直徑（さしわたし） ○光線學上（ひかりのことでしらぶる學） ○均一（ひとしきこと） ○想ふべし（かんがへるがよい） ○加減 ○變化（かはり） ○免れざれ ○紅色（あかいろ） ○黄

金（ゴン）　〇並物（ナミモノ）　〇クローム（主にクローム鐵鑛となりて存す）　〇コバルト（色澤銀に近くして赤色を帶びたる金屬）　〇鉛（ナマリ）　〇色合（イロアヒ）　〇工夫（クフウ）（かんがへ）　〇一定（イツテイ）（きまり）　〇仕上（シアゲ）　〇數多（スウタ）（たくさん）　〇砥車（テイシヤ）（砥石にて車をつくり、之を回轉せしめてその背に刃物をあてゝ砥ぐなり）　〇鋼鐵（カウテツ）（はがね）　〇磨（ス）　〇回轉（クワイテン）（まはす）　〇磨（ス）り　〇模樣（モヤウ）　〇助手（ジヨシユ）　〇濕砂（シメリスナ）を掬（スク）ひ（しめりたるすなをすくひ）　〇鋼鐵（カウテツ）（はがね）　〇磨（ス）り耗（ヘラ）し　〇荒研（アラトギ）　〇最後（サイゴ）　〇柳（ヤナギ）の木車（モクシヤ）　〇本磨（ホンズリ）　〇羅紗車（ラシヤグルマ）　〇所長（シヨチヤウ）を異（コト）にす（すぐれたるところがちがふ）　〇壓搾硝子（アツサクガラス）　〇岩城工場（イワキコウヂヤウ）　〇除（ノゾ）き（ほかにして）　〇粗造品（ソザウヒン）（ざつとしたるしな）　〇香港（ホンコン）　〇西比利亞（シベリヤ）　〇輸出（シユユツ）　〇額（ガク）（たか）

一九　バクテリヤ

微細（ビサイ）（こまかい）　〇菌類（キンルヰ）（きのこのたぐひ）　〇廓大（クワクダイ）（おほきくひろげる）　〇人體（ジンタイ）（ひとのからだ）　〇割合（ワリアヒ）　〇容積（ヨウセキ）（かさ）　〇到（イタ）る所（トコロ）（どこにでも）　〇生存（セイゾン）（いきてゐる）　〇殊（コト）に（べつだんに）　〇塵埃（ヂンアイ）（ちりほこり）　〇汚水（ヲスヰ）（きたないみづ）　〇腐敗物（フハイブツ）（くされもの）　〇球狀（キウジヤウ）（たまのかたち）　〇圓柱狀（エンチウジヤウ）（まるいはしらのかたち）　〇螺旋狀（ラセンジヤウ）（ねぢれたるかたち）　〇線狀（センジヤウ）　〇一樣（イチヤウ）ならず（おなじでない）　〇概（オホム）ね（だいてい）　〇自體（ジタイ）（わがからだ）　〇分裂（ブンレツ）（さけること）　〇繁殖（ハンシヨク）（ふゑる）　〇一定（イツテイ）（きまりたる）　〇中央部（チウアウブ）（まんなかのところ）　〇原形（ゲンケイ）（もとのかたち）　〇神速（シンソク）（はやきこと）　〇譬（タト）ふるに物（モノ）なし（たぐへたとふべきものなし）　〇普通（フツウ）（たいてい）　〇外界（グワイカイ）の事情（ジジヤウ）（そとのやうす）　〇繁殖（ハンシヨク）に適（テキ）す（ふゑるにてきたうする）　〇假定（カテイ）（かりにきめる）　〇巨數（キヨスウ）（たくさんのかず）　〇計算（ケイサン）（はかりかぞへる）　〇大洋（タイヤウ）（大海のこと）　〇充實（ジユウジツ）（みたす）　〇實際（ジツサイ）（じつち）　〇餘地（ヨチ）（ばしよ）　〇營養分（エイヤウブン）（やしなひになるところ）　〇伴（トモ）なはざれば（つれてゆかなければ）　〇植物（シヨクブツ）（くさき）　〇寄生（キセイ）（ほかのものにつきて生活する）　〇結核（ケツカク）（桿狀にして太さ血球に類す）　〇傳染病（デンセンビヤウ）（はやりやまい）　〇勁敵（ケイテキ）（つよいてき）　〇豫防（ヨバウ）（まへもつてふせぐ）　〇石炭酸水（セキタンサンスヰ）（石炭を水にとかしたるもの）　〇消毒劑（セウドクザイ）（毒をけすくすり）　〇不潔（フケツ）（きたない）　〇撒布（サンプ）（まきちらす）　〇衣服（イフク）（きもの）　〇家屋（カオク）（いへ）　〇庭園（テイヱン）（には）　〇清潔（セイケツ）（きれい）　〇煮沸（シヤフツ）（にたつる）　〇健全（ケンゼン）（ぢやうぶ）　〇死滅（シメツ）（しぬる）　〇虛弱（キヨジヤク）（よわい）　〇大害（タイガイ）（大なるさまたげ）

○暴威を逞しうする（十分にはびこらせる）　○反って（あべこべに）　○益をなす（りえきをする）　○或者　○酢

○醬油　○味噌　○納豆（大豆をむし之をつとに入れてくさらせて製す）　○生育（そだつこと）　○腐敗（くさる）　○不利益

○結果（こと）　○太古（おほむかし）　○死に〻死にたる（しにかさなりたる）　○堆積（かさなりあひ）　○慘憺（むごたらしき）

地理天文

二〇　太陽の大きさ

○書に曰ふ（本にかいてある）　○直徑（さしわたし）　○容積（かさ）　○村落（むら）　○寺塔（てらのたう）

○建物　○鐵道　○軍艦　○地球上（この世界）　○建築物（たてもの）　○人獸（ひとけもの）　○蟲魚（むしやうを）

○生きさし生ける（いきてをる）　○生物（いきもの）　○おし纒め（ひとつにして）　○優に（十分に）　○包含（つゝみいれる）

○一兆　○一秒時　○鐘を叩き　○間斷なく（たえまなく）　○叩き續け　○叩き盡くす

○日子（ひかず）　○經過（かゝる）

二一　星の數

蒔繪（器の面に漆にて繪を書き其漆のかわかぬ間に金銀の粉を蒔きつけ後にみがきて光を生ぜしむるなり）　○梨子地（蒔繪に金銀粉の斑點を梨子の膚の如く作れるもの）　○空一面（そらいつぱい）　○爛燦（きらきらする）　○星辰（ほし）　○幾何　○科學の進歩（がくもんのすすみたること）　○正確（たゞしき）

○點に至り下りては（こゝになりては）　○天文學者　○強弱（つよいよわい）　○肉眼（目のこと）　○微に（やうやく）

○認む　○晴朗（はれわたる）　○眼力（めのちから）　○ヘルセル氏（有名なる天文學者なり一七三八年ハノバーに生る）　○ストルーベ氏（獨逸の有名なる天文學者）　○計算（かんぢやう）　○天球　○區域（ばしよ）　○無慮（およそ）　○天の川（夏秋の晴夜白く光りて川の如く空にわたりて見ゆる星群なり）

○近傍（ちかく）　○通過（とほる）　○說（說明）　○自己（じぶん）　○恒星（自ら光を發し常に位置を守りて動かざる星をいふ）

○宇宙（天地）　○廣大無邊（ひろくしてかぎりなきこと）　○窺ふ　○著しく（あきらかに知れわたる）

○精良（すぐれてよい）　○概算（あらましかんぢやうして）　○際限（かぎり）

二二　星と花

自然（造化の力を言ふ。世界の物を産みだす故に母になぞらへるなり）○み空の花（そらのはな、みは嘆事に通じて尊稱に用ふる語）○惠み　ひ[illegible]　○宵々（よゐ〳〵に）○かはす（とりかはす）○あけぼの（よあけがた）○白露　○しとしづく（ひさたれ）○涙

二三　ニユートンの失策

○ニユートン（一六四二年英國に生れ學を積みて大學教授と也一七二七年歿す）○問題　○解き　○諸事夢中　○考へ込む　○定例（きまり）○夙く起き　○例の如く（いつものとほり）○書齋（本を見るざしき）○閉ぢ籠つて（いりこみで）○餘程　○調べもの　○朝飯　○喫べ　○主人　○斷食（ごはんをたべぬこと）○濟まぬ　○評議　○汁鍋　○煮て　○給事（飲食のせわをすること）○彼方（あちら）○心配もことわり（しんぱいするのもだうりである）○眞黑　○掴み

二四　英人は如何なる國民か

○同盟國（攻守同盟を結びたる國）○商工業（商業及工業）○國を立て　○勤勉（よくつとむること）○常識（普通のことをよく知りわくる力）○自信の念（自分を信用するかんがへ）○名譽　○權力　○世界無比（せかいにならぶものなし）○信念（かんがへ）○英人を通じ（英國人一般に）○性格（他に異はりてすぐれたる性質）○五大洋（大西、太平、印度、南北洋をいふ）○飜らざるなく（はたのひら〳〵せぬはない）○華客（得意）○五大洲（亞細亞、歐羅巴、南北亞米利加、亞弗利加をいふ）○普及（ひろくゆきわたること）○怪しむに足らず（ふしぎとするにたりない）○家庭　○健全、○一家團欒（家内中うちとけ）○ローストビーフ（肉片をむしやきにしたるもの）○プッヂング（麥粉に牛乳を混じ乾葡萄を入れて造れる菓子）○得意なる時（じまんするとき）○主婦（おくさん）○賓客（たきやく）○待遇（もてなす）○懇切（てあつく）○相率ゐ（ひきつれて）○寺院に赴く（てらにゆく）○寄席　○芝居　○興行物　○休止（やすむ）○發車の回數（車をだすどすう）○普通の週日（日曜日の外の日）○職

務に從事す（しごとにかゝる）○幾多の都市（たくさんのまち）○煙突林立（けむだしが林の如くにつき立つこと）○天を焦せり　○輸出（たくり出す）○輸入（たくり入る）○一方に於て（かたくにて）○蓄財の道に長ず（かねをたくはふることにすぐれる）○慈善（人をめぐむこと）○布敎（宗敎をひろむること）○熱中す（一生けんめいになる）○貧富の差別（びんばふとかねもちのくべつ）○無數の貧民（かずしれぬほどのびんばふにん）○リバアプール（英國ランカスターの一大市場）○マンチエスター（英國最重要の工業市）○ロンドン（英國の首府）○貧民窟（びんばふにんのゐるところ）○愍れむべき狀態（かはゆそうなるありさま）○到底（とても）○想像（おもひかんがふる）○賭博を好む（ばくちをすきこのむ）○其比を見ず（そのたぐひを見ない）○金錢を賭す（かねをかける）○溺れん　○躍り入る（とびこむ）○溺るゝか否か　○試る（ためす）○競漕（ふねのこぎくら）○競馬（うまかけ）○遊戲（なぐさみ）○多額（たくさん）○氣質（きだて）○概して（たいてい）○保守的（しりぞきまもる）○憂鬱（うれひふさぐ）○陷り易く（はまりやすい）○衣食（きることくふこと）○何不自由なき

なにもさしつかへない　○自殺を試る（しなうとする）○尠からず（たくさんにある）

二五　英國富强の原因

富强國（とみてつよき國）○原因（もと）○重なる　○地理上の便宜（國のありばしよのよきこと）○氣力（はたらくちから）○地勢　○四面皆海（四方に海あり）○便益（つがふよきこと）○島國（しまぐに）○地中海　○舟楫の便利（ふねのだしいれのべんり）○獨占（ひとりじめ）○貿易（物をとりかへること）○衰へ（よわる）○國運（國のいきほひ）○到底（どうもてい）○比肩（かたをならべる）○地形上の優勢（土地のよいこと）○愈〻（ます〳〵）○舟乘に慣れ　○海波（なみ）○遠征（遠くに旅立すること）○航海　○事とも思はぬ氣象（なんともおもはないきしつ）○遠洋交通（とほき海にのりだして外國とゆききする）○區域（ばしよ）○領土　○商品（あきないひん）○得意先　○擴がり　○大奮發（心をふるひおこすこと）○追附く　○決心　○日沒せざる國（英國の領土は全地球上にあれば大陽の照らさざるところなしといふ）○誇稱（じまんいふ）○東洋の

日出國（日本は日出づる方にあたればかくいふ）　○日不沒國（日沒せざる國なり）　○因緣（ゆかり）　○提携（手をひきあひ）　○大功業（おほいなることがら）　○覺悟

二六　外國語を知るの必用

拜啓（つゝしみて申す）　○世界的國民（ひろく世につきあふ國民）　○踏み出だす　○大膽（きもふときこと）　○勇敢（いさましく）　○飽くまで（どこまでも）　○進取的（すゝみてとる）　○一手段（ひとつのてだて）　○蜜　○甘き　○黒人（ネグロといふ）　○胡椒（たうがらし）　○辛き　○生蕃（山中に住めるひらけぬ人）　○人情（ひとのこゝろ）　○案外に（おもひのほか）　○冷酷（むごたらしい）　○隣家（となりのいへ）　○人鬼（わるもの）　○賤が伏屋（びんばふにんの家）　○茨の木　○況して　○文明諸國民（ひらけたる國々の人）　○驅け歩けば　○温き情思を汲み（てあつきなさけをくみわけて）　○心易き交際　○訂し（むすぶこと）　○彼我の言語（彼と我とのいふことば）　○明解（あきらかにわかる）　○意志（こゝろ）　○疏通せざる（いよくわからぬ）　○遲疑する（ぐづ〳〵する）　○心狀（こゝろもち）　○そゞろに（何となく心のすゝむさまにいふ）　○刺衝（つきたてる）　○股にかけ（ひろくあるくこと）　○狹し　○根ざす（おこる）　○必要（たいせつ）　○英語（イギリスの語）　○關係（かゝりあい）　○四隣（四方となり）　○過半（はんぶんすぎ）　○加那陀　○布哇　○濠洲（アウスタラリヤ洲）　○加之（その上）　○比律賓群島　○管轄（しはい）　○佛語（フランス國のことば）　○獨逸語（ドイツ國のことば）　○西班牙語（スペインのことば）　○邦人（日本人）　○第二の本國（我國は第一の本國ついで支那朝鮮は第二の本國なり）　○叶はず（ならぬ）　○筆談（字を書きて意志を通ずること）　○利（りえき）　○後來（こののち）　○一大市場（大なるいちば）　○解す（よくわからする）　○志す所（おもふところ）　○學習（まなびならふ）　○固より　○兎まれ角まれ（なんにいたせ）　○資格（ざだい）　○敬具（つゝしみて申すと云ふこゝろ）

二七　福澤諭吉

明治維新（明治に至りすべてのこと新しくなりたるゆゑにいふ）　○社會　○影響（さしひゞき）　○西洋（我國より歐米諸國を指していふ稱）　○思想

の輸入《ユニフ》（外のかんがへについであたらしきことをとりいれる） ○紹介者《セウカイシヤ》（ひきあはせたる人） ○豐前《ブゼン》 ○中津の藩士《ナカツ ハンシ》（奥平氏の家臣なり）
○父を失ひ《チヽ ウシナ》（父にしにわかれ） ○育て《ソダ》 ○漢學《カンガク》（支那のがくもん） ○長崎《ナガサキ》（肥前） ○和蘭語《オランダゴ》 ○緒方洪庵《ヲガタカウアン》（足守
藩の士にして醫師なり、後幕府の侍醫となる） ○就き《ツ》（したがひ） ○安政《アンセイ》（孝明天皇の時年號） ○鐵砲洲《テツパウス》（京橋區にあり） ○藩邸《ハンテイ》（奥平氏のやしき）
○塾舍《ジユク》 ○教授《ケウジユ》（をしへる） ○江戸幕府《エドバクフ》（徳川氏） ○條約《デウヤク》 ○奮發《フンパツ》（ふるひおこし） ○研究《ケンキウ》（しらべる） ○購ひ《アガナ》
（かひもとむ） ○萬延《マンエン》（孝明天皇の御代の年號） ○遣はさん《ツカ》 ○一行に加はり《イツカウ クハ》（そのなかまにはいり） ○實況《ジツキヤウ》（じつちのやうす） ○使節《シセツ》
（つかひのこと） ○視察《シサツ》（みてしらぶる） ○外國方《グワイコクガタ》（外國のことをあつかふ役） ○擧げられ《ア》（用ひられたり） ○文久《ブンキウ》（孝明天皇の御代の年號）
○巡廻《ジユンクワイ》（めぐりみる） ○後年に《コウネン》（のち） ○養し《ヤシナ》 ○西洋事情《セイヤウジジヤウ》（本の名） ○智識《チシキ》 ○慶應《ケイオウ》（年號） ○事あり《ジ》
（ようじあり） ○同行《ドウカウ》（ともにゆく） ○芝新錢座《シバシンセンザ》 ○私塾《シジユク》 ○新築《シンチク》（あたらしくたてる） ○塾生《ジユクセイ》（せいと） ○募集《ボシフ》
（つのりあつむる） ○熱心《ネツシン》（むなこめて） ○戊辰の役《ボシン エキ》（明治元年官軍江戸城にせめ來りたること） ○混亂を極め《コンラン キハ》（ごた〳〵なるぬきたること）

○授業《ジユゲフ》（がくもんをさづくること） ○三田《ミタ》 ○兵亂《ヘイラン》（いくさ） ○來集《ライシフ》（きたりあつまる） ○日新の知識《ニツシン チシキ》（日々にすゝむちゑ）
○獨立自尊《ドクリツジソン》（己れたつとびひとりだちでしごとをなすること） ○主義《シユギ》（もちまへ） ○國家有用の材《コクカイウヨウ ザイ》（國のやくに立つ人物） ○養成《ヤウセイ》（やしなふ）
○塾生《ジユクセイ》（生徒） ○事情《ジジヤウ》（やうすがら） ○述べ《ノ》 ○理科《リクワ》（物理化學） ○教訓《ケウクン》 ○普く《アマネ》（ひろく） ○導き《ミチビ》 ○文章《ブンシヤウ》
○漢語《カンゴ》 ○古語《コゴ》（日本のふるきことば） ○避け《サ》（用ひぬ） ○平易《ヘイイ》（やさしき） ○通俗を旨とし《ツウゾク ムネ》（わかりよきことを第一とし）
○了解《レウカイ》（わかる） ○功績《コウセキ》（てがら）

二十八　人間《ニンゲン》の三種三等《サンシユサントウ》

○智愚強弱《チグキヤウジヤク》（ちゑあるとおろかなとつよいとよわい） ○樣々《サマ〴〵》 ○上智《ジヤウチ》（いたつてちゑあるもの） ○下愚《カグ》（しごくおろかなるもの） ○至強《シキヤウ》（しごくつよいの）
○至弱《シジヤク》（はなはだよわきもの） ○比較《ヒカク》（くらべる） ○相違《サウヰ》（ちがひ） ○社會の經濟上《シヤクワイ ケイザイジヤウ》（世の中一ぱんのつがふじやう）
○不具癈疾《フグハイシツ》（かたわ） ○天然の不幸《テンネン フカウ》（しぜんのふしあはせもの） ○之を除きて《コレ ノゾ》（べつものとし） ○生來屈強《セイライクツキヤウ》（うまれつききちやう）

（ぶ）○才能（はたらき）○安閑（たあいもなく）○放蕩無賴（なまけてゐてわるいことをする）○厄介（せわ）○動もすれば
○自分の慾（おのれのよく）○逞しう（おもふまゝにする）○最下等（いちばんのくづ）○全般（のこらず、ぜんたい）○種族（や
から）○有害無益（なにもやくにたゝぬ）○俗に謂ふ○婆婆塞ぎの邪魔者（よのたしにならぬじやまもの）○目出
度けれ（よほどよろしいわけである）○衣食する（きものをき、食物をたべる）○嘗て（すこしも）○關せず（かゝはらぬ）○間接
にも（とほまはしにも）○直接にも（ぢき〳〵にも）○相談に與り○老後死後の謀（としよりてからと、しにたるあとのかん
がへ）○遑あらず（ひまがない）○一軒の家○良民（よいひと）○社會人事（よのなかのこと）○盛衰（さかんなるとおと
ろふること）○關係薄く（かゝはることがすくない）○不自由○敎育の結果（がくもんしたすゑ）○天賦の才力（天よりうけた
るはたらき）○活潑○獨立（ひとりだち）○累（わづらひ）○相談相手○案じ（しんぱいし）○自身（わがみ）
○地位（みぶん）○省みて（かんがへて）○事に當る（しごとする）○私に（自分のためにしては）○企て（おこし）○公

（國のために）○政治上（まつりごと）○民利（人民の利益）○宗敎（しうし）○先導者（さきだつておこなふひと）○世に
處し（せけんのためにする）○公私兩様（公と私と二つに）○富貴（とみてたつとく）○重寶（たいせつ）○人物（すぐれたるひと）
○筆に記する（かきたてる）○難きこと（むづかしきわけ）○事實（ことがら）○明白（はつきりして）○死亡（しぬる）
○傳聞（きゝつたへ）○不幸（ふしあはせ）○竊に（ない〳〵に）○私語し（さゝやき）○厄介拂○親類身寄
○報知に接し（しらせをうけ）○會葬（さうしきのともをすること）○不幸の沙汰（ふしあはせのとりさた）○勿論（いふまでもなく）
○噂○次で（ついて）○云々（しか〳〵）○狼狽（うろたへる）○口の端に殘り（かれこれをしまるゝ）○消滅
せざる者（きえなくならぬ人）○偶然（ふとして）○行狀（おこなひ）○居家處世（家にをり世に立つ）○差別○質問
するを要せず（とひたゞすにもおよばぬ）○向背（したがふか、そむくか）○視察（みぬき）○社會は良師なり（西洋の諺なり）

中等教科明治讀本訂正字解卷三終

（中等教科）明治讀本訂正字解

卷四

一　錦《ニシキ》の直垂《ヒタヽレ》

倶理伽羅谷《クリカラダニ》の奇襲《キシウ》（倶理伽羅又礪波山とも云ふ、越中國礪波郡にありて、加賀國に跨る、壽永三年四月平維盛平忠度等木曾義仲を討たんとて越前に入り、勢大いに振ふ、義仲之を倶理伽羅谷の險に邀へ撃ち、支那春秋時代の齊の田單が火牛の奇計を用ゐて大いにこれを破り、平軍の討たるゝ者一萬八千餘人に及びたり）　○鏖殺《アウサツ》（みなごろし）　○佐良《サラ》、安宅《アタカ》、篠原《シノハラ》、成合《ナリアヒ》（皆北陸道中にある地名）　○且戰ひ且退く《カツタヽカヒカツシリゾク》（戰ひ乍ら退く）　○返り撃つ《カヘリウ》（軍勢を引き返して來て戰ふ）　○勝《カ》ちほこつたる（勝ほこつて勢つきたる）　○鋒先《ホコサキ》（するい、きほひ）　○當り難く《アタリガタ》（かなはず）　○散々《サンザン》に打《ウ》ちなされ（甚しくうち破られ）　○西走《セイソウ》に（西向つて逃げ走る）　○軍中《グンチユウ》（軍勢の中）　○赤地《アカヂ》（布帛の赤き染色）　○鎧直垂《ヨロヒヒタヽレ》（軍直垂ともいひ、普通の直垂より幅狹く、丈短く、簡便に仕立てしものなり、又裾なき細

（くし袖と袴の裾とを括りしものなり）○黒糸縅（鎧を縅る緒通（チドホシ）を縅といひ、その縅又は革の色により種々の名あり、即ち黒糸にて縅りたるを黒糸縅といふなり）○武夫（武士軍人）○馬の首を廻らし（退きつゝありし乗馬の首を向き返して）○勢い（軍せい）○手塚太郎光盛（義仲の士、越前成合の合戦に齋藤別當實盛の首を獲て義仲に捧げし勇士なり）○名乗る（我名を呼上ぐ）○從卒（從へたる兵卒）○武者（戰士）○鞚（落ちるさまの形容）○首掻かる（首をかき斬らる）○草摺（鎧の腰に垂るゝ短き袴をいふ）○刺す（さし殺す）○癖者（わるもの）○思ふ仔細（考ふる事柄）○侍（雜兵でなく身分ある武士）○續く者（つき從ふ家來の意）○京畿西國（畿内か西の方の國）○阪東聲（關東人の言葉なまり）○面の皺七十余に疊めり（顔面に皺のあるさま、七十餘才の年齢に當る程なりといふ意なり）○老者（としより）○鬢髮（びんやかみの毛）○盛り（年さかり若者の意）○うち案ず（考へる）○あはれ（あゝと同じ歎息の聲）○ゝゝにもや（いゝでもあらうか）○幼弱（幼きこと）○半白の頭（ごましほあたま、白髮交りの頭）○白髮（白毛）○樋口兼光（信濃權守兼遠の子二郎と稱す、弟兼平、根井幸親、楯親忠と併せて義仲の四天王と稱せられ武勇卓絶す、礪波、篠原の戰に先鋒となり、功勳甚多し、後義仲の義經の爲に敗らるゝに及び源氏に降りしが遂に斬られたり）○髻（たぶさ）○あな無慙や（あゝ情なや痛はしやとの意）○實盛（齋藤別當と稱す、武州長井の人、源義朝に仕へて數々功あり、後平氏の恩を蒙り、源氏兵を擧ぐるに及び、馳せて京都に上る、篠原の戰に鬢髮を染め、壯者に伍して奮戰し、手塚光盛と相搏して殺さる）○日頃（平生）○弓矢取る者（武夫といふ意）○老體（年よつた身體）○大人氣なきに似たり（大人らしくないやうである）○かひ無き（戰ふに價値のなき）○老武者（老ぼれた士）○かりそめの物語（たうざの話）○形見（紀念）○白髮の尉（白髮を戴ける老翁）○失はる（なきものにせらる、殺される）○成人す（一人前となる）○一門（一族）○仇を復す（かたきをうつ）○偏に（全く）○古稀の齡（七十才の年をいふ支那にて七十才を古來稀なりと云ひし故事による）○君家に殉す（主家のため命を捨つ）○武夫の習（軍人として當然の事）○落涙（涙を流すこと）○袖を絞る（涙を流して袖をぬらすこと）

二　三老人

いづれも（どれも）○高齢（たいへんの、としより）○三老人（三人のとしより）○壽宴（年よりを祝ふ宴會）○祝賀會（祝ひの宴會）○創立以來（はじめたてゝよりこのかた）○教員兼校長（教員と校長とを兼帶につとめること）○永らく（ながいあひだ）○數年

前（五六年まへ）○歸住（かへつて住ひすること）○老農（農業にくはしい年より）○壽宴の半（宴會のなかほど）○列席の人々（其の席に並んで居る人たち）○長壽の方法（ながいきするしかた）○質問（きひただすこと）○一理（ひさつのだうり）○自分（わたくし）○必ず（きつと）○寢ね ○適當（ほどよい）○運動（からだをはたらかせること）○勉學（がくもんをすること）○日課（其の日其の日のきまつた課業）○規則正しく（きまりよく）○如何なる時も（どんなときでも）○變更（かへること）○三十年來（三十年この方）○缺勤（欠席といふにおなし）○養生法（からだをやしなふ法）○余は（わたくしは）○司法（法をつかさどること、則ち裁判官）○職務（役目といふにおなじ）○從事し（其の事について仕事をすること）○公平（かたよらぬ事則ち不公平の無いこと）○保つ（守ることもつこと）○專一にも（第一ばんにすること）○假にも（たはむれにも）○僞言（うそいつはり）○正直（たゞしくしてよこしまなる事の無きこと）○處生の方針（世の中を暮らしすごす目的）○一言一行（することなすこと）○自分（おのれ自身）○心に愧づる（こゝろにはづかしく思ふこと）○工夫（かんがへること）○これ或は長壽の方法か（ひよつとすればながいきするしかたであらうか）○話 ○有

之候 ○甘き物 ○喰ひ ○よき衣着たし（よいきものを着たい）○星を戴いで野に出で（早朝星の殘る頃より野に出ると云ふ、支那の古書に星を戴で出で星を戴いて入るといふことあり）○月を戴いで家に歸る（前の星を戴いて云々に對して月出でゝ後おそく宅に歸るをいふ。）○作物（農作物のことにて野菜や穀物などをいふ）○生立（成長すること）○心配（こゝろをいためること）○短命（いのちのみじかきこと）○基（どだい）○趣旨（おもむき）○說（ときごと）○生活（くらしかた）○成程 ○相違（ちがひ）○あるまじ（あるまい）○合點（會得すること、聞濟すること）○衛生法（からだをやしなふ法）○注意（きをつける）○到底（とても）○悟り

三　親族

民法 ○財產上（財產にかかはることがら）○事柄 ○身分上（人々の一身の關係）○關係（かゝりあひ）○法典（法律を集めたもの）○我等 ○生活上（くらしむき）○密接（ぴつたりとくつつくこと）○有せり（もつてをる）○親族（しんるゐ）○規定（おきて）○一斑（一部分）○揭ぐ（あげること）○所謂（いふところ）○六親等（自己よりわりだして上は親より高曾祖父母まで下は子より

（弟孫までを直孫といひ、兄弟より高曾祖父母に至るでの子孫等を傍系といふ）○血族（血統のつゞいて居るしんるい）○配偶者（夫よりは妻、妻よりは夫を配偶者といふ、即ちつれあひのことなり）○三等親內（三等親のうち、即ち親子は一等親、祖父母、兄弟姉妹、孫は二等親、曾祖父母、曾孫、叔伯父母を三等親といふ）○姻族（配偶者の親族をいふ）○普遍（世の中一般）○意義（こころばへ）○異なり（ちがつてをる）○連續（つゞくこと）○直系親、傍系親（六等親の解釋にくはし）○自己（おのれ自身）○祖父母（父母の父母）○父母（おのれの兩親）○分派（わかるゝこと）○子孫（こやまご）○姉妹（あねいもうと）○同始祖（おのれと先祖を同じうすること、たとへば兄弟姉妹はおのれと父母を同しうし、伯叔父母はおのれと曾父母を同しうするが如きをいふ）○伯叔父母（をぢをば）○夫 ○妻 ○夫婦 ○一方（かたかた）○世數（親族の順序をかぞへる稱）○一世を以て一親等とす（親等の順序を定めるには例へば父母を一世として一等親となし、祖父母を二世として二親等となすが如し）○同始祖に遡り（おのれより父母それより祖父母曾祖父母と順に上の方へ進むを云ふ）○從兄弟姉妹（つれにいとこのことにて、伯叔父母の子をいふ）○同一（おなじこと）○戸籍（人口をかきのせたる戸簿）○組織（くみたてること）○團體（かたまり）○戸主 ○氏（めうじ）○居所（ゐどころ）○指定（さしさだめること）○婚姻（結婚することの）

（すること）○養子緣組（養子をもらひ、または他人にわが子を養子に遣ばして相方姻戚となること）○拒否（こばむこと）○權利（自ら處分するちから）○扶養（やしなふこと）○義務（道德上法律上、人の當然なすべきこと）○要す（肝要とすること）○入夫（女戸主のところへ入りて夫に成るもの）○婿養子（他人の娘の夫として其の家にもらはれし男）○負ひ ○親子（おやこ）○實子（夫妻の間に生れたる子）○養子（夫妻が實子無きとき又は他の事故によつて他人の子をもらつて我が子となしたるもの）○養家（養子にもらはれたる家）○嫡出（其の家の正當なる嫡妻より生れたる子）○獨立の生計（他人の助けをうけずして獨り立にくらしをたてゝゆくこと）○成年者（滿二十年に至つたるもの）○親權（親の權利）○服す（したがふこと）○懲戒（いましめこらすこと）○未成年（滿二十年に達せざるもの）○監護（まもりそだてること）○教育（をしへみちびくこと）○職業（すべての業務）○營む（おこなふこと）○許否（ゆるしたりまたはゆるさなかつたり）○財產（しんだい）○管理（とりしまりをすること）○種々（さまざま）○心神喪失（精神病などにかゝりて精神のくるふこと）○禁治產（財產を治ることを禁すると云ふ即ち心神喪失の狀況に在る者には本人の配偶者四親等內の親族戸主、後見人、保佐人または檢事の請求により裁判所は此宣告をなすことを得、此宣告をうけたるものを禁治產者といふ）○宣告（いひわたし）○後見人（うしろみとなつて其の人になりかはりことを

（さる人）○諸般（すべてのこと）○行爲（おこない）○貲力（財産のちから）○療養（病氣の治療）○看護（みとり）○相續（家のあとつぎをすること）○説明（ときあかし）○家督相續（戸主の死亡せし後を相續すること）○遺産相續（死に絶えたりなどした家を相續すること）○親等の遠近（一親等は最も近く二親等これに次き三等四等と順次遠くなるが如し）○長幼（年のたけたるものを長としをさなきを幼とす）○順序（とゝのひたるしだひ）

四　歐羅巴と米國

我國人（我が日本の國の人）○米國（北米合衆國を云ふ）○巡遊（あるきまはりて見物すること）○歐洲（ヨーロッパ）○前者（米國をさして云ふ）○進歩（物事よくすゝんでゐること）○測り知られざる（容易に推測することのできぬ）○反し（ふりかはつて）○後者（歐洲をさして云ふ）○因循（おしきつてする勇氣なく物事になづむこと）○守舊（昔からのしきたりをまもること）○傾き（かたよること）○一瞥し去る（一目ちよつと見てとほりすごす）○然るに（さうであるのに）○巡覽（見物してあるくこと）○殺風景（秩序無くおもむき無くとりみだしたるやうなるさま）

○亂雜（とりみだしたること）○何の稱すべきを見ず（これと云つてとりたてゝほめるほどのものを見ぬ）○匆々（さつさと）○通過し去る（とほりすごしてしまふ）○均しく（同じやうに）○文物（文明の諸物）○觀察（物事によく注意して見あきらむること）○しか（さやうに）○全く（すつかり）○相反す（たがひにちがふ）○免れざる（のがれぬ）○蓋し（おもふに）○自ら（しぜんに）○其理なくばあらず（其のだうりがなくてはならぬ）○外遊（外國に行くこと）○まづ目に入るは（第一番に目に見えるものは）○家屋（いへ）○宏大（非常に大いなること）○機械（機巧により自然力を結合して成る道具、最初其運動の力を誘導するのみにて動力傳はり自ら各種のはたらきをなすしかけのもの）○應用（其の場合にしたがひ其の物事によりさまざまにはたらかし用ふること）○遍き（よく行き渡りて居ること）○仰望（あふぎ見ること）○巍々（高く聳えたるさま）○天を摩せんとす（天を撫ですらうとする）○意外（おもひのほか）○遙かに（とほく）○感ぜざらんや（思はねであらうか）○裝置（しかけ）○屠畜場（牛豚などをころすところ）○豚○屠り（ころして切りわけること）○罐詰（肉類又は菓物などを罐に詰めて中の空氣を抜きとり永く保存し得るやうにしたるもの）○規模（しかけ）○一個一個（ひとつひとつ）○撲殺（うちころすこと）○皮剝ぐ

（度をむくこと） ○相距る ○驚き ○優り ○劣れる ○彼れの甚だ優り（米國のひどくまさり） ○此の甚だ劣れる（歐洲のひどくおとつてをる） ○念はざらん ○一私人（會社などでなく唯のひとりだちの人） ○シカゴ（北米合衆國有名の都府のあるところにてミシガン湖畔にあり穀物、家畜、木材の商業甚だ盛なる地なり） ○カーネギー（米國の鐵工王として人の知る大富豪なり尚詳しくは巻の六第二十一課カーネーギーの青年時代の處を見よ） ○製鐵場（鐵を製する工場） ○一覧（ひとたび見ること） ○クルップ式武器製造場（獨逸エッセンのクルップ鋼鐵工場のことにて世界に有名なる工場なり工主、アルフレッド、クルップが其の父フリードリッヒの業を襲ぎて擴張せるところなり。我國にても、これまで幾多の武器を同處に注文せり、クルップ式砲は元込にて砲身はすべて鋼鐵にて造れり） ○費府（費は費羅の註字、府は府縣の府なり、北米合衆國ペンシルヴアニア州の首府にて北米第三の都會） ○ボルドウヰン車輪製造場（世界に有名なる機關車製造場にて我國鐵道にてもこゝに注文して買入れしもの少からず） ○雄大（さかんに大いなること） ○ブルクリーン橋（ニューヨークと其對岸のブルックリーンとを聯絡してホドソン河上に架したる大鐵橋にて壯觀世界第一と稱す） ○眺望す（遠方を見渡すこと） ○判知す（判斷して知る） ○淨水（飲用に供する清水） ○熱湯（にゆ） ○供給（そなへあてがふこと） ○遍く行き亘れる（ひろく行きとゞいてをる） ○アイスクーム（牛乳と玉子とを氷らしたるもの譯して氷乳、または氷菓子といふ） ○刻々（其のときどき） ○配達（くばりとゞけること） ○百般の（一切の） ○意の如く（おもひどほり） ○總じて（すべて） ○物質的進歩（有形の物體上の進歩、即ち無形の精神的進歩に對していふ） ○高潮（極點または極度といふにおなじ） ○達する（とゞくこと） ○想見（かんがへて見ること） ○顧みて（ひるがへつて） ○大都會（大いなるみやこ） ○比較（くらべること） ○小規模（ちひさきかまへ） ○靜寂（しづかにてさびしい） ○倫敦（英國の首府） ○煤煙（すゝけぶり） ○有名（名だかいこと） ○特に（ことわけて） ○不思議（あやしいこと） ○況や（まして） ○都市（みやこ） ○エレヴエートル（西洋の家は普通五層六層にて米國の家屋は三十階を越ゆるものあり、故に水壓力によりて、階段を上らずして直ちに階上に至る仕掛ありこれを米國にてエレヴヘトルといふ昇降機と譯す） ○速に ○リフト（米國にてエレヴエートルと云ふものを歐洲にてリフトと云ふ同一物なり） ○緩漫（のろいこと） ○推知（おしはかり知ること） ○大學（最高等の學術を研究する學校） ○專門學校（專門に學科を修める學校） ○財産の總計（大學及び專門學校の財産の總計を云ふ） ○收入（とりいれだか） ○九回（九遍） ○何地 ○色刷（彩色を施したる印刷をいふ、我が國の報知新聞などの如きものをいふ） ○觀光者（他國の文物光華を觀察するをいふ） ○會す

る　○察せしならん（知つたであらふ）

五　笑話二則

一　ペンシルバニア

駐れる　○米人（アメリカ人）　○朝疾く　○挨拶（返辞、應答、また單に會釋すること）　○うち覺（ハツキリと覺えたるにあらず、ぼんやりと覺えてあること）　○おもひあやまれる（思ひちがへしたる）　○澄し顏（まじめなかほつき）　○オハイヲ（ペンシルバニア州の隣の西部にパニア州にして北米中最も豐饒なる土地にして穀物の產多し）

二　橫濱尾上町

絕えて久しき（わかれてより永く久しくなれる）　○知人（知り人、知り合の人）　○ふと（ふいと）　○町名（まちの名）　○五十許（五十才ぐらゐ）　○唐突（だしぬけ）　○一旦は（いちどは）　○ごつと（急に大聲にて笑ふさま）　○失笑（わらひだすこと）　○百人一首（小倉百人一首の略、藤原定家卿が出家の後、文曆二年五月中院入道宇都宮賴綱（爲家の父）の依賴を受けて百人一首を色紙形に書き爲家に托して贈られたるを入道これを中ノ院の障子に貼りしものなりといふ）　○稍手がかりありと（すこし尋ぬるたよりがありと云ふて）　○隅なる　○若者　○最前より（さきほどから）　○猿丸大夫奥山の（猿丸太夫は其の傳詳かならず、されど攝津國菟原郡深草鄕の人にて後近江國瞽東山中に隱れし人なりと云ふ　和歌は古今集によみ人しらずとして出たり、奥山にもみぢふみわけなくしかのこゑきくときぞ、秋はかなしきとあり）　○暫く　○前中納言匡房（信濃權守大江成衡の子、博學絕倫朝典に通ずるを以て稱せらる官權中納言となり後太宰權帥となる世に江帥と稱す）　○高砂町でせう云ふ（百人一首にたかさごの、をのへのさくら、さきにけり、とやまのかすみ、たたずもあらなんとあり）　○首傾けたる（首をかたふけて聞て居たること）

六　臺灣人の風俗

土番（其の土地にすまひしてゐるやばんじん）　○熟蕃　○生蕃　○風化（風俗の感化）　○衣食住（着もの食もの住ひ）　○聊か（すこし）　○未開（まだひらけぬこと）　○野蕃人（文明の化を受けて居らぬ人民）　○蕃族（野蕃人の種族）　○體幹長大（からだがおほきい）

○顔面（かほいろ）　○銅色（あかがねいろ）　○其性（其性質）　○殘忍（むごたらしきこと）　○生命（いのち）　○絶頂（山のいただき）　○衣服（きもの）　○布　○膝掛　○胸　○背　○鹿皮　被へり（かぶせつつむこと）　○殘酷（慘虐なること）　○毎歳（まいとし）　○人頭祭（人の首を陳列する祭）　○推知（おしはかりしること）　○部落（其場所の一區域）　○髑髏（されかうべ）　○齎し來て（もってきて）　○展覧會（ならべて人に縦覧させること）　○優劣（まさりおとり）　○優等者（すぐれてゐるもの）　○賞與（はうび）　○臺灣征討（明治七年臺灣牡丹社の蕃民琉球の民を殺害せしにより、我朝之れを清廷に迫れども埒あかず、よりて西鄕從道をして兵を率て臺灣を討たしめ、この結果として琉球は我が版圖に入り、藩王は藩主となり、尋で藩を廢して縣と成し、舊藩王を侯爵させられたり）　○精悍（わるつよきこと）　○軀幹（からだ）　○短小（せひくゝしてちひさいこと）　○溫和（おとなしきこと）　○脚絆　○胸當　○寒冷の候（寒い時節）　○牛皮（うしのかは）　○會長（かしら）　○手腕（うで）　○手甲（てのかふ）　○手指（てのゆび）　○入墨（ほりもの）　○儀式だちたる（儀式のやうな場合）　○花毛氈　○長衣（ながいきもの）　○農耕（農業なすること）　○漁獵（漁業、または山の獵）　○鐵工（鐵のうちものなすること）　○銀工（銀細工をすること）　○爭鬪（たゝかひ）　○深林の中（深く繁りたるはやしのなか）　○豫め（まへかたより）　○使者（つかひ）　○竹竿（たけざを）　○槍の穗（槍の身）　○すげ（つけること）　○鐵欄木質（鐵製のつかの木製のかたちを云ふ）　○反身の刀（みねの方にそりかへりたるかたな）　○提げ　○箭を放ち　○入り亂れ（敵も味方もまじりあうて）　○散々に（非常に）　○双方（りやうはう）　○死傷（死したるものや負傷したるもの）　○勝敗を決す（まけかちをきめる）　○敗　○償物　○和解（なかなほり）　○東海岸（東の海のきし）　○諸部落（諸處の村々）　○散在せり（ちらばってゐること）　○周圍（家のめぐり）　○牆壁（かこひのかべ）　○築く　○一圍（ひとまはり）　○壘壁（とりで、またはほうだい）　○樹林（はやし）　○竹籔（たけやぶ）　○繞し（まはらせて）　○來襲（せめてくること）　○備へたり（用心にかまへてあり）　○海面（うみのうへ）　○險しき　○巖石　○通路（かよひみち）　○近傍（近まはり）　○巨木大石（大きなる木または大きなる石）　○積めり（つみてあり）　○轉下して（ころがしおとして）　○防禦（ふせぐこと）　○常人（たゞのひと）　○平地（ひらち）　○動作（はたらき）　○輕捷（みがるなること）　○殆ど（ちやうど）　○猿猴（さる）　○物の迷深

く（さまざまに迷信することがひどく） ○夜半（よなか） ○遠吠（遠き處にてほえる聲） ○家内（いへのうち） ○死者（しぬるもの） ○僧を請じ（和尚をまねきて） ○祈禱（いのりをすること） ○旅行 ○途中 ○くさめ（くしやみ、またはくしよんのこと） ○凶事（わるいこと） ○兆（きざし、または、しるし）

七　樟腦

樟腦（無色透明のかたまりにて一種特別の香りのあるものなり） ○本邦（日本をさして云ふ） ○特產（他の國には無くして日本にのみ特別にできるものを云ふ） ○重要なる（おもなる） ○輸出品（外國へおくりだすしなもの） ○產地（できるところ） ○暖地（あたたかいところ） ○海外（外國をいふ） ○樟の幹、根、枝、葉（樟は樟科の常綠木本にして、葉は稍楕圓狀卵形にして、花は帶黃色にて小く、實は豌豆大にして黑熟す蠟をとるべし材は淡黃色にて堅實なり、船材器具建築の料に適す） ○結晶（液體のものなどが天然一定の法則に從ひてある形をなしてかたまること） ○芳香（よきかをり） ○上枯、中枯、山方、再製 ○乾燥（かわくこと） ○上等品（すぐれてよいしな） ○儘 ○普通（あたりまへ） ○分離（わかれること） ○製法（つくりかた） ○蒸溜釜（蒸して蒸發し易き液體を、蒸發し易からざる液體より、分離せしむるにつかふかま） ○冷却釜（ひえるやうにかけたかま） ○桶 ○据ゑる ○桶中（をけのなか） ○樟樹（くすのき） ○充して（つめて） ○上側方（うはがはのかた） ○竹管（たけのくだ） ○蒸氣中（むされてたつ氣のなか） ○水面（水のうへ） ○凝固せしむ（かたまらせる） ○善良（よきこと） ○差異（ちがひ） ○効用（きゝめ） ○香料（にほひものたね） ○頗る（ひどく） ○防臭劑（くさみをとめるくすり） ○醫藥（醫者のつかふくすり） ○近來（ちかごろ） ○無煙火藥（軍用銃につかふものにて發射しても煙のでぬくすり） ○セルロイド（火綿と樟腦との混物にて、少しく濕度を高むるときは彈性をまして任意のかたちをなすべし、冷却すれば再び堅硬となる、これを人造象牙または人造ゴムと稱し種々の裝飾品を製出す）

八　森

かたみに上にいでんとす（かたみは互になり、木と木と互に天上高くそびえ出んとて、きそひあがるさまなり） ○天つ光を身にうけて（太陽の光線を身にうけてなり） ○ゐみはこりたる下かげに（高き木が太陽の光線をうけて、發育して榮ひはこりたる其のしたかげに、といふ義なり） ○惠

にもれて（太陽の光線の恩澤を受くるをもれてなり）○今もかも（いまかといふに同じ）○枯れんとすなる（枯れかゝって居る）○繁きさはりにさへられて（樹木の繁茂して居るしげりのためにさへぎられての意）○あらしの風をよそにして（暴風などを更におそるゝこともなくよそ〱しくしての意）○靜にねぶる老木あり（更に風の吹くことにもそれほど心配なく靜かにねぶったやうなる風をしてたって居る老木にある）○あだし梢（他の梢の意）○時得顔（我れこそ好時機を得たれとほこりがほなる樣子を云ふ）○われとのぼらん力なみ（自分ひとりの力がないによつて）○よそにかゝれる（他の梢などによりかゝってをるを云ふ）○かつら（つる草の總稱なり）

九　櫟實と栗子

天氣晴朗（天氣のよくはれたること）○櫟實（櫟は喬木にて、幹に凹凸多く、葉は末廣くして尖り、厚くして粗き鋸齒なり、實はドングリと稱す、大木なれども用材に適せず薪として佳なり）○栗子（栗は喬木にして材は種々の用材となる、實は味美にして食料に供せらる）○大嫌 ○もぐり込む（くゞりこむといふがごとし）○殘念（くやしい、まだのこりをしい）○左樣（そのやうに）○達者（健康におなじ）○立派 ○燕 ○此間（このごろ）○むしのよい

話だ（大層ないひかたなり）○高慢らしくて（じまんらしく）○なんだと（怒をふくみて詰問するなり）○太洋 ○宿る ○微笑をたゝへ（にこにことわらって）○聲高に（こゑたかくして）○呉れて ○適宜に（ほどよく）○無事息災（身に何事の障りのなきこと）○直ぐ芽を出し ○擴げ ○幸福（さいはい）○得意なる色なり（心に滿足して喜び居る顔色なり）○傍なる（そばにある）○小孔（ちひさいあな）○栗鼠（嚙齒動物にして、多く木棲し果實を食す、キ子ズミとも云ふ）○躍り出で ○可愛き ○携へ行く（もって行く）○嘲り ○眺め ○勤勉（つとめはげむ）○格別（べつだん）

※

十　森林の功用

吾人（われわれ）○諸造作（もと天井床の間戸棚等をつくるをいひしが、今は疊建具等をもいふなり）○戸障子唐紙（唐紙は元來唐紙障子といひ障子はあかり障子といひしを、今は皆省きていへり）○纖維（すぢ）○書齋（書をよみ物をかくにつかふ部屋をいふ）○埋沒（うづもれること）○調理（料理すること）○森林に負ふ所（森林のために利益を得る所）○清淨なり（きよらかなり）○植物（木や草を云ふ）○動物（いきもの）○放散（發しちら

（おこすこと）○呼出す（ふきだす）○吸入す（すひこむ）○吸收す（同上）○緩和（ゆるやかにすること）○效あり（きゝめがある）○人生の健康の爲め（人のからだをやしなふため）○缺くべからざるものなり（かけてはならぬ物である）○必要（かならず入りようなること）○文明國（文化の開けたる國）○保護（かばひまもること）○養成（やしなひそだてること）○生長（おひたつこと）○徐々たる（そろ〳〵とすること。しづかなること）○伐り仆す ○一朝の事（一旦のこと）○策（はかりごと）○講ずる（はかる）○缺乏（不足になること）○自然の結果（しぜんのなりゆき）○濫伐（みだりにきること）○洪水（おほみづ）○災 ○傳り ○點々滴々（ぽたぽたと地におつるさま）○苔を濕し（こけをぬらし）○溪流（たにがは）○氾濫（大水の横さまにながれあふるゝをいふ）○憂（しんぱい）○禿山（草木のはえて居らぬ山）○奔下し（はしりくだり）○下流に臨める村落（川下の岸にある人家の群り居るところ）○災害（わざはひ）

十一　植物の感覺

○合歡（荳科に屬する木本にて二回羽狀複葉をなし、小葉は夜間に相合す、花は恰も細糸を集めたるが如く、半ば淡紅色なり）○復 ○斯樣に ○夜間（よるのあひだ）○蒲公英 ○著しい現象（あきらかにあらはれたかたち）○葡萄の卷鬚（莖は纒繞莖にて、枝の變じて卷鬚となるものなり）○胡瓜 ○番南瓜（東京にてたうなす、上方にてはぼうぶらうりといふ）○西番蓮（西洋蓮科の草本にて、其の卷鬚は外物の觸接刺擊に感ずる機能すこぶる銳敏なり）○尖 ○固形體（かたいかたちのもの）○極細い ○棒 ○僅か（すこし）○觸接（さはること）○現象（本體に對していふ語にて、即ち本體が吾人の感覺にあらはるゝ外觀をいふ）○銳敏（すばしこい）○遲鈍（のろい）○感覺（もと吾人の感官が、外部の刺戟によりて起る所の最も簡單なる心的現象をいひしものなれども、こゝには植物の感受性をさしたる物なり）○銳い ○絹絲 ○屈曲を起す（まがりを生じてくる）○弦に ○豌豆 ○蠶豆 ○芽生（芽の出て間のないもの）○眞直 ○傷つけぬやう（いためぬやう）○木栓（櫟屬の樹皮にて強力ありて輕し、壜の口栓となす）○地平の方向（地面のかた）○屈折する（まがる）○反對（うらへら）○實驗て見る（實地にためして見ること）○薺（十字科の草本にて、白い花を開き、軍配扇の實を結ぶ、嫩葉は食用とすべし）○蕓薹（ナタ子トともいふ、三月黃花を開き芳氣高し、葉は食用とす、實より油をとり、食用または、燈用に供す、刀劍に塗りて銹を落すべし）

十二　樺太

樺太島（薩哈連島と稱し、南北に長き大島なり、全島山多く我が東北の地體を構成する樺太山系の起る所なり、本島は寛政年間始めて間宮倫宗の探險せし所にて、大陸との間を間宮海峽と名づく、沿海は水族に富み、内地は森林茂り、石炭石油の産出多し、南端のアニワ灣頭にコルサコフ港あり、島廳の所在なり）　○經營（經は繩張りして物を度るをいひ營は營みつくるをいふ、こゝは轉じて治め營む意なり）　○占め　○樹木鬱蒼（木がおひしげりたること）　○山腹（山のなかば）　○沼澤地（ぬま地）　○苔蒸し（苔のはえたること）　○まばら（ばら〳〵として、よくしげり居らぬさま）　○荒涼（物凄き程に茫々として草木の生ぜざるさまにいふ）　○繞らせる　○參差（均しからず、また亂れたるさまにいふ）　○天を衝き（天にとゞかんとするさまにいふ）　○樅（二千尺以上の高地に生ず、葉尖二分し若きときは人を刺し、樹皮灰白色にて、滑なり、老年に至れば樹皮黑褐色となり、龜裂を生ず、實は長圓柱狀にて三寸徑の大形なり、材質輕軟、反張伸縮甚しく建築用に適せず、天井板、障子框等となす）　○檜（松柏類に屬し、木曾五木の一に居り、杉と共に建築船舶橋梁等の用材としそのあたひ杉の二倍に及ぶ）　○白楊（筐柳（ハコヤナギ）のことにて楊柳科に屬し、山野に生ず、材は柳行李などを作るに用ふ）　○楡（寒地に生ずる木本にて、春花開きて後葉出づ、葉は椿に似て短く、幹の外皮を藥用とす）　○瑞西松（一名しもふりごえふまつといふ芳香ありて樹脂多く一種の材は細密なる條理あり彫刻用、または裝飾器具とし、實は食ふべく、また松香油を製すべし）　○山椈（山毛欅科の木本にて喬木なり、葉は卵形にして薄く下面に多數の毛あり、樹皮黑色なり、木材は種々の用に供せられ、果實も亦食用に供せらる）　○尠からぬ　○馴鹿（北極地方に産する鹿の一種、角大にして曲り、且つ枝不整なり、北極の民はこれをして橇を牽かしむ、雪下の植物を食して生活す）　○黑貂（黃鼬（テン）の一種なり）　○水獺（池端の孔中に棲み夜間出でゝ魚を捕食す）　○重要なるもの（おもなるもの、大切なるもの）　○礦業（鑛山を採掘する事業をいふ）　○良好（よきこと）　○所在（ところどころ）　○國家の一富源（國のひとつのとみのもと）　○産業（産物を生ずる業物）　○漁業　○世界に冠たり（世界第一なり）　○鰊（體形長一尺ばかりにて背部藍色、腹部銀白色、鱗は大柔軟にして剝げ易し、北海道沿岸に多く産し、産卵期には海岸近くに來れども、常は深海に棲息す、其卵はカズノコなり）　○鮭（東北の河海の間に産する魚なり、鱒に似て大いなるは三尺以上に達す、味美なり）　○鱒（形鮭に似て小く、東北海岸の間に産す）　○鱈（北海道に多く産する軟鰭類の魚なり形鱸に似て顎口共に大く、長三尺餘に達す）　○一偉觀（ひとつのみもの）　○盛況（さかんなるありさま）　○昆布　○海驢（形ち、及び習性甚だアザラシに似たる鰭足類にて體長二間餘に達す、外形アザラシと異なる點は前肢更に鰭狀をなして長く後肢は尖端に爪を有することなく一二寸内方に點在し、外耳發達し、動すことを得るなり、東南海の水中に群居し、鳴聲鹿の如し）　○海豹（鰭足類に屬す、全身白く、黑斑光澤ある毛に蔽はれ、北海道千島等に産す、常に水面を游泳し時々海濱岩礁に上りて身體を日光に曝す、性柔順よく人に馴る魚介を常食とす、哺乳獸にて海中を遊

息すれども水を呼吸して生活する能はず　○膃肭獸（オツトセイ）有名なる食肉類にして千島近海に多し、外耳現れ、四肢游泳の用をなすと共に歩行にも適す、身長六尺以上に達するものあり、背毛軟き故毛皮極めて珍重せらる　○鯨（クヂラ）海洋中に棲息する哺乳類にして大さ五間乃至十間以上に及ぶ、常に海底の洞穴に棲み、時として海上に躍り出で潮を吹き船を覆することあり　○財源（ザイゲン）たからのもと　○嚴冱（ゴカン）寒氣の甚しきを云ふ

十三　鷲狩（ワシガリ）

○多少（タセウ）いくらか　○鷲（ワシ）（性最猛く、形甚大なり、翔と背とは黑くして、白き斑あり、腹は白くして竪に黑斑あり、視力鋭く、飛翔力亦絶大なり、多く高山の老樹、或は岩礁の間に巣を作る）　○勘察加（カムサツカ）（我が國千島の北方に當る半島にて露領なり、氣候寒烈なり）　○通路の衝（ツウロ シヤウ）（とほり道の行きあたるところ）　○庵（イホリ）（ちひさき家）　○隱れ家（カクレガ）　○獵運（レフウン）（獵のしあはせ）　○翼（ツバサ）　○羽翮（ウカク）（はねのことなり）　○もんどりを切て（キツテ）（さんぼがへりをして）　○翼骨（ツバサボネ）　○嘴（クチバシ）　○惡烈（アクレツ）（わるくはげしいこと）　○格鬪（カクトウ）（打ちあひたゝかふこと）　○肋骨（ロクコツ）の罅隙（カゲキ）（あばらぼねのあひだ）　○鬚髯（シユゼン）（鬚は鼻の下のひげ、髯はおとひげなり）　○眉毛（マユゲ）　○睫毛（マツゲ）（まつげ）　○兩翼（リヤウヨク）（兩方のつばさ）　○差當り（サシアタリ）（其時に當て）　○勞を醫する（ラウ イ）（つかれをなほす）

十四　蘇武（ソブ）

蘇武（ソブ）　蘇武字は子卿漢の武帝のとき中郎將を以て匈奴に使す、單于之を降さんと欲し、大窖中に幽して食を與へず、天雪をふらす、武臥して雪と旃毛とを齧みて之を咽む、數日死せず、匈奴以て神となし、乃ち之を北海の上にうつし羝を牧せしめ、羝乳せば歸らしめんと云ふ、昭帝立ち匈奴漢と和す漢武を求む、匈奴詭りて武既に死すといふ、常惠漢の使者にをしへて言はしむるには、天子上林苑に射て雁を得たり、足に帛書を係く、曰く某の澤中に在りと、乃ち其の言の如くせしかば、單于驚すこと能はず是によりて歸ることを得たりとあり　○颯々（サツ〱）（風の吹く音の形容）　○おもき君命（クンメイ）いたゞきて（大切なる君の命令をうけて）　○聞く物（キクモノ）の音も見る色（イロ）も（耳に聞くすべての物の音も、目に見るすべての物の色も）　○故郷（コキヤウハ）母あり雁（カリ）鳴（ナ）きて老（オイ）の寢覺（ネザメ）やいかならん（故郷には年老たる母親がある、よる雁が鳴いて渡る聲に母親が目をさましてどんな考をしてをるであらう）　○よしや（たとへ）　○草枕（クサマクラ）（旅と云ふ語に冠ぶせていふ語、昔し今の如く、宿屋の自由を得ざりし故、行くさきに野宿することもある其時は草を結びて枕として宿ることあるより云へるなり）　○旅寢（タビネ）の空（ソラ）に果（ハ）つとても（旅行中に死ぬとも）　○君命重く（クンメイオモ）身は輕し（カロ）（君の命令は重くして、吾が一身は輕しとなり）　○かうと（斯くとのこと）　○國書の　○つぶさに（くはしく）　○面接して（メンセツ）（あひて）　○國書（コクシヨ）（國王より、他の國王に遣す書面）　○非道（ヒダウ）（道にはづれたる行ひ）

旨意は聽されざ（國書の中に言つてある事がらは承諾はせざれどもの意） ○單身（ひとりみ） ○召しよせ（呼びよせて） ○しかあらば（そうであつたなら） ○荒山（おく山） ○幽閉（とぢこめゐること） ○頃しも（ちやうど其の時） ○寒さ膚をつんざけり（寒氣が身にしみてからだがつきさくやうな） ○怖れ ○こたび（このたび） ○雄羊孕 ○放免せん（ゆるさう） ○あざけりぬ（もてあそびたり） ○覺悟（決心におなじ） ○無念さに（口惜しさに） ○もなか（最中の意） ○せめてはかくと（たとへかへられずと命ながらへてあるといふことだけは） ○雁に托せし筆の跡（雁にことづけし手紙） ○雁の使（雁に手紙をことづけしことを云ふ）

⁂

一五　石炭瓦斯（二）

天然（しぜん） ○作用（はたらき） ○人を驚したることは内外に珍しからねど（石炭瓦斯の天然に出る處我國にては越後の七不思議の一、また歐米の國にもあり） ○人工（人のたくみによりてなること） ○實用（實際の用にそなへること） ○英國コルンオール（英國イングランドの西南にありて、大西洋に面す、山谷多くして豐饒ならざれども礦物に富めり） ○ウヰリアム、ムルドック（英國の一技師にて、其弟子のクレーグと云ふものと共に、始めて多量の石炭瓦斯を製して其の工場に用ひたり） ○有害無用（害あつてやくにたゝぬこと） ○雜物（まじりもの） ○清淨（きよらかなること） ○概要（あらまし） ○説明（ときあかし） ○直徑（さしわたし） ○耐火粘土（火にこらへるねばつち） ○レトルト（粘土製の圓筒にて中に石炭を入れ、下部より熱して、瓦斯を發生せしむるための器なり） ○竈 ○安置し（すゑて） ○蓋 ○焚けば ○分解（わかれること） ○自ら ○鐵管（鐵のくだ） ○ハイドロリック、メイン（瓦斯を冷やし且コールタアの一部を除去するために用ふる鐵球状の器にて中に水を盛るものなり） ○水管（水のくだ） ○水樋 ○無數（かずの多き） ○新生の瓦斯（あたらしくできた瓦斯） ○空所（からのところ） ○コールタア（或は單にタアルとも稱す、石炭を蒸燒する際に生ずるものなり） ○漸次（だん〱） ○通過して（とほりぬけて） ○冷縮器（ハイドロリック、メインより來れる瓦斯を更に冷卻して中に含めるコールタアの全部を除去する器なり） ○裝置（しかけ） ○大概（あらまし） ○アンモニア（はげしき刺戟性の臭氣ある無色の瓦斯にて強き苛味を有せり） ○排送器（瓦斯を排出するために用ふるポンプの一種なり） ○一段（一層と云ふに同じ） ○貯溜庫（精製せられたる瓦斯を貯藏する大形圓筒狀の器なり） ○急遽（いそぎたゐること） ○狹道（せまきみち） ○進行（すゝみかた） ○遲々たる（ぐづ〱してゐそい）

○抗抵（はりあひ）○壓力（たまへるちから）○炭素（無味無臭の瓦斯にて常温にては不活潑の性質を有し、他物と化合する性なし、高温度にては窒素硫黄等と化合し、殊に容易に酸素と化合し、二酸化炭素瓦斯を生ず）○ガスカアボン（瓦斯炭と云ふに同じ、石炭瓦斯を製する時にレトルトの上部及び側部に附着するものにて極めて純粹の炭素なり）○發生次第（できしだい）○猶豫なく（ぐづぐづすることなく）○ポンプ（空氣の壓力を利用し、下方の水を上方に移すに用ふる器にて吸上ポンプ、押上ポンプの二種あり）○均勢（いきほひを平均すること）○調和（やわらげとゝのふること）○構造し（つくりたて）○動 ○全行路（瓦斯のとほる全體のみち）

一六　石炭瓦斯（二）

洗淨器（水を入れたる管狀の器にて瓦斯中に含めるアンモニアを除去するための器なり）○清淨器（瓦斯中にふくめる炭酸瓦斯と硫黄化合物とを除去するに用ひ石灰と酸化鐵とを盛れる器なり）○コークス（骸炭と譯す、輕鬆にして石墨の如き光澤あり燃せば火力強く高熱を發す故に鋼鐵などを溶解するに用ひ又石炭木炭に代用するなど用途多し）○酸化鐵（鐵屑と硫黄の花とを混和したるもの常温にありて水中に放ちおくときは數日にして化合す）○本仕上 ○窒素（空氣中の一成分となりて其の五分の四を成し、又他の元素と化合して、動植礦の三界に多量に存在する無色無味無臭の瓦斯にて、動植物の生活又は物體の燃燒を保存する性を有せず）○さに非ず（さうでない）○夥しく ○量（かさ）○作業（しごと）○拂底（少なきこと）○用意（用心に同じ）○肝要（たいせつなること）○事かはり（ちがつて居て）○構造（つくりかた）○鋼鐵板（はがねのいた）○槽 ○恰も（ちやうど）○肺量器（肺のちからをはかる器）○蓋は其丈一杯（蓋は其の蓋のおかま一杯）○導管（ひきだすくだ）○重壓（おもくおすちから）○末端（すゑのはし）○炊事（めしをたくこと）○煮炊（料理をなすこと）○世帯（くらし）○低廉（やすれ）

一七　東宮殿下の御逸話

かしこくも（おそれ多くも）○聰明（すぐれてかしこきこと）○克己（自分の心をおさへること）○いとゞ（甚だしく）○忝くこそ覺ゆれ（恐れ多く思はるゝことであるよ）○殿下（皇太子を始め奉り、下諸王に至るまでの尊稱なり）○保育の大任（かしづきなる職の重き役目）○いと（甚だ）○例により（いつものしきたりにより）○曉ふかう（まだ夜のあけはなれぬうちに）○參内（大内へ參ること）○宿直（とま

（りはん）○仕人《ツカウド》（宮中の御用をつとめる小役人）○眼《ネム》たげ（ねむさうなる）○打守《ウチマモ》り（うちむかふと云ふが如し）○寒《サム》さをかこち居《ヰ》る（寒さをうらみ居る）○寒空《サムソラ》（さむきそらあひ）○御起床《ゴキシヤウ》（ねどこをはなれて起き出であそばさるゝこと）○準備《ジユンビ》（ようい）○心落《コヽロオ》ちつき（安心して）○身《ミ》を切《キ》るやうにて（寒さがつよくて身がきれるやうなるさま）○攻城野戰《コウジヤウヤセン》（城をせめたり、野原にてたゝかひたりすること）○凜烈《リンレツ》（非常にはげしきこと）○焚火《タキビ》○跨火《マタビ》（火をまたぎて暖をとること）○俗《ゾク》に云《イ》ふ（普通にいふ）○あるは（或ひは）○習《シフ》慣《クワン》（ならはし）○曙《アケボノ》（夜のしらしらとあけること）○威嚴《ヰゲン》ある（おごそかにして位のある）○おのゝかざらん（ふるへないであらうか、ふるへなくてはおられぬ）○最敬禮《サイケイレイ》（最上の敬禮）○微笑《ビセウ》を含《フク》ませられ（にこにことわらひなされて）○うなづかせられ（首をふり承知せられて）○しかと（さやうに）○憚《ハヾカ》るところなく（遠慮することもなく）○目送《モクソウ》（みおくること）○依然《イゼン》として（もやえとして、もとのまゝ）○愼獨《シンドク》の德《トク》（ひとり居るときにも、其身をつゝしみ、道にそむかぬやうにすること、禮記に、故に君子は其獨を愼むとあるより出づ）○言行均《ゲンカウヒト》しからざること（口にいふことゝ、身に行ふことが、同じからぬこと）○かしこみ居《ヲ》れり（恐れ入つて居た）○紺天鵞絨《コンビロウド》（天鵞絨は西班

牙語なり、絹織物の名にて、もと西洋より渡來のもの、よこいとに銅線を添へ織り上げて拔き去れば、たて絲わなをなす、そのわなをきりはなちて毛を立たせたるものなり）○捕弼《ホヒツ》の任《ニン》（臣下が、其の主君を助け奉る任務を云ふ）○穩《ヒソ》かに ○氣《キ》づかひ（心配して）○ものする（國語にては、さまざまにつかふことばなるが、こゝにては、奉るなどいふ意なり）○凜乎《リンコ》としたる御《ミ》けしき（おごそかなるごやうす）○御《ミ》氣色《ケシキ》たゞならぬ（ごやうすが常とはちがうて居る）○御《ゴ》感動《カンドウ》（御心のうごくこと）○原因《ゲンイン》（ことのもと）○探究《タンキユウ》（さりしらべ）○心《ココロ》を注《ソヽ》ぎぬ（注意をした）○堆積《タイセキ》（つもりたること）○御課業《ゴクワゲフ》了《ヲハ》らせられて ○還啓《クワンケイ》（おかへり）○陪乘《バイジヨウ》（おともをしてともに御車にのること）○かの御詞《ミコトバ》の身《ミ》にしみて（さきのおことばが心にしみわたりて）○打萎《ウチシヲ》れぬ（しよげかへつた）○怪《アヤ》しみて（不思議におもひて）○隈《クマ》なく話《ハナ》し（殘ることなく語りて）○不肖《フセウ》（拙者と云ふに同し）○大職《タイシヨク》を奉《ホウ》じながら（おもい役目をうけたまはりながら）○不德《フトク》（德の及ばぬこと）○躬行實踐《キウカウジツセン》（學びたることゝ、知りたることを身自から實地に踐み行ふこと）○御訓誡《ゴクンカイ》（おんいましめ）○身《ミ》の措《オ》き處《ドコロ》なし（吾が身體を措く處がない）○謹愼《キンシン》（つゝしむこと）○將來《シヤウライ》（ゆくさき）○再拜《サイハイ》し（最も重き敬禮を行ふこと）○過《アヤマチ》を謝《シヤ》し奉《タテマツ》り（あやまちをたんわび申し上げ）○其《ソ》の筋《スヂ》（其の

罷りの官署、即ち宮内省へなり　○進退伺（官職にある人身にあやまちありし時など責を引いて退職すべきか否かを伺ひ出ること）　○閉門（門戸をとざして、引きこもること）　○罪を待つ（官の處分を受るやうに待つ）　○九重の奥（九重は天子九門と云て九重の門の中、即ち禁裡をいふ、九重の奥と至尊を申し奉るなり）　○朴直（かざりけのなきこと）　○誠實なる精神（まことのこゝろ）　○父母の懐　○世界無類の御國體（世界に類の無き國體、即ち萬世一系の天皇を仰ぎ奉ることを云ふなり）　○叡聖文武（至尊のすぐれて賢明にましまして、文武兩道に達したまへるを申し奉るなり）　○鋭敏（さとくかしこきこと）

一八　サンスシーの宮

○サンスシー（佛語にて恙莫しの義故に譯して莫愁宮といふ、ポッダムの北西に在り、一七四五年より七四年に建造せる、フレデリッキ大王及び、フレデリッキ四世の別宮なり）　○ポツダム（プロシャのブランデンブルグ州に在り、ハーフエル川に沿へる都市にして、人口五萬餘、サンスシー宮、新宮、大理石宮等あり、伯林より汽車一時間程にて達す）　○伯林（普魯西國首府にして獨乙王國の首府にして中央平原レーブレー河畔の水陸共に四通五達の要所を点め、現今世界學術の中心と稱せられ、我邦より留學する人も多し）　○巴里（佛國の首府にして人口二百五十萬、セーヌ河の兩岸にまたがり、市街の清麗、建築の精巧、博物館、圖書館の宏壯世界に冠たり、商業活潑、工業またさかんなり）　○エルサイユ（佛國巴里の西南四里に在り、佛國前王宮のありしところなり、其の宮殿庭園の美、人をして往昔の盛華を偲ばしむ、一八七一年獨乙軍、佛軍を破りて巴里に迫り、プロシャ王維廉一世、この宮殿に於て獨逸帝の冠を戴く）　○離宮（帝王の別宮を云ふ）　○要地（大切なるところ）　○莫愁宮、莫愁園（サンスシーを見よ）　○宮苑（宮殿に附屬せる庭園を云ふ）　○公園（一般の人衆が、遊歩する庭園）　○木戸錢（入り口にてとる入場料）　○やがて（とりもなほさず）　○内外人（内國人、外國人のことなり）　○山莊（別莊と云ふ同じ）　○寺觀（見物すべき寺院）　○中々（ずゐぶん）　○雅びたり（風流にできてあり）　○菩提樹（バンヤントリーと稱す、桑科の植物なり、本邦產榕の如く地上の横枝より氣根を垂れ、先端地に入りて副幹狀をなし、廣大なる樹頭を形成し、一樹の下に數千人を容るゝものあり、印度の山には、一樹にして三百二十の氣根を出し、六百五十坪を領するものありと云ふ）　○フリードリッヒ大王（プロシャ國王フレデリック二世のことなり、王は一七四〇年廿八才にて位につき一七八六年に崩ぜり、この間墺國、露國、佛及び、獨逸聯邦の二三と戰ひ、シレシアを取り、ポーランドを分割し、また戰後の經營に心を用ひて國力の發展をなせり、今日普國が、獨逸聯邦を代表して雄を世界に稱するにいたりしは、全く此の王の計畫に基けるなり）　○なにくれとなく（何といふこともなく、如何なることにても）　○由緒（由來の端緒、また傳へ來りし事がら）　○わけで（とりわけ、特別に）　○めでたかりけれ（けつかうなことである）　○營まれ　○風車臺（機械を運轉しめるために風車をしかけたるもの）　○眺　○目ざはり（遠方見る邪魔）　○農翁（百姓おや

ち

○唯一（たゞひとつ、これにかぎるもの）○陛下（天皇を申し奉つる稱）○全版圖（のこらすの領分）○甘んじて（よろこびて）○そがせんまゝに任せたまはんや（其のする通りにお任せになりますか）○憚げもなく（おそるゝやうすもなく）○言下に悟り（ことばのもとに、すぐさとつて）○いしくも聞えつるかな（殊勝にもよくいふたものかな）○のんきなる性分（心配なく安心にくらす氣まへ）○綽名　○聞えあぐれば（申しあぐれば）○いで（しからば）○國の將に興らんとする（國が盛んにならうとするさき）○禎祥あり（めでたいしるしがある）○文王（昔支那の古公亶父の孫昌、賢にして深く諸侯の人望あり、殷紂王のために西伯に任ぜられ、都を豐（今の陝西省の西安府）に定めて、天下の三分の二を保ち、歿して後、文王と諡せらる、文王は武王の父なり）○積德累世（德をつむことが代をかさねる）○周室を致し（周の天下を興したるをいふ）○新田氏孤忠を以て時利あらず（新田義貞が、他に助けの無きにもかゝはらず、忠義を盡されたれども、時運つたなくして、空しく北越の雪と消した云ふ）○德川氏（德川家康をさせるなり）○ウヰルヘルム（現獨逸皇帝の祖父一七九七年に生る、プロシヤ王フリードリツヒ、ウヰルヘルム三世の第二子なり、一七九七年兄王の病死によりてプロシヤの王位に上り、爾來獨逸諸國の盟主となり、墺太利、佛蘭西等と戰ひ、一八九一年正月ヴヱルサイユ宮に於て獨逸皇帝の位に上る、獨逸帝國最初の皇帝にて、獨逸人は大王の稱號を加へてウヰルヘルム大帝と稱せり）○ビスマルク（一八一五年生れ、伯林ゲツチンゲンに學び長じて政治家となり、技倆をあらはし、一八五九年以東露都に公使となり、一八六二年より巴里の大使となり、一八六六年、一八七〇年度の戰爭により、獨逸帝國を創立せし偉功は知らざるものなし）○モルトケ（一八〇〇年獨逸のメクレンブルグのパヒルムに生る、一八二二年獨逸の軍役に服し、爾後種々の軍功を經て、一八六六年、及び、七〇年の戰爭には參謀總長として獨逸帝國創立の偉功ありし人にてビスマルクと併稱せらる）○君、相、將の世にも稀なる知遇による（君と宰相と將軍とが世にめづらしき知りあひてなれるによる）

一九　神社

○神社（日本古來の神を祭りたるところ）○社格（社のくらゐ）○高位（くらゐの高きこと）○神宮　○伊勢の大廟（伊勢國度會郡宇治山田町にあり、内宮と稱し奉る、五十鈴の川上に鎭り坐す皇宗の大廟にて、天照大神を奉祀し、天手力雄命、萬幡豐秋津師姫を合祀せり、垂仁天皇二十六年倭姫命神勅を受けて、祠を今の處に建て給ひしより始れり）○官幣社（官より祭らるゝ社）○石清水の八幡（應神天皇、神功皇后、玉依姫（神武天皇の母）を祀り、山城國男山鳩ヶ嶺に鎭座せり、貞觀二年六月大和國大安寺の師門行教といふ者宇佐八幡の神託を蒙り、勅許を得て社殿を造營せしに始れり）○上下加茂の社（京都の北部にあり、上加茂社は加茂川附近にあり、別雷神（ワキイカチノカミ）を祀り、桓武天皇奠都以前より

御祠なり、毎年五月十五日祭事あり、又五月五日には有名なる競馬の神事あり、下加茂の社は、上加茂の社より下ること半里餘の處にあり、玉依比賣命、大山咋神を祀り、御祖神社と稱す、毎年五月十五日祭事あ[illegible]、京都の壯麗なり、天武天皇白鳳六年創建の名祠なり

◯松尾（マツオ）京都市の西南部にあり、大山咋神、市杵島姫命を祀れり、和銅元年加茂より近し、大寶元年神殿を創建せり、毎年五月祭事あり

◯平野（ヒラノ）京都市の北部にあり、祭神は日本武尊、仲哀天皇、仁德天皇、天照皇大神の四座なり

◯稻荷（イナリ）京都市の東部にあり、倉稻魂命（ウカノミタマノミコト）素盞嗚命、大市比賣命を祀れり、和銅四年二月午の日稻荷山三の峰に、鎮座せしが永享十年足利義教、山上三の峰より今の地に鎮座し奉れり

◯春日（カスガ）大和國奈良市春日山麓にあり、武甕槌命、經津主命、天兒屋根命、比賣大神の四社あり、神護景雲二年の創祀なり

◯大神（ミワ）大和國磯城郡三輪山（一名三諸山）の西面にあり、又三輪と稱す、大國主命を祀る、神域三百町、鬱蒼たる靈境にて神代以來の神祀なり

◯廣瀨（ヒロセ）大和國廣瀨郡河合村にあり、若宇加能賣命を祀り、天武天皇白鳳四年の創建とす

◯龍田（タツタ）大和國龍田町の端にあり、天御柱、國御柱の二神を祀り崇神天皇の御宇の創建なり

◯出雲大社（イツモノオホヤシロ）出雲國杵築町にあり、大己貴命を祀り、社宇極めて宏壯なり

◯鹿島（カシマ）常陸國鹿島郡宮中村にあり、武甕槌命、經津主命、天兒屋根命を祀る古來有名の神宮なり

◯香取（カトリ）下總國香取郡香取村にあり、經津主命を祀れり

◯古來由緒ある神社（コライユヰシヨアルジンジヤ）昔より、傳はる由來のある社

◯別格官幣社（ベツカククワンペイシヤ）特別に官幣社として扱はるゝ社

◯湊川神社（ミナトガハジンジヤ）神戸市湊川にあり、今の社殿は明治四年の造

◯楠正成（クスノキマサシゲ）左大臣橘諸兄の後裔、幼名は多聞、南朝の忠臣延元元年五月賊將足利尊氏と戰ひ利あらずして湊川に戰死す

會にかゝり[illegible]皆常に多くて有名なる[illegible]の事蹟も此の內にあり

◯新田義貞（ニツタヨシサダ）通稱は小太郎、上野國新田莊の人、元弘の亂に南朝に屬し、北條高時を亡し、又足利尊氏の兵と屢戰ひて勳功最も多し、延元三年越前國へ金ケ崎の城下に戰死す

◯藤島神社（フヂシマジンジヤ）越前國吉田郡西藤島村にあり

◯楠正行（クスノキマサツラ）正成の子、父の遺訓を守りて、賊軍を討伐するを任とし、正平三年正月賊將高師直と、四條畷に戰ひ、利あらずして、弟正時と相刺して死す年廿三

◯四條畷神社（シデウナハテジンジヤ）河內國飯盛山の西麓にあり、明治二十二年創立に係る

◯藤原鎌足（フヂハラカマタリ）本姓は中臣氏、孝德天智兩帝を輔佐し、逆臣蘇我入鹿を誅して、社稷を安んじ能く經國の機務を處理す、天智天皇即位の二年病む、天皇親臨し、內大臣に任じ、大職冠を授けられ、又藤原氏を賜ひ尋で薨す

◯談山神社（タンザンジンジヤ）大和國多武峰の中腹にあり、社殿の宏壯境內の幽邃なること、日光と併稱せらる

◯豐臣秀吉（トヨトミヒデヨシ）幼名日吉丸、後木下藤吉郎と改め、又羽柴氏と稱す、尾張國愛知郡中村の人、[illegible]織田信長に擢られて戰功を立て、後信長の弒せらるゝや、逆臣光秀を亡し、海內を平定し關白太政大臣となる、文祿十九年三月朝鮮を征し、慶長二年再び朝鮮を撃ち、征服するに至らずして薨す年六十三

◯豐國神社（ホウコクジンジヤ）京都市の東部阿彌陀ケ峰の前面にあり慶長四年豐國大明神の神號を下賜せられ、明治十年今の社殿を營みたり

◯德川家康（トクガハイヘヤス）德川初代の將軍、小字は竹千代、源廣忠の第一子、慶長八年征夷大將軍となる、在職二年、元和二年四月十七日薨ず、年七十五

◯東照宮（トウセウグウ）下野國日光山にあり、元和二年始めて宮廟を營み家康の遺命を奉じて久能山より此地に改葬せりといふ、同三年朝廷より東照宮大權現の號を賜る、社殿は壯大華麗光彩燦爛として、その美觀海外に轟く

◯維新後（ヰシンゴ）明治維新ののち

◯殉難戰死の士（ジユンナンセンシノシ）國難に赴き

（てうちじにせし人々）○靖國神社（本書卷の一第十六課就遊館の話を見合すべし）○幣帛（そなへもの）○捧ぐ（神佛に奉るをいふ）○鎌倉の鶴岡八幡（相州鎌倉町雪の下にあり、應神天皇、神功皇后、大仲媛を祀る、康正六年源義朝創建す、元由井浦にありしを、建久二年今の社に遷せりといふ）○鹽竈神社（陸前國鹽竈町にあり、武甕槌命、經津主命、鹽土翁を祀る、元祿年中伊達綱村の創建にて、奥州第一の大社なり）○嚴島神社（安藝國嚴島にあり、市杵島姫、田心姫、湍津姫を祀れり、本殿は東北に向ひ海上を正面とす、推古天皇二年の創建なり、後平清盛大に之を修營せり）○琴平神社（讃岐國象頭山の半腹に位し大已貴命を祀る、昔は象頭山金比羅大權現と號せしを維新後琴平神社と改む、社殿の壯觀人を驚し、參客常に多し）○産土神（其の土地をまもる神）○兩部神道（眞言宗に胎藏界と金剛界となり、佛者本地垂跡の說に基きて兩部の旨を神道に附會せるものをいふ、例へば、天照大神は大日如來の權化なりといふがごとし）○混雜（まじりあふこと）○附屬（つきしたがふこと）○建立　○讀經祈禱（經をよみて、いのりをなすること）○截然（はつきりとすること）○區別（けぢめ）○神佛混淆（神道と佛道とまじりたること）○しかも（しかれども）○鮮からず　○國祖（國の基を立てさせられたる天皇）○橿原神宮（大和國畝傍山下にあり、神武天皇、及び媛蹈鞴五十鈴皇后を祀る、この地は往古橿原の宮址にて本社は明治二十三年の創建也）○太宰府（筑前國にあり）○天滿宮（筑前國太宰府にあり、祭神菅原道眞公延喜五年始めて神殿を安樂寺に建て同十九年に造營せり天滿自在威德天神の號を奉る）○平安神宮（京都市上京區岡崎町にあり、桓武天皇を祀れり、明治二十七年七月平安神宮の神號を賜ひ、拜殿は有名なる紀念殿にて大極殿に模擬せり）○清樸（きよらかにしてかざりけなきこと）○簡古（つゝまやかなること）○大極殿（八省院の正殿にて即位の大禮を行はせられし所、古へ數度の火災に遭ひ、治承の大火後は全くあとを絶たり、京都上京區西朱雀野村聚樂廻、字瓢箪にこの古跡あり）○華麗（うつくしい）○臺灣神社（臺北芝蘭一堡劍潭山にあり、明治三十三年創立北白川宮殿下の外大國魂命、少彥名命、大國主命を奉祀す）○新領土（新規に領分となりし土地）○鎭護（しづめまもること）

二〇　佛閣

○漸次隆盛（だんだんさかりになること）○平安朝（桓武天皇より、安德天皇までのあひだをいふ）○名院（なだかい寺）○宏刹（大いなる寺）○東大寺（南都七大寺の一、聖武天皇の勅願により、良辨僧正の開基なり）○奈良の大佛（東大寺の本尊盧舍那佛の坐像なり、天平勝寶十五年行基菩薩勅を奉じて天下に勸進し鑄造に着手してより改造八回にして竣工す）○法隆寺（南都七大寺の一、推古天皇十五年聖德太子の建立なり、舊名を斑鳩寺といふ、建立以來毫もその舊形を變ぜず、千三百年前の五重塔、古器物、今猶悉く存在し、本邦第一の古刹なり）○最古（もつとも古きこと）○重寶（たつときたから）○堂塔伽藍（堂宇高塔寺）○繁榮（さかえ）○奈

良七重七堂伽藍八重櫻（奈良は七朝の帝都たりしを以て七重といふ、七堂伽藍は總て寺には金堂、法堂、方丈、僧堂、厨、浴堂、東司、をそなへたるをいひ、八重櫻は人口に膾炙せる「古のならのみやこの八重ざくらけふここのへに匂ひぬるかな」の歌によりて有名なる八重櫻をさしたるなり、その俳句はならよりなゝへとかゝり、七堂といひ、又八重といふ、詞の句調を主にして奈良の景色古蹟を浮ばせたるなり、七重に意義なし）○芭蕉（本名を松尾甚左衛門安房といひ桃青と號し、伊賀の人、津藤堂侯の藩士なり、主侯早世してより遁世の志を懐き、家を出でゝ、季吟の門に入り、江戸深川に庵を結び、芭蕉を植ゑて芭蕉庵と稱す、俳諧の泰斗とし天下後世を風靡し行脚中大坂に歿す年五十）○最澄（延暦寺の開祖なり姓は三津氏江州の人なり、延暦二十一年入唐して佛教の奧義を極め同二十五年歸朝し、弘仁三年歿す、年五十六、後傳教大師と贈謚せらる）○空海（金剛峰寺の開祖本姓佐伯氏、讃岐多度郡の人弱冠にて勤操大師に從ひ入唐し歸朝の後高野山に登り、金剛峰寺を開き、能書の譽高し承和二年寂す、年六十二、後弘法大師と賜謚せらる）○高僧（すぐれた僧侶）○比叡山（山城と近江の國境に聳ゆる山）○延暦寺（天台宗の本山、延暦四年傳教大師の創立にかゝる）○天台宗（佛教八宗の一にて法華經を本經とす、傳教大師支那天台山の智者大師より傳へし宗旨也）○朝廷の御皈依（天皇の御しんかう）○高野山（紀伊國にあり）○金剛峯寺（弘法大師の開基に係る）○撥めて○眞言宗（佛教八宗の一にて、眞如の密言といへり、空海の入唐して傳へし宗なり）○庶民（一般の人民）○信仰○兵燹（いくさの火事）○蓮華八葉の靈場（金剛峯寺をいふ）○顯然

たり○三井寺（天台宗寺門派の總本山なり、大津市別所にあり、昔弘文天皇の御料の庄園なりし故、園城寺といひしが、天智天武持統の三帝降誕の産湯の泉ありし故に御井寺といひ天安中智證大師三井寺と改めたり）○蘭若（寺のこと）○廢墟（ふるきあと）○三井寺の門叩かばや今日の月（今日の月の雅趣なるに促されていざや形勝の地たる三井寺の門を叩きてその風致を賞せんとなり）○形勝の地（けしきのよきところ）○禪宗（佛教の一派にて臨濟、曹洞、黄檗の三宗を總稱す、奈良朝以前に傳來せしが鎌倉のころ榮西道元などの高僧出でゝより大いにおこなはる）○天龍寺（臨濟宗にて京都市下嵯峨にあり）○相國寺（臨濟宗にて、京都市今出川の北烏丸の東にあり）○建仁寺（臨濟宗にて、京都市大和大路四條南にあり）○東福寺（臨濟宗にて、京都市の東部にあり）○萬壽寺（今は廢して無し、址は京都市下京區萬壽寺高倉にあり）○南禪寺（臨濟宗にて、京都市の東部にあり）○金閣寺（禪宗にて、京都市の西北部にあり）○銀閣寺（禪宗にて、慈照寺と號し京都鹿ヶ谷の北にあり）○武門武士（武士を總稱して云へるなり）○建長寺（鎌倉郡山の内にあり、巨福山と號す）○圓覺寺（建長寺の西にあり、瑞鹿山と號す）○壽福寺（鎌倉町扇ヶ谷にあり龜谷山と號す）○淨智寺（鎌倉郡山之内にあり北條師時の創立なり）○法然上人（源空と稱し、姓は漆間、美作の人、十五才にて菩提寺の僧に學び晩年源信法師の往生要集を見て大に喜び淨土宗を唱へ洛東吉水に教を說く、高倉帝より大内に召され建曆二年大谷寺にありて八十才にて寂す）○淨土宗（文治年間法然上人

（の開きしものにて淨土宗より出で淨土三部經を主義とせり）○智恩院《チオンヰン》（京都東山にあり、洛東第一の巨刹にて華頂山大谷寺と號し淨土宗の總本山なり）○東山《ヒガシヤマ》（京都市の東にあたり霊風景佳絶なり）○翠微《スヰビ》（山の色をいふ、また山をいふ）○西本願寺《ニシホングワンジ》（京都市西六條にあり、眞宗本派本願寺派の本山なり、親鸞上人の草創にて、文永九年尉により阿彌陀本願寺の號を賜り歴世勅願所たり）○冠たる者《カンタルモノ》（最も勝れたるもの）○下俗の地《カゾクノチ》（いやしき土地）○民衆《ミンシウ》（一般の人）○渇仰《カツガウ》（深く信じて仰ぎ望むこと）○日蓮上人《ニチレンシヤウニン》（房州の人、十八才の時受戒して眞言を學び後專ら法華經を修め建長五年四月始めて法華一派の宗門を建て安國論を著して諸宗を謗り北條時頼のために伊豆及佐渡に流されしが、歸りて身延山を開き弘安五年十月寂す）○遺跡《ヰセキ》（古跡あと）○關東《クワントウ》（箱根關以東八ケ國の稱へ即ち相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野をいふ）○身延山《ミノブサン》（甲斐國にあり）○久遠寺《クヲンジ》（日蓮上人の開山）○本門寺《ホンモンジ》（武藏國荏原郡池上村にあり日蓮上人入寂の地）○題目《ダイモク》（日蓮にて法華經の題、即ち南無妙法蓮華經の七字の稱）○耳に聒し《カマビスシ》（やかましい）○淺草觀音《アサクサクワンオン》（東京市淺草公園地内にあり、金龍山淺草寺と稱し、本堂は慶安三年徳川家の建立する所、爾來常に幕府にて修繕を加へ來れり堂の廣さ十八間四方あり）○境内《ケイダイ》（神社佛閣に屬せる庭）○參詣《サンケイ》（參ること）○遊覧《イウラン》（見物してあるくこと）○徒《ト》（ともの人々）○雜閙《ザフタウ》（混雜すること）○増上寺《ゾウジヤウジ》（東京市芝公園の地内にあり、三縁山と稱し徳川家の新廟所なり、關東淨土宗の總本山、十八檀林冠首にて古は盛大なりしも維新後衰へ、明治六年凶徒の爲に燒かれ、今の本堂は再建せられたるものなり）○傳通院《デンヅウヰン》（東京市小石川區表町にあり、淨土宗十八檀林の一にて明として慶長二年の建立なり、治四十一年十二月燒失せり）○建立《コンリフ》（立てること）○名刹《メイサツ》（名高き寺）○遊行寺《ユギヤウジ》（相模國藤澤町に在り、藤澤山清淨光寺と號し俣野五郎景平の本願にて、呑海上人の開基たり）○時宗《ジシウ》（淨土宗分派、後宇多天皇の朝一遍上人の創むる所、又融通念佛宗或は遊行派と稱す）○本山《ホンザン》（大もとの寺）○僧侶《ソウリヨ》（坊主）○周遊遍歴《シウイウヘンレキ》（あまねくへめぐること）○遺鉢《イハツ》（物事相傳の義）○善光寺《ゼンクワウジ》（長野市にあり淨土宗の大伽藍なり）○傳説《デンセツ》（傳はりたる話）○膾炙《クワイシヤ》（よく人の口の端に上ること）○牛に引かれて善光寺詣り《ウシニヒカレテゼンクワウジマヰリ》（昔信州善光寺に近き邊に住む慾の媼ありしが隣家の牛放たれ、媼が晒し置ける布を角にかけて善光寺に駈け入りしを媼追ひ行き初めて靈場なるを知り夫より度々參詣して後世を願へりといふ話より起れりと）○陽炎や手に下駄はいて善光寺《カゲロフヤテニゲタハイテゼンクワウジ》（陽炎は春の長閑なる日にチラホラ立ち上りて見ゆる氣をいふ、其の春の頃に跣行者（非ザイ）までも手に下駄をはいて善光寺參りに來るとの意、善光寺に參らば跣行者も立つといふこともあり）○一茶《イツサ》（信濃人、通稱小林彌太郎、俳句の蘊奥を極め、蕭灑にして權門に慣れず、江戸下谷坂谷に住し、俳諧寺と號せり文政十年十一月生國に歸り、六十五にて死す）

二二　日光の月夜《ニツクワウノグワツヤ》

闇を衝《ツ》きて白《シロ》く流《ナガ》る（暗き闇の中を烈しく音を立てゝ流れ白く見ゆるをいふ）○溪流《ケイリウ》（谷のながれ）○眼前《ガンゼン》（目の前）○數株《スウシユ》（數本）

（樹木）○林立（林の如く立てること）○樹間（木の間）○ほの見ゆる（ちらりと見ゆる）○たどり行く（さぐりゆく）○絶壁（がけ）○大谷川（源を中禪寺湖に發し、華嚴瀧となり其末流大谷川となり、日光町の南部を流れ利根川に入る）○脚下（足もと）○神橋（大谷川に架せる有名の橋總朱塗にして長さ十四間幅四間）○雨後（雨のふつた後）○長虹（にじ）○夜色（夜の景色）○微茫（ぼんやりしたること）○田野（はたけ）○陰翳（かげ）○滿面（いつぱい）○さながら（恰も）○山影樹影（山や木のかげ）○些の（少しの）○到る（お[illegible]て）○假橋（かりにかけたる橋）○半桁（橋のけたの半分）○潺湲（水の流るゝ音をいふ）○琴瑟を操る（五十絃なるを琴といひ、二十五絃なるを瑟といふ、水聲の琴瑟を奏づるが如き美音なるをいふ）○激湍（水の岩石等に激する急流）○閃々（きらめくこと）○狀すべき言葉（形容し得べき言葉）○起點（[illegible]）○殿堂（寺と宮）○擁す（いだく）○旅亭（やどや）○挽物（ろくろ細工にて、挽き彫りて造りたる器物をいふ）○軒をつらね甍を並べ（家や屋根等つゞきたるさまをいふ）○眺望臺（物見臺）○登臨（のぼりて見ること）○廢寺（すたれたる寺）○逶迤（山の緩やかにうね〳〵と連續したるさまをいふ）○渺々（ひろ〳〵せるさま）○一刷毛の霞（刷毛にてざつと一刷したるほどの霞）○さわやか（心地よきこと）○坐ろに（何となく）○精神（こゝろ）○尨大（甚だ大なる事）○屹立（つき立てること）○靡く（横に延びる處）○隈取る（月の光ぼかしたる如く美しき處）○凜乎（いかめしきさま）○銀蛇の走るが如く（川の流白く長く銀の蛇の走れる如し）○跼す（ひざまづく）

二二　死して惜しまるゝ人たれ

長す（生長す）○生れがひある（生れたゞけの價値のある）○前途（これからさき）○有爲（役に立つべきこと）○擧國の惜（國民一般擧りて死を痛みてその人を惜む意を致すこと）○呱々の聲（小兒の泣く聲）○成人（一人前の人間）○自營生活（自ら獨立して生活すること）○恩德（[illegible]）○之を近くしては（自分に關係の最も近いのは）○洪恩（大いなる恩）○自營の道（自ら職業を營む法）○自活の道（自ら生計を立つる手段）○晝夜を問はず寒暑を論せず（晝と夜の區別もせず寒い暑さも面倒とせず[illegible]）○心身（精神と身體）○疲勞（つかれ）○千辛萬苦（非常の苦しみ）○保育（まもり育つること）○師長（教師や年上の人）○黑白を辨す

● [illegible]

る頃（漸く黑き白きの區別がわかる頃即ち漸く物の道理がわかりはじむる頃の意）○社會（世の中）○事理（物事の道理）○通德（人の履み行ふべき道）○保全（完全に保つこと）○將來（のちのち）○獨立（自分一己の力にて世に立つこと）○基礎（どだい）○至尊（天皇陛下の尊稱）○仁慈なる大御心（た情深き親心）○愛撫（めぐみいつくしむこと）○宏大（廣く大いなる）○御靈德（美しき御德）○統治（すべをさむること）○各種の機關（種々の活動をなす機械司法、行政等をいふ）○生民（民人）○安寧（平和なること）○維持（保つこと）○福祉（さいはひ）○增進（まし進むること）○凶暴（惡しきこと）○不逞（檢束なく暴慢なること）○慈愛（いつくしむこと）○薰陶（德を以て人を感化すること）○危難（危險や災難）○發育（生長）○生民亂離（人民の亂れてちりぢりになること）○塗炭の苦（塗は泥、炭は火の苦にして、甚しき困苦をいふ）○由なけん（よるべがあるまい）○當然（當りまへ）○義務（身の分限に應じて務めざるべからざる義理）○區々（まちまちいろ〳〵）○修養（學を修め心身を養ふこと）○懶惰（なまけること）○遊蕩（遊びに身をもちくづしてしまりなきこと）○貴重（貴きこと）○[illegible]陸（[illegible]）○體軀（からだ）○生育（そだてあげつること）○無爲無能（何事にも役にたゝぬこと）○生を爲す所以（生活するわけ）○醉生夢死（徒に生れて徒に死するをいふ）○國家の蠹賊（國家を殘害する賊）○裨益（ためになること）○勝る事尠なく（[illegible]もまさって居る）○僅かに（漸く）○經營事業（をさめいとなむ所の事業）○後世に德し（後々の世の爲めになり）○流風遺韻（其の風の殘りひゞき面影の後に影響するをいふ）○動す（心をうごかも動すの意）○理想（完全を望むる絶對的の概念）○進境（技術などの發達すること）○天賦（うまれつき）○能力（心身の力）○善養（よくやしなふこと）○利用（上手に用ふること）○畢生（一生）○鴻恩（大なる恩）○餘裕の綽々（ゆったりと十分に餘裕ありて少しも逼らざるをいふ）○餘澤（後にのこれる恩澤）○一段（一層）○長へに（永久に）○追懷（あとより思ひ出すこと）○期す（心がける）○少壯（若く盛んなること）○待つ所（心待ちにまつこと）○一鄕（一つの里）○助成（助くること）○忠誠（忠義誠實）○闔國民（國民全體）○取る所（なす所）○存否（有るなし）○直接間接（うちつけとほまはし）○進運（進む運命）○國を擧って（國中殘らず）○丈夫の本懷（男子と生れたるものゝ望み）○遼遠（遠きこと）

二三　下瀨火藥

● [illegible]

爆發力（火藥の爆烈する力）○下瀨雅光（現に東京市小石川區白山御殿町に住し東京府北豊島郡瀧野川村なる海軍下瀨火藥製所長たり）○特長（特に勝れたる點）○猛烈（はげしきこと）○永年（ながい間）○變質（性質のかはること）○尋常（あたりまへ）○打擊（うつこと）○榴彈（榴散彈のるい）○小量（わづか）○綿火藥（綿花を硝酸と硫酸との化合物に浸して製し、外觀綿花に似たれども點火する時は急劇にもえ、又密閉器中にて打擊すれば烈しく爆發す）○裝塡（彈丸をこめること）○貯藏（貯へておくこと）○優に（充分）○怖るべき（非常なる）○好成績（よき結果）○舷側（ふなべり）○模擬（なぞらふること）○充塡（彈丸などをこめること）○粉碎（こな〳〵にくだかるゝこと）○濛々（烟こんでぼんやりせるさま）○物色を辨せず（物の色がわからぬ）○させる（さほどの）○慘狀（ひどいさま）○防材（敵を防ぐための材木）○尺角（一尺四方四角なること）○災害（うけたる損害）○破片（やぶれたかけ）○角度（彈丸の破裂したる中心點に於て開ける角度）○傷害（きづゝくこと）○破壞作用（こわす所のはたらき）○一歩々々相前後す（一足位宛後に先になりて）○競進（きそひすゝむこと）○威力（勢力）○無上（此の上なきこと）○論なし（云ふまでもない）○徵するに（證據をもて考へて見るに）○攻擊力（敵を攻めうつ力）○甲鐵艦（甲鐵製の軍艦）○精粗（くはしきとあらきと）○作戰（戰をなすこと）○技術（わざ）○心膽（あ）○兵器（軍の道具）○死物（命あつて自ら活動するものならざるもの）○活用（いかして用ふ、役に立つやうにつかふ）

二四　狂熱

○畫工（ゑかき）○火災（火事）○一物（一つのもの）○火焰（ほのほ）○熟視（よくよく見ること）○傍人（そばに居る人）○所持品（所有物）○烏有に歸す（燒け盡してなくなつてしまふ）○不動明王（不動尊）○秘訣（おくぎ）○世俗の目して狂熱となす所（世間の俗人から見てきりちがひと思ふところ）○蒲生君平（名は秀實君平は字なり、下野の人、江戸に出でゝ山本北山に學び慨然經世の志あり、山陵志を作り、邊防の事を年じ又職官志を撰す、文化十年七月歿す、四十六）○座客（座にある客人）○辯駁（他の議論を云ひやぶること）○異臭（妙なにほひ）○迸る（とびちる）○そがまゝ（そのまゝ）○器皿（食器小皿）○大成（立派に成功すること）○崇拜（あがめ尊ぶこと）○萬古（永久）○勤王家（世の亂るゝ時に眞心を以て皇室に忠義を盡くす人）○傑作（すぐれたる作品）○這般の消息（そこらのやうす）○苟偸（なほざりにす

せること○私利を營む（自分一己の利をはかる）○利口連（口先のうまい連中）○事實（まこと）○超脫（ぬけ出て居ること）○熱する（熱中すること）○冷却（さめること）○域に到る（所まで至りつく）○奇功（ふしぎなてがら）○常識（普通の事物に對すき適應の智あり）思想感情等常規に適ひ、萬事に行き届きたるを常識ある人といひ、之に反して智識一方に偏し一般世上の事物に疎く、常理に外れたるを常識なき人といふ○價値（ねうち）○平凡（なみ）○通俗（世俗に通ずること）○小器用（手先の一寸きくこまき器用）○利害（損得）○打算（かんぢやうすること）○失敗（しくじり）○成功（事業をなしとぐること）○一望平野高山なく大川なし（見た所平たい野原のみにて高山も大川もなく極めて變化なければ趣味價値なき如く人世の平凡なるはだめなりとの意）○落莫（さびしきこと）

二五　平清盛と源頼朝

○平清盛（入道して淨海といふ世に太政入道と稱す、忠盛の長子、保元の亂に鳥羽天皇に屬し軍功により播磨守に任ぜられ、累進して從一位太政大臣に至る、養和元年卒す、年六十四）○源頼朝（義朝の第三子、十三才の時右兵衛權佐となり、父と共に藤原信賴に黨し、軍敗れ擒へられて伊豆蛭島に流されしが、後以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ平氏を討ち、藤原泰衡を亡ぼして幕府を鎌倉に開き右兵衛大將、天下總追捕使、征夷大將軍に任ぜられ正治元年卒す、年五十三）○傾向（性質のかたより）○感情に馳す（情によりて行動をなす性をいふ）○慾念を縱にす（慾望を思ふまゝにする）○順境（世間境遇共に自己の思ふまゝになりゆく場合をいふ）○意氣揚々（意が上って得々たるさま）○逆境（順境の反對）○懊惱煩悶（逆境に當りてなやみ苦み煩ひもだゆるをいふ）○從容（悠々落ち着きて迫らざるさま）○事を圖る（物事を仕來す方）○近臣（主君の側近く仕ふる臣下）○成親（藤原成親なり、平康頼、僧俊寬等と後白河法皇を奉じて平氏を亡さんとして事露れ備前に流されしが後殺されたり）○擧權（全權、總べての權利）○非理（道理に外れて居ること）○眞情（まことの心）○平族（平家の一族）○除外例（通例の者の異る例外なかまはづれの意）○憂悶（うれひもだゆること）○一時を快とす（一時の快樂を得んとする）○前途（行く末）○虞る（心配する）○適切（よくあてはまること）○喜怒（喜び又は怒ること）○色に形れず（顏色に出さぬ）○前路（行く先）○考慮（かんがふること）○横はる（困難）艱苦等の人生の道に横になりて邪魔になるをいふ○機會に乘ずべきあり（つけこんで事をなすべきよき場合である）○輕々しく（輕率に）○富士川に平氏と對陣し（平維盛の頼朝を討たんため東下せし時頼朝黄瀨川に進み、武田信義をして夜維盛の陣後に出でしめし事を指す）○對陣（相向ひて陣する事）